烏帽子折

梗概

金賣吉次信高、弟吉六と共に奥州へ下らんとする所に、牛若丸鞍馬寺より下りて、同行を求め、江州鏡の宿にて、烏帽子折のもとに到りて左折の烏帽子を折らしめ、その禮に刀を與ふ。烏帽子折の妻なる者鎌田正清の妹とて、思ひも寄らぬ對面あり。やがて美濃の赤坂の宿に著く。時に熊坂長範の一黨夜討に來りしを、牛若散々に斬り廻りて、遂に長範をも討取るといふ筋也。前の熊坂と併せ見るべし。（五番目）

前シテ　烏帽子屋亭主　後シテ　熊坂
前シテ　烏帽子屋の妻　後ツレ　手下共（大勢）
子方　牛若丸　ワキ　三條の吉六
ワキツレ　弟吉六

ワキ、ワキツレ次第謡「末も東の旅衣、末も東の旅衣、日も遥々と急ぐらん。ワキ詞「是は三條の吉次信高にて候。我この程數の寶を集め、弟にて候吉六を伴なひ、只今東へ下り候。如何に吉六、

高荷―大荷物
粟田口―逢ふを言掛く
蔦屋の床―鞠九の故事
守山―漏るを言掛く
早打―早飛脚

高荷どもを集め東へ下らうずるにて候。吉六詞「委細心得申し候。やがて御立ち有らうずるにて候。

牛若詞「なう〳〵あれなる旅人、奥へ御下り候はど御供申し候はん。ワキ詞「やすき間の御事にて候へども、御姿を見申せば、師匠の手を離れ給ひたる人と見え申して候程に、思ひも寄らぬ事にて候。牛若詞「いや我には父もなく母もなし。師匠の勘當蒙りたれば、謡只伴なひて行き給へ。ワキ謡「この上は辭退申すに及ばずして、この御笠を參らすれば、牛若謡「牛若この笠おつ取つて、今日ぞ始めて憂き旅に、地謡「粟田口松坂や。四の宮河原逢坂の、關路の駒の跡に立ちて、いつしか商人の主從なるぞかなしき。上歌藁屋の床の古、藁屋の床の古、都の外の憂き住まひ。さこそはと、今思ひ粟津の原を打過ぎて、駒もとどろと踏み鳴らし、勢田の長橋打ち渡り、野路の夕露守山の、下葉色照る日の影も、傾く方に向ふ夕月夜、鏡の宿に著きにけり。鏡の宿に著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、鏡の宿に著きて候。この所に御休みあらうずるにて候。狂言レカ〳〵、牛若詞「只今の早打をよくよ

く聞き候へば、我等が身の上にて候。この儘にては叶ふまじ、急ぎ髪を切り烏帽子を著、

東男―關東の田舎者

謡 東男に身をやつして下らばやと思ひ候。詞 如何にこの内へ案内申し候。レテ詞「誰にて渡り候ぞ。牛若詞「烏帽子の所望に參りて候。レテ詞「何と烏帽子の御所望と候や、夜中の事にて候程に、明日折りて參らせうずるにて候。牛若詞「急ぎの旅にて候程に、今宵折りて賜はり候へ。レテ謡「さらば折りて參らせうずるにて候。先づ此方へ御入り候へ。さて烏帽子は何番に折り候べき。牛若詞「三番の左折に折りて賜はり候へ。レテ詞「是は仰せにて候へども、それは源家の時にこそ、今は平家一統の世にて候程に、左折は思ひもよらぬ事にて候。牛若詞「仰せは尤にて候へども、思ふ子細の候間、只折りて賜り候へ。レテ詞「幼き人の御事にて候程に、折りて參らせうずるにて候。この左折の烏帽子に付いて、嘉例めでたき物語の候、語つて聞かせ申さうずるにて候。牛若詞「さらば御物語候へ。レテ詞「さても某が先祖にて候者は、元は三條烏丸に候ひしよな。いでその頃は八幡太郎義家、安倍の貞任宗任を御追伐あつて程なく都に御上洛あり、某が先祖にて候者

折りて―烏帽子を作ることを折るといふ

左折の烏帽子―烏帽子の頂を左へ折返すこと源氏は左折平氏は右折

なのめに―今いふ斜ならずの意

引出物―下され物元は馬を引き出して贈れるよりいふ

烏帽子櫻―櫻の名

三色組―白赤青の組緒

に、この左折の烏帽子を折らせられ、君に御出仕有りし時、帝なのめに思召し、その時の御恩賞に、奥陸奥國を賜つて候。我等もまたその如く、嘉例めでたき烏帽子折にて候へば、謡 この烏帽子を召されて程なく御代に、地謡「出羽國の守か、陸奥の國の守にか、ならせ給はん御果報有つて、世に出で給はん時、祝言申しょ烏帽子折と、召されて目出度う、引出物賜ばせ給へや。あはれ何事も、昔なりけり御烏帽子の、左折のその盛、源平兩家の繁昌、花ならば梅と櫻木、四季ならば春秋、月雪の詠め何れぞと、爭ひしにやいつの間に、保元のその以後は、平家一統の、代となりぬるぞ悲しき。よしそれとても報いあらば、世變り時來り、折知る烏帽子櫻の花、咲かん頃を待ち給へ。レテ謡「かやうに祝ひつょ、地謡「程なく烏帽子折り立てて、花やかに三色組の、烏帽子懸緒取り出だし、氣高く結ひ濟まし、召されて御覽候へとて、御髪の上に打ち置き、立ち退きて見れば、あつぱれ御器量や、是ぞ弓矢の大將と申すとも不足よもあらじ。レテ詞「日本一烏帽子が似合ひ申して候。牛若詞「さらば此刀を參らせうずるにて候。レテ詞「い

やいや烏帽子の代りは定まりて候程に、思ひもよらず候。牛若詞「只御取り候へ。レテ詞「さらば賜はらうずるにて候。さこそ妻にて候ものの悦び候はん。如何に渡り候か。ツレ「何事にて候ぞ。レテ詞「幼き人の烏帽子の御所望と仰せ候程に、折りて参らせ候へば、この刀を賜はりて候。なんぼう見事なる代りにてはなきか。よく〳〵見候へ。あら不思議や、かやうの事をば天の與ふる事とは思ひ給はで、さめ〴〵と落涙は何事にて候ぞ。ツレ詰「恥しや申さんとすれば言の葉より、まづ先だつは涙なり。クドキ今は何をか包むべき、是は野間の内海にて果て給ひし、鎌田兵衛正清の妹なり。常磐腹には三男、牛若子生れさせ給ひし時、頭の殿よりこの御腰の物を、御守刀にとて参らせ給ひし、その御使をば、わらは申してさむらふなり。痛はしや世が世にてましまさば、かく憂き目をば見まじきものを、あらあさましや候。

レテ詞「何と鎌田兵衛正清の妹と仰せ候か。ツレ詞「さん候。レテ詞「言語道斷。この年月添ひ参らすれども、今ならでは承らず候。さてこの御腰の物をしかと見知り申されて

こんねんだうー古年刀にて古刀の事かと云ふ

衙磨の徒歩ー播州衙磨にて裸といふ染物を出すよりかく言掛けたり

候か。ツレ詞「こんねんだうと申す御腰の物にて候。レテ詞「實に〳〵承り及びたる御腰の物にて候。さては鞍馬の寺に御座候ひし、牛若殿にて御座候な。さあらば追つ付き、この御腰の物を参らせ候べし。おことも渡り候へ。や、いまだ是に御座候よ。是に女の候が、この御腰の物を見知りたる由申し候程に、召し上げられて賜はり候へ。牛若詞「不思議やな行くへも知らぬ田舎人の、我に情の深きぞや。レテ、ツレ詰「人違へならば御免しあれ、鞍馬の少人牛若君と、見奉りて候なり。牛若詰「實に今思ひ出だしたり。若し正清がゆかりの者か。ツレ詰「御目の程の賢さよ。わらはは鎌田が妹に、牛若詰「あこやの前か。ツレ詰「さん候。牛若詰「實に知るは理我こそは、地詰「身のなる果の牛若丸、人がひもなき今の身を、語れば主從と、知らるゝ事ぞ不思議なる。

ロンギ地詰「はや東雲も明け行けば、はや東雲も明け行けば、月も名殘の影うつる、鏡の宿を立ち出づる。シテ、ツレ詰「痛はしの御事や。さしも名高き御身の、商人と伴ひて、旅を飾磨の徒歩跣足、日もあてられぬ御風情。牛若詰「時代に變る習ひとて、世のため身をば捨衣、

白波―盗賊のこと

恨みと更に思はじ。シテ謡「東路の御はなむけと、思召され候へとて、地謡「この御腰の物を、強ひて參らせ上げければ、力なしとて請け取り、我若しも世に出づならば、思ひ知るべしさらばとて、商人と伴ひ憂き旅に、やつれはてたる美濃國、赤坂の宿に著きにけり。赤坂の宿に著きにけり。ワキ謡「急ぎ候程に、赤坂の宿に著きて候。如何に吉六、この所に宿を取り候へ。吉六詞「畏つて候。（中入）ワキ詞「是は何と仕り候べき。吉六詞「我等も是非を辨へず候。牛若詞「面々は何事を仰せ候ぞ。ワキ詞「さん候我等この所に泊り候を、このあたりの悪黨ども聞き付け、今夜夜討に討たうずる由申し候程に、さやうの談合仕り候。牛若詞「縦ひ大勢ありとても、表にたよん兵を、五十騎ばかり切り伏すならば、やはか引かぬ事は候まじ。ワキ詞「是は頼もしき事を仰せ候ものかな。悉皆頼み候。牛若詞「面々は物の具して待ち給へ。謡我は大手に向ふべしと、地謡「夕も過ぎて鞍馬山、夕も過ぎて鞍馬山、年月習ひし兵法の、術を今こそは、現し衣の妻戸を、開きて沖つ白波の、打入るを遲しと待ち居たり。打入るを遲しと待ち居たり。

松明の占手―松明を投げて首尾を占ふこと

ツレ大勢一聲謡「寄せかけて、打つ白波の音高く、鬨を作つて騒ぎけり。シテ詞「如何に若者ども、ツレ詞「御前に候。シテ詞「大手がくわつと開けたるは、内の風ばし早いか。ツレ詞「さん候内の風早くして、或は討たれ、又は重手負ひたると申し候。シテ詞「不思議やな内には吉次兄弟ならでは有るまじきが、さて何者かある。ツレ詞「投松明の影より見候へば、年の程十二三ばかりなる幼き者、小太刀にて切つて廻り候は、さながら蝶鳥の如くなる由申し候。シテ詞「さて摺針太郎兄弟は、ツレ詞「是は火振の親方として、一番に切つて入りしを、例の小男渡り合ひ、兄弟の者の細首を、只一打に打ち落したる由申し候。シテ詞「えい〳〵何と何と。彼の者兄弟は、餘の者五十騎百騎には増さうずるものを。謡あよ斬つたり〳〵、詞彼奴は曲者よ。ツレ詞「高瀬の四郎は之を見て、今夜の夜討悪しかりなんとや思ひけん、手勢七十騎にて退いて歸りて候。シテ詞「きやつは今に始めぬ臆病者。さて松明の占手は如何に。ツレ詞「一の松明は切つて落し、二の松明は踏み消し、三は取つて投げ歸して候が、

三つが三つながら消えて候。レテ調「それこそ大事よ。夫松明の占手といつば、一の松明は軍神、二の松明は時の運、三は我等の命なるに、三つが三つながら消ゆるならば、今夜の夜討はさてよな。ッレ調「御諚の如く、このまゝにては鬼神にてもたまるまじく候。只退いて御歸り候へ。レテ調「實に〳〵盗も命の有りてこそ。いざ退いて歸らう。ッレ調「尤もにて候。レテ謡「いや熊坂の長範が、今夜の夜討を仕損じて、何くに面を向くべきぞ、謡只攻め入れや若者どもと、大音あげて呼ばはりけり。地謡「閧を作つて切つて入りけり。

あち物々しや―牛若の心中を語る

地謡「あら物々しやおのれ等よ、あら物々しやおのれ等よ、先に手竝は知りつらん、それにも懲りず打入るか。八幡も御知見あれ、一人も助けてやらじものをと、小口に立つてぞ待ちかけたる。

大鳥歩み―大股に歩くこと

地謡「熊坂の長範六十三、熊坂の長範六十三、今宵最後の夜討せんと、鐵扇を踏ん脱ぎ捨て、五尺三寸の大太刀を、するりと拔いて打ちかたけ、大鳥歩みにゆらり〳〵と、歩み出でたる有様は、如何なる天魔鬼神も面を向くべき樣ぞなき。

めだれ顔―見苦しき意歟

地謡「あらはか〴〵しや盗人よ、あらはか〴〵しや盗人よ。めだれ顔なる夜討はすゝるとも、我には叶はじものをとて、透間あらせず切つてかゝる。熊坂も大太刀使の曲者なれば、さそくをつかつて十方切、八方拂や腰車、破扒の返し、風まくり、劔降らしや獅子の齒がみ、紅葉重、花重、三つ頭より火を出だして、鎬を削つて戰ひしが、祕術を盡す大太刀も、御曹司の小太刀に切り立てられ、請太刀となつてぞ見えたりける。

十方切―以下劍術の法

三つ頭―きつさき

御曹司―牛若のこと

地謡「打物業にて叶ふまじ、打物業にて叶ふまじ、組んで力の勝負せんとて、太刀投げ捨てて、大手を廣げて飛んでかゝるを、背けて諸膝薙ぎ給へば、切られてかつぱと轉びけるが、起き上らんとてつつ立つ所を、眞向よりも割りつけられて、一人と見えつる熊坂の長範も、二つになつてぞ失せにける。

二つになつて―眞二つに斬られたること

大瓶猩々

梗概　かうふうといふ酒賣る男の孝行なるをめでて、猩々多く現れ來り、汲めどもつきせぬ大瓶の酒泉を授けめでたく舞ひ納む。上卷の猩々に相似たり（五番目―留）

シテ　猩々（前は童子）　後ツレ　猩々
ワキ　かうふう

ワキ詞「是は唐かねきん山の麓に、かうふうと申す民にて候。我親に孝有るにより、次第次第に富貴の家と罷り成りて候。又この間何處とも知らず童子數多來り、某が酒を買ひ取り候。今日も來りて候はど、如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。シテ一聲謡「わたづみの、そことも知らぬ波間より、現れ出づる日影かな。ワキ詞「今日の市人は何とて遲く來り給ふぞ。シテ詞「嬉しやさらばと内に入り、謡いつもの酒を愛しけり。上歌地謡「琴詩酒と、聞くも隔てぬ友人の、聞くも隔てぬ友人の、いつも變らぬ酒功贊に、酒を愛せし來し方の人の心にひきかへて、是は琴にも盃、詩を作るにも盃、只酒飲の友ばかり。恥しやさこそげに、市人の我を笑ふらん。ワキ詞「この程は何處の人とも辨へず、今日は御名を名のり在しませ。シテ詞「今は何をか包むべき、是は潯陽の江に年久しき、猩々と云へる者なるが、御身親に孝有るにより、天の哀れみ深ければ、泉の壺を與へんなり。謡疑ひ給ふなかうふうと、地謡「夕の空も近ければ、夕の空も近ければ、暇申してさらばとて、行くかと見ればさにぬりの、面も赤く樣變りて、市人に立紛れて、跡も見えずなりにけり。跡をも見せずなりにけり。（中入）

地謡「御酒と聞く、御酒と聞く、名も冷しく秋の來て、暖め酒と菊月の、頃も早紅葉の、早色づくか一重山、薄き紅葉ば色々の、菊の盃する忍置き、秋の夜深く待ちけるに、ツレ二人謡「不思議やこの友の、地謡「不思議やこの友の、來らぬは覺束な、沖に向ひて我が友の、など遲なはり給ふぞや、急ぎ給へ友人。又猩々はあらはれ出でて、又猩々は現れ出でて、彼のかうふうに、妙なる泉を與へんとて、波間を分けて潯陽の江の、汀も近く現

わたづみ―海のこと
市人―童子をさす
琴詩酒―白氏文集に之を三友と云へり
酒功贊―同書にあり酒をほめたる文
さにぬり―丹塗
菊月―九月
菊の盃―重陽の嘉例

れたり。地謡「頃は秋の夜月おもしろく、頃は秋の夜月おもしろく、汀の波も更け靜まりて、數多の猩々大瓶に上り　泉の口を取るとぞ見えしが、涌き上り涌き流れ、汲めども汲めども盡きせぬ泉、何れも戯れ舞ふとかや。（中ノ舞）シテ謡「菊の露、積りて盡きぬこの泉、地謡「盡きせぬ宿に、シテ謡「返し授け置き、地謡「是迄なりや、醉伏す夢の、覺ると思へば又起上り、命長柄の柄杓の酒を、道俗男女に殘さず進め、もとの泉に收りければ、何れも何れも、足もとはよろ〳〵と、繰言茂く、千秋萬歳君千代までと、千秋萬歳君千代までと、榮る御代こそめだたけれ。

菊の露云々―拾遺集に「我宿の菊の白露ふ毎に幾世積りて淵となるらん」

外八

鶴龜

梗概　一名月宮殿といふ。年の初のめでたき儀式に鶴龜の舞を叡覽ある事を作る。祝言の曲なり。朗詠集の長生殿裏春秋宮、不老門前日月遲の語意を前後に用ひたり。（脇能）

シテ　皇帝　ワキ　大臣

レテ、サシ謡「夫れ青陽の春になれば、四季の節會の事始、地謡「不老門にて日月の、ひかりを天子の叡覽にて、シテ謡「百官卿相に至るまで、袖を連ね踵を接いで、地謡「その數一億百餘人、シテ謡「拜を進むる萬戸の聲、地謡「一同に拜するその音は、シテ謡「天に響きて、地謡「夥し。上歌庭の砂は金銀の、庭の砂は金銀の、玉をつらねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃の欄、硨磲の行桁瑪瑙の橋、池の汀の鶴龜は、蓬萊山もよそならず、君の惠ぞ有

青陽―春のこと　節會―朝廷にて行はせらるゝ儀式

廂の砂は―以下禁廂の莊嚴なる形容金銀瑠璃硨磲瑪瑙は七寶の内

蓬萊山―仙人の住む島

難き。君の恵ぞ有難き。

ワキ詞「いかにも奏聞申すべき事の候。毎年の嘉例の如く、鶴亀を舞はせられ、其後月宮殿にて舞樂を奏せられうずるにて候。シテ詞「ともかくも計らひ候へ。地謡「亀は萬年の齢を經、鶴も千代をや重ぬらん。（中ノ舞）千代のためしの數々に、千代のためしの數々に、何を引かまし姫小松の、緑の亀も舞ひ遊べば、丹頂の鶴も一千年の、齢を君に授け奉り、庭上に參向申しければ、君も御感の餘りにや、舞樂を奏して舞ひ給ふ。（樂）ヤリ月宮殿の白衣の袂、月宮殿の白衣の袂の、色々妙なる花の袖、秋は時雨の紅葉の葉袖、冬はさえ行く雪の袂を、翻へす衣も薄紫の、雲の上人の舞樂の聲々に、霓裳羽衣の曲をなせば、山河草木國土豊に、千代萬代と舞ひ給へば、官人駕輿丁御輿を早め、君の齢も長生殿に、還御なるこそめでたけれ。

姫小松―小松を引くは正月子の日の嘉例なり

雲の上人―百官卿相をいふ

和布刈

梗概

早鞆明神にて大晦日に和布刈の神事行はるゝことを以て脚色す。初め神職出でて神事を行ふ事を述ぶる所に、漁翁海士あらはれ、神德を讃歎し、龍宮の故事を物語る。やがて二人は龍神天女と現じて、奇特を見す。（脇能）

シテ　龍神（前は漁翁）　ツレ　天女（前は海士）
ワキ　早鞆神職

ワキ次第謡「今日早鞆の神祭、今日早鞆の神祭、盡きせぬ御代ぞめでたき。ワキ詞「そも〳〵是は長門國早鞆の明神に仕へ申す神職の者なり。さても當社に於いて御祭さま〳〵御座候中にも、十二月晦日の御神事をば、和布刈の御神事と申し候。今夜寅の時に至つて、龍神潮を守護し、波四方に退いて平々たり。その時神主海中に入つて、水底の和布を刈り神前に供へ申し候。殊に當年は不思議の奇瑞御座候間、いよ〳〵信心を致し、御神事

和布―めとは海藻の總名

年の極め―一年の最終

蘊藻の禮賓―和布を供物として祭ること

海士のしわざ―漁業

かひ有るべしや―具に効の意をかく

を執りおこなはばやと存じ候。サシ謡有難や今日早鞆の神の祭、年の極めの御祭と言つば、又新玉の年の始めを、祝ふ心は君が爲、上歌春の野に出でて摘む若菜、春の野に出でて摘む若菜、生ひ行く末の程もなく、年は暮るれど綠なる、和布刈の今日の神祭、心を致しさまざまに、君の恵を祈るなり。君の恵を祈るなり。

レテ、ツレ一聲謡「天地の開けし御代は久堅の、神と君との御影かな。ツレ謡「今日に廻るも早鞆の、レテ、ツレ謡「共に暮れ行く年なれや。レテ、サシ謡「有難やそれ秋津洲の内において、神所の御祭さまざまなれども、レテ、ツレ謡「此早鞆の神祭、世界わたづみ隔てなくて、蘊藻の禮奠感應の、海松藻浮藻の花も咲く、波をかざしの手向草、塵に交る神心、誓に漏るゝ方もなし。下歌歩みを運ぶこの神に、いざ結緣をなさうよ。上歌所は早鞆の、所は早鞆の、ゆききの舟楫もを絶え、數々の捧物、海士のしわざに至るまで、かひあるべしや志、それこそ花の手向なれ。それこそ花の手向なれ。

ワキ謡「不思議やな夕影すぐる神の御前に、手向を捧ぐる人影は、そもや如何なる人やらん。ツレ謡「是は賤しき海士少女の數には有らぬ憂き身なるが、手向を捧ぐるばかりなり。レテ謡「我は又年經て住める此浦の、漁翁の罪を恐るゝ故、賤しき者は輕き身を、浮めんためにて候なり。ワキ謡「なかなかなれや鱗までも、誓に漏れぬこの浦の、レテ謡「海士の漁火焦がるとも、レテ、ツレ謡「和光の影は曇無く、地謡「明らかなれや天地の、開けし御代の如くにて、直なるべき人心、いやましの瑞驗、あらはれにけるぞ有難き。上歌海原や、博多の海も程近く、博多の海も程近く、汐引島も見え渡る、早鞆の友千鳥、沖の鷗の群れ立つや、春秋の、雲居の雁も留め得ぬ、誰が玉章の門司の關守と、詠みし心も理や。詠みし心も理や。

クリ地謡「それ地神第四の御代、火々出見尊、豐玉姬と契をなし、海陸の隔て無かりしに、レテ、サシ謡「その御産の時豐玉姬、尊に向ひ宣はく、地謡「産期に於て我が姿を、敢て見給ふ事なかれと、御約諾の詔、互に固く誓ひ給ふ。クセ然れども時至り、さすがに御氣色いぶかしく思しけるかとよ。かいまみえせさせ給ひしを、いとあさましと恨みかこち、

鱗―魚類のこと

春秋の云々―新勅撰集の歌

海陸の隔て―人間界と龍宮界との間をいふ

長く海路の通ひを、たち隱す波の玉の御子を、捨てつゝ豐玉姫は、宮に入り給ふ。その後潮さしひきの、朝暮の時はありながら、人畜類の生を背き、境をさかりにき。

シテ謡「然れば神代の昔より、地謡「この早鞆の神祭、神慮普き誓なれや。上は非想の雲の上、下は下界の龍神まで、渴仰の心中、まことに深き蒼海を、陸地になしてこの國の、長門の通ひ隔てもなき、海藏の御寶も、心の如くなるべし。

ロンギ地謡「げにや心の如くにて、げにや心の如くにて、この結緣もさまゞの、人の願の無かるべき。ツレ謡「今は何をか包むべき、我が住む方は久方の、地謡「天つ少女の雲の袖、シテ謡「かざしの花の手向草、地謡「色こそ變れ、シテ謡「わたづみの、地謡「花は波路の底より、龍宮の捧げもの、天地ともに渴仰の、天つ少女は雲に乘れば、翁は老の波に、隱れ入り給ひけりや。隱れ入らせ給ひけり。（中入）

地謡「汀に神幸なり給へば、汀に神幸なり給へば、虛空に音樂、松風に和して、皎月照らし異香薫ずる龍女は波をもかざしの袖を、返すも立ち舞ふ袂かな。

（思想―天上界）

（海藏―海中に藏せる寶）

（こゆるぎの云々―古今集に「こゆるぎの磯たちなちし磯菜つむめざしぬらすな沖にをれ波」めざしは少女のこと）

（天女舞）天女謡「さる程に〳〵、地謡「和布刈の時至り、虎嘯くや風早鞆の、龍吟ずれば雲起り雨となり、潮も光り鳴動して、沖より龍神現れたり。龍神すなはち現れて、龍神すなはち現れて、シテ謡「和布刈の所の水底を穿ち、地謡「拂ふや汐瀨に、こゆるぎの磯菜摘む、シテ謡「めざし濡らすな沖に居れ波。地謡「沖に居れ波と夕汐を退け、屏風を立てたる如くに分れて、海底の砂は平々たり。（舞）

ワキ謡「神主松明振りたてよ、地謡「神主明松振りたてゝ　御鎌を持つて岩間を傳ひ、つたひ下つて半町ばかりの、海底の和布を刈り、歸り給へば程なく跡に、汐さし滿ちて、もとの如く荒海となつて、波白妙のわたづみ和田の原、天を浸し、雲の波煙の波風、海上に收まれば、蛇體は龍宮に飛んでぞ入りにける。

大社

梗概　或る宮人、都より出雲に向ひ、大社にて十月に諸神集ひ給ひて神事あるに詣でられ、大神及び天女龍神の奇特に逢はるることを作る。（脇能）

シテ　杵築大神（前は宮人）　前ツレ　宮人
後ツレ　天女　後ツレ　龍神
ワキ　臣下

神有月―十月を神無月と稱ふより其字によりて諸國の神々出雲

三人　次第謡「誓数多の神祭、誓数多の神祭、出雲國を尋ねん。ワキ詞「そも〳〵是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても出雲國に於て、今月は神有月とて諸神影向成り、御神事さま〳〵の由承り及び候程に、この度參詣仕り候。三人　道行謡「朝立つや、旅の衣の遙々と、旅の衣の遙々と、行方しぐるゝ雲霧の、山又山を越え過ぎて、神有月も名にしおふ、出雲國に著きにけり。出雲國に著きにけり。

大社に集り給ふとの俗說あり隨て出雲にては神有月といふなり八雲たつ云々―素盞嗚尊の御歌を引く

大社―杵築大社とて大國主神を祭る

シテ、ツレ一聲謡「八雲立つ、出雲八重垣妻こめし、宮路に運ぶ歩みかな。ツレ謡「尾上の松の梢まで、シテ、ツレ謡「神風誘ふ聲ならん。シテ、サシ謡「實にや濁世の人間と、生れ來ぬれど誓ひある、シテ、ツレ謡「神に仕ふる身にしあれば、漏れぬ恵にかゝりきて、心のまゝの春秋を、送り迎へて年月の、盡きせぬ世々を頼むなり。下歌いざや歩みを運ばん。いざや歩みを運ばん。上歌いづくにか、神の宿らぬ陰ならん。神の宿らぬ陰ならん。嶺も尾上も松杉も、山河海村野田、殘る方なく神のます、御蔭を受けて隔て無き、宮人多き往來かな、宮人多き往來かな。

ワキ詞「我出雲國大社に參り、案内をうかがふ所に、宮人あまた來れり。如何に方々に申すべき事の候。シテ詞「是はこのあたりにては見馴れ申さぬ御事なり、いづくよりの御參詣にて候ぞ。ワキ詞「さん候是は朝に隙なき身なれども、當國に於て今月は神有月とて、諸神殘らず影向の地と承り及びて候へば、この度君に御暇を申し、遙々參詣申したり。ツレ謡「實に有難や神と君との、ワキ謡「隔て無き世のしるしとて、シテ謡「歩みを運ぶこの神の、

ワキ謡「恵普き、シテ謡「月影も、上歌地謡「神の世を、思ひ出雲の宮柱、思ひ出雲の宮柱、ふとしき立ちて敷島の、大和島根まで、動かぬ國ぞ久しき。實にや紅も、深くなり行く梢より、しぐれて渡る深山邊の、里も冬立つ氣色かな、里も冬立つ氣色かな。

三十八社―大社附屬の末社等を數へていふ

ワキ詞「不知案内の事にて候へば、當社の神祕委しく御物語り候へ。クリ地謡「そも〳〵出雲國大社は、三十八社を勸請の地なり。シテ、サシ謡「然るに五人の王子おはします。地謡「第一はあじかの大明神と現れ給ふ。山王權現是なり。シテ謡「第二には湊の大明神、地謡「九州宗像の明神と現れ給ふ。第三は伊奈佐の速玉の神、常陸鹿島の明神とかや。クセ第四には鳥尾の大明神、信濃の諏訪の明神と、即ち現じおはします。第五には出雲路の大明神、伊豫の三島の明神と、現れ給ふ御誓、實に曇無き長月や、月のみそかにとりわきて、シテ謡「住吉一所は影向なる。地謡「殘の神々は、十月一日の寅の時に、悉く影向なり、さまざまいろ〳〵の神遊、今も絶えせぬこの宮居、語るもなか〳〵愚なる誓なるべし。

宗像―三女神

三島の明神―大山祇神

ロンギ地謡「實に有難き物語、實に有難き物語、末世ながらも隔て無き、神の威光ぞあらたなる。シテ謡「なか〳〵なれや年々に、今日の今宵の神遊、地謡「その役々も、シテ謡「數々に、地謡「あらぶる神達の舞歌の袖、引くや御注連の名は誰と、白木綿かゝる玉垣に、立ち寄ると見えつるが、神の告ぞと言ひ捨てゝ、社壇に入りにけり。社壇の内に入りにけり。（中入）

十羅刹女―鬼神

地謡「しぐるゝ空も雲晴れて、月も輝く玉の御殿に、光を添ふる氣色かな。天女謡「我は是れ、出雲の御崎に跡を垂れ、佛法王法を守の神、本地十羅刹女の化現なり。地謡「容顔美麗に女體の神、容顔美麗の女體の神、光も輝く玉の簪、かざしも匂ふ袂を返す、夜遊の舞樂はおもしろや、（天女舞）實に類無き舞の袖、實に類無き舞の袖、靡くや雲の絶間より、諸神は殘らず現れ給ひ、舞樂を奏し神前に飛行し、早疾く姿を現し給へと、夕べの月も雲晴れて、光も朱の玉垣輝き、神體現れおはします。

相好―姿

ロンギ地謡「實にや尊き御相好、實にや尊き御相好、まのあたりなる神德を、受くるも君の恵かな。レテ謡「とても夜遊の神祭、委しくいざや現し、彼の客人を慰めん。地謡「さて神樂

の役々は、シテ謡「住吉鹿島、地謡「諏訪熱田、その外三千世界の諸神は、こゝに影向なり、とりぐ〳〵の小忌の袖、返すぐ〳〵も面白や。（樂）地謡「舞樂も今は時過ぎて、舞樂も今は時過ぎて、更け行く空もしぐるゝ雲の、沖より疾風吹き立つ波は、海龍王の出現かや。

龍神謡「そも〳〵是は、海龍王とは我が事なり。謂さても毎年龍宮より、黄金の箱に小龍を入れ、神前に捧げ申すなり。地謡「龍神卽ち現れて、龍神卽ち現れて、波を拂ひ潮を退け、汀に上り御箱をする迄置き、神前を拜し渴仰せり。龍神謡「其時龍神御箱の蓋を、地謡「その時龍神御箱の蓋を、忽ち開き、小龍を取り出だし、卽ち神前に捧げ申し、海陸ともに治まる御代の、實に有難き惠かな。（舞働）シテ謡「四海安全に國治り、地謡「四海安全に國治つて、五穀成就福壽圓滿に、いよ〳〵君を守るべしと木綿四手の數々、神々とり〳〵に御前を拂ひ、神あげの御山に上らせ給へば、龍神平地に波浪を起し、逆卷く潮に引かれ行けば、諸神は虛空に遍滿しつゝ、げにあらたなる神は社内、げにあらたなる神は社内、龍神は海中に入りにけり。

神あげの御山―神靈を山上に送り返す所

東方朔

梗概　前の西王母と相關聯す。東方朔西王母あらはれ出でて三千年に一度實るといふ桃實を君王に捧げ上るといふめでたき曲なり。（脇能）

シテ　東方朔（前は老人）　前ツレ　西王母　ワキ　帝王

ワキ、サシ謡「面白や四時時移り易くして、春過ぎ夏暮れ今は早、初秋の七日七夕の、星の祭を急ぐなり。ワキツレ謡「帝の御殿は承華殿、ワキ謡「さながら花の袖をつらね、ワキツレ謡「七寶の臺金銀の床に、君を始め奉り、ワキ謡「官軍おの〳〵、ワキツレ謡「竝み居つゝ、上歌地謡「御遊をなしていろ〳〵の、御遊をなしていろ〳〵の、樂み盡きぬその氣色、音に聞く喜見城も、これにはいかで勝るべき、只これ君の御威光、廣き惠は有難や。廣き惠は有難や。シテ、ツレ一聲謡「治まれる、御代の光に數ならぬ、身までも安き住まひかな。ツレ謡「惠も廣きこの君の、シテ、ツレ謡「御影を賴むばかりなり。シテ、サシ謡「それ賢王の御代のしるし、五日の

喜見城―帝釋天の居所

秋來ぬと――古今集に「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」

風や十日の雨、レテ、ツレ謡「濕ふ四方の草木まで、靡き隨ふこの時に、生まれあふ身は頼もしや。下歌時しも今日は七夕の、逢ふ瀬を急ぐ頃なれや。上歌秋來ぬと、目に見ぬ空はおのづから、目に見ぬ空はおのづから、音かへて吹く風の、袖も涼しき夕まぐれ、靡く稲葉の色までも、千年の秋の始かな。千年の秋の始かな。

シテ詞「如何に奏聞申すべき事の候。ツキツレ詞「奏聞申さんとは如何なる者ぞ。レテ詞「是はこの國の傍に住む者にて候が、申し上げたき子細候ひて參内申して候。ツキツレ詞「さらば此方へ參り候へ。レテ詞「是はこの國の傍に住む者にて候が、めでたき瑞相の御座候ひて參りて候。この程三足の青鳥御殿の上を飛び廻り候。これ西王母が寵愛の鳥にて候。卽ち西王母この君へ參禮申すべし。この事奏聞申さんために參りて候。ツキ詞「かよるめでたき事こそ候はね。猶々仙人の謂れ懇に物語り候へ。

懸達太子――釋迦如來の事父は釋飯王といふ

クリ地謡「それ仙鄕といつぱ、人間に交はらず、松の葉をすき苔を身に著て、年は經れども樂しみ盡きず、飛行自在の通を得る。レテ、サシ謡「忝くも悉達太子は、仙人に仕へおはしまし、地謡「採菓汲水年を經て、終に成道し給ひて、大聖世尊となり給ふ。クセしかるに仙人のその數、限も知らぬ中にも、西王母と聞えしは、西方極樂無量壽佛の化現なれば、量なき命の、仙人となるぞめでたき。されば園生に植うる桃の、三千年に一度、花咲き實なるこの木の、仙藥となるぞ不思議なる。レテ謡「今は包まじ我こそは、地謡「その名も世世に隱れなき、東方朔と聞えしは、この老翁が事なり。君桃實を聞召さば、御壽命長遠に、御身も息災なるべし、急ぎ王母を伴なひ、重ねて參内申さんと、庭上を立つて歸る波の、聲ばかり殘りつゝ、形は雲に入りにけり。形は雲に入りにけり。（中入）

探菓汲水――難行苦行の一例

聞る波の――波はかへるいひ聲といふ縁に用ゐたり

後シテ謡「そも〳〵是は、仙鄕に入つて年久しき、東方朔とは我が事なり。詞さてもわれ西王母が桃實を、度々服せしその故に、壽命既に九千歲に及べり。彼の桃實を君に捧げ申さんとの誓あり。謡如何にやいかに西王母、疾く〳〵參内申すべし。地謡「不思議や西の空よりも、不思議や西の空よりも、白雲一群降ると見えしが、三足の青鳥、翅をならべて飛び廻り、姿も妙なる王母の出立、光も輝く衣冠を著し、斑龍に乘じて顯れ給ふ、まの

あたりなる奇特かな。

王母謡「王母は庭上に歩み出でて、　地謡「王母は庭上に歩み出でて、彼の桃實を捧げ持つて、上覽に供へ奉れば、帝王御感のあまりにや、糸竹の調數を盡し、皆一同に奏で給ふ、舞樂の祕曲は面白や。（樂）舞樂も漸く時過ぎて、舞樂も漸く時過ぎて、夕陽西に傾きければ、各君に御暇申し、歸らんとせしに、帝王名殘を惜しみ給ひ、重ねて參内申すべしと、宣旨を蒙り、二人は伴なひ出でけるが、王母は斑龍にゆらりと打乘り、遙の雲路に攀ぢ上り、遙の雲路に攀ぢ上つて、又天上にぞ歸りける。

春榮

梗概

増尾春榮丸といふ者、囚人となりて伊豆三島なる高橋權頭の許に在り。その兄種直、弟に代りて誅せられんとし、尋れ行きしに、兄には非ず家人なりといひ、兄弟互に相庇ふ。またまた鎌倉より早打來り、囚人赦免の中に春榮入る。權頭つひに春榮を養子となし、めでたく祝言あり。共に打つれ鎌倉に上る。これ友愛の德なりといふ筋なり。（四番目）

シテ　増尾種直　トモ　從者　子方　増尾春榮丸
ワキ　高橋權頭　狂言　從者

ワキ詞「是は高橋權の頭にて候。扨もこの度宇治橋の合戰に身方打勝ち、分捕功名數を盡くす。某が手にも囚人數多候中にも、春榮殿と申す幼き人を生捕り申して候。この由を申し上げて候へば、近きほどに誅し申せとの、御事にて候間、春榮殿へこの由を申さばやと存じ候。

散らぬ先に―春栄の存生中の意

囚人の數に入らばやー春栄の身代りになちんとの意

ゆかりの者―縁者

レヲ、トモ次第謡「散らぬ先にと尋ね行く、散らぬ先にと尋ね行く、花をや風の誘ふらん。レヲ詞「是は武藏國の住人、増尾の太郎種直にて候。さても宇治橋の合戰に弓手の肩を射させ、その矢を抜かんとすこし傍に引き退き候間に、弟にて候春榮深入し、やみやみと生捕られて候。承り候へば、生捕何れも近き程に誅せらるゝ由申し候間、某も囚人の數に入らばやと存じ、只今春榮がありかへと急ぎ候。レヲ、トモ道行謡「住み馴し、都の空は雲居にて、都の空は雲居にて、朝立ち添ふる旅衣、日も重なりて行く程に、名にのみ聞きし伊豆の國府、三島の里に著きにけり。三島の里に著きにけり。レヲ詞「急ぎ候ほどに、伊豆の三島に著きて候。此處にて囚人の奉行をば、高橋とやらん申し候。尋ねて對面申したき由申し候へ。トモ詞「畏つて候。如何に案内申し候。囚人の奉行高橋殿と申すは何くに御座候ぞ。狂言詞「何の御用にて候ぞ。賴みたる人の事にて候。トモ詞「いや苦しからぬ者にて候。是は春榮殿のゆかりの者にて候。高橋殿へそと御目にかゝりたき事の候ひて是まで參りて候、その由をよく〳〵御心得あつて御申し候へ。

痛はり申されー大切にせちるゝとなり

大法―嚴重なる掟

狂言詞「心得申し候。囚人のゆかりの人は堅く禁制にて候へども、春榮殿の御事は賴み候人別して痛はり申され候間、その由を申して見候べし、暫く御待ち候へ。トモ詞「心得申し候。狂言詞「如何に申し候。春榮殿のゆかりと申して若き男の來り候ひて、御目に懸りたき由申し候間、堅く御禁制にて候へども、春榮殿の御事にて候間申し入れて見うずる由申して候。ワキ詞「何と春榮殿のゆかりの人と申して、某に對面ありたき由申すか。汝の知る如く、囚人のゆかりに對面は禁制にて候へども、春榮殿の御事は別して痛はり申し候間、そと對面申さうずるにて候。さりながら大法のことにて候間、太刀刀を預り候へ。狂言詞「畏つて候。いかに申し候、只今の通りを申して候へば、かたく禁制にて候へども、春榮殿のゆかりの御事にて候ほどに、そと御目にかゝらうずると申され候。さらば太刀刀を給はり候へ。トモ詞「心得申し候。尋ね申して候へば、春榮殿のゆかりならば、高橋別して痛はり申し候間、對面申さうずる由申され候。さりながら大法にて候程に、太刀かたな禁制の由申し候。レヲ詞「さらば太刀刀を參らせ候べし。

ワキ詞「春榮殿のゆかりと仰せ候はいづくに渡り候ぞ。シテ詞「さん候是に候。ワキ詞「是は春榮殿の爲には何にて渡り候ぞ。シテ詞「是は春榮が兄に、増尾の太郎種直と申す者にて候が、今度宇治橋の合戰に弓手の肩を射させ、その矢をぬかんと少し傍に引き退き候間に、弟にて候春榮深入し生捕られて候間、餘りに見捨て難く候へば、某も一所に誅せられん爲に遙々これまで參りて候。春榮に引き合はせられて賜はり候へ。ワキ詞「委細承り候。是までの御出で誠にゆゝしく候。やがてその由を春榮殿へ申し候べし、暫く御待ち候へ。シテ詞「心得申し候。

存命不定―生死不明
譜代―代々

ワキ詞「いかに春榮殿へ申し候。御身の御舍兄に、増尾の太郎種直と御名のりあつて、是まで御出でにて候。急いで御對面候へ。春榮詞「是は眞しからず候。兄にて候者は、宇治橋の合戰にて重手負ひ、存命不定とこそ承り候ひつれ。ワキ詞「あら不思議や、正しく御舍兄と仰せ候ものを、さりながら物の暇よりそと御覽候へ。春榮詞「不思議なる事にて候。譜代召し使ひ候家人にて候間、急ぎ追つ歸して給はり候へ。ワキ詞「さては眞に家人にて候か、さあらばやがて追つ歸し候べし。如何に以前の人の渡り候か。シテ詞「是に候。ワキ詞「仰せの通りを申して候へば、物の隙より御覽候ひて、兄にては無し、譜代召し使はるゝ家人なれば、急ぎ追つ歸し申せとの御事にて候。何とて聊爾なる事をば承り候ぞ。シテ詞「暫く。まづ御心を靜めて聞召され候へ。家人の身として兄と名のり、一所に誅せらるゝ事の候べきか。如何やうにも御沙汰候ひて、引き合はせられて給はり候へ。某對面して、家人か兄かの勝劣を見せ申し候べし。ワキ詞「實に〳〵是は尤にて候。さらば某たばかつて呼び出だし候べし。その時御袖に縋られて委しく仰せ候へ。シテ詞「心得申し候。さらば是に待ち申し候べし。

聊爾―粗忽のこと
勝劣を見せ―眞僞を確むること

ワキ詞「如何に春榮殿に申し候。只今かの者をばあら〳〵と申し追つ歸して候さりながら、彼の者の心中あまりに不便に候間、後姿をそと御覽候へ。此方へ渡り候へ。シテ詞「如何に春榮、何とて某をば家人とは申すぞ。さてもこの度宇治橋の合戰に弓手の肩を射させ、その矢を拔かんとて少し傍に引き退き候隙に、御身は深入して生捕られ

先途―大事の場合

逆さまなる御弔ひ―子が却て親より弔はるゝこと

深山木の云々―頼政の歌を引く

殷のやうか―桀のかくゝ共に末詳

命を捨つるまで―捨つるまでの事なりの意

たり、其際の先途をも見屆けざれば、家人といふ事弟ながらも恥しうこそ候へさりながら、一處に誅せられん爲に、是まで遙々來りたるに、何とて家人とは申すぞ。春榮詞「いかに汝は三世の好みを思ひ、是まで遙々きたりたる志し、返すゞ〳〵もやさしけれさりながら、汝は故郷に歸り、母御に申すべきやうは、春榮こそ誅せられ候へ、逆さまなる御弔ひにこそ預り候ふべけれと、よく〳〵申し候へ。シテ詞「猶も家人と申すか。深山木の其梢とは見えざりし、櫻は花に顯れにけり。何と家人とくだすとも、終には隱れよもあらじ。春榮謠「時を得て早くもそだつ夏木立、その木をそれと見るべきか、早とく歸れと叱りけり。シテ詞「山皆染むる梢にも、松は變らぬ習ひぞかし。春榮謠「一千年の色とても、雪には暫し隱るゝなり。シテ詞「是を物に喩ふれば、殷のやうかは父をうち、春榮謠「秦のかくいは師匠をうつ。シテ詞「今の增尾の春榮は、春榮謠「現在の兄を家人といふ。シテ詞「是は逆罪だるべきに、春榮謠「誠は深き孝行なり。シテ詞「いやとにかくに命を捨つるまで、種直これにて腹切らん。や、刀は參らせつ。御芳志に刀を給はり候へ。春榮謠「なう〳〵暫くこはいかに、地謠「命を助け申さんとてこそ、家人とは申しつれ。忠が不忠になりけるか、許させ給へ兄御前。上歌種直も春榮も、種直も春榮も、囚人守護の兵も、互の心を思ひやり、實に持つべきは兄弟なりとて、共に袂を濡しけり。共に袂を濡しけり。ワキ詞「言語道斷。御兄弟の御心中を感じ申し、我等も落涙仕りて候。如何に種直に申し候。某春榮殿を痛はり申す事餘の儀にあらず、某子を一人持ちて候を、宇治橋の合戰に討たせて候が、この春榮殿の面ざし少しも違はず候間、天晴御命も助かり給ひ候へかし、某申し受け遺跡を繼がせ申し度きとの念願にて候。や何と申すぞ。是は眞にてあるか、あら何ともなや、只今申しつる事も徒事にて候。又鎌倉より早打立つて、箱根を越さぬ先に、囚人を皆誅し申せと仰せ出だされて候。御痛はしながら力なき事。春榮殿も御最期御用意をさせ申され候へ。又種直は急いで故郷へ御歸り候へ。シテ詞「暫く候。春榮が事は幼き者の事にて候間、春榮を助け、某を誅して給はり候へ。ワキ詞「仰せはさる事にて候へども、はや目錄にて御目にかけて候間、中々叶ひ申すまじく候。

遺跡―跡目ともいふ家督のこと

目錄にて―囚人の姓名屆出でたりとのこと

小太郎―従者の名

シテ詞「仰せはさる事にて候へども、ひらに私を以て春榮を助け、某を誅して給はり候へ。ワキ詞「是は尤にて候へども、なか〳〵さやうにはなるまじく候。シテ詞「さては力なき事。是まで遙々來り候ひて、春榮が最期を見捨て歸る事はあるまじく候間、某をも一所に誅して給はり候へ。ワキ謡「それはともかくもにて候。

シテ詞「如何に春榮故郷へ形見を送り候へ。いかに小太郎、おことは國に歸り母御に申すべきやうは、春榮が最期の有様あまりに見捨て難く候程に、諸共に誅せられ候。逆さまなる御弔にてこそ預り候べけれとよく〳〵申し候へ。クドキ謡是なる守は種直が、母御の方より賜りたる、守佛の觀世音、種直が形見に御覽候へと、よく〳〵申し候へ。春榮謡「是なる文は春榮が、最期の文にて候なり。又形見には烏羽玉の、我が黑髪の裾を切り、さばかり明暮一筋を千筋と撫でさせ給ひし髪を、春榮が形見に參らする。シテ謡「あら定めなやさるにても、我こそ殘りて御跡を、弔ふべきにさはなくて、成人の子をば先立てて、地謡「歎き給はん母上の、御心の内、思ひやられて痛はしや。クリ實にや生きとし生ける

八つの苦しみ―地獄餓鬼畜生北鬱單越長壽天佛前佛後佛胎生濕化

唯心の淨土―極樂遠かちず唯心の中にありとのこと

中有―極樂と地獄との間

雪の古枝云々―

物、何れか父母を悲まざる。必ず一世に限るべからず、世々以て父母の數々なり。シテ、サシ謡「それ十二因緣より二十五有の沈淪、生じては死し死しては生じ、地謡「流轉に廻る事、生々の親子、皆以つて誰か又自他ならん。シテ謡「然れば羊鹿牛車に乘り、地謡「火宅の境を出でずして、煩惱業苦の三つの繩に、繫がれ來ぬるはかなさよ。クセそれ生死に流轉して、人間界に生るれば、八つの苦しみ離れず。過去因果經を惟みよ、殺の報殺の緣、たとへば、車輪の如く、我人を失へば、かれまた我を害す。世々生涯、苦しみの海に浮き沈みて、御法の舟橋を、渡りもせぬぞ悲しき。殊更この國は、神國といひながら、又は佛法流布の時、教の法も盛なり。殊に所はあづまがた、佛法東漸にあり。有明の月の、わづかなる人界、急いで來迎の夜念佛、聲清光に彌陀の國の、涼しき道ならば、唯心の淨土なるべし。シテ謡「處を思ふも賴もしや。地謡「こゝは東路の、故郷を去つて伊豆の國府、南無や三島の明神、本地大通智勝佛、過去塵點の如くにて、黃泉中有の旅の空、長闇冥の巷までも、我らを照らし給へと、深くぞ祈誓申しける。雪の古枝の枯れてだに、二度

枯木開花は觀音の慈悲

獸の雲に吠えけん―淮南安劉安の鷄犬仙藥を嘗めて昇天せし事

花や咲きぬらん。

早打詞「いかに高橋殿。鎌倉よりの早打なり、暫く御待ち候へとよ。ワキ詞「すは又早打きたれるは、遲し切れとの御使か。早打詞「いや若宮別當の申しにより、囚人七人の免狀なり。」ワキ詞「さて春榮殿は。早打詞「七人の内。ワキ詞「あよ嬉しよ〳〵まづ讀まん。何々若宮別當の申しにより、囚人七人免狀の事。第一番には別當の御弟豐前の禪師、第二番には豐後の次郎、第三番には增尾の春榮丸。殘りは先々讀みても無益、はや助くるぞ春榮と、地謠「太刀の下より引きたてよ、命助かる兄弟は、嬉しさもなか〳〵に思はぬほどの心かな。今の心は獸の、雲に吠えけん心地して、千々の情ありがたき、兄弟の好みこそ、誠に哀なりけれ。

ワキ詞「いかに種直に申し候。以前も申す如く、春榮殿の御事あつぱれ御命も助かり給ひ候へかし、申し受け某が一跡を繼がせ申したきとの念願かなひて候。この上は賜はり候へ。シテ詞「實にこの上は參らせ候ふべし。ワキ詞「今日は殊更最上吉日なれば、家に傳はる重代の太刀、春榮殿に奉り、重ねて千秋萬歲の、地謠「猶歡の盃の、影も廻るや朝日影、伊豆の三島の神風も、吹き治むべき代の始め、幾久さとも限らじや。嘉辰令月とは、この時をいふぞめでたき、猶々廻る盃の、度かさなれば春榮も、お酌に立ちて親と子の、定めをいはふ祝言の、千秋萬歲の舞の袖、飜し舞ふとかや。シテ謠「千代に八千代にさざれ石の、地謠「いはふ心は萬歲樂。

ワキ詞「いかに種直、かゝるめでたき折なれば一指御舞ひ候へ。シテ詞「さらばそと舞はうず るにて候。地謠「祝ふ心は萬歲樂。（男舞）シテ、ツレ謠「東路の、秩父の山の松の葉の、地謠「千世のかゞ添ふ若緣かな。若緣かな〳〵。シテ謠「老木も若緣、地謠「立つや若竹の、シテ謠「親子の睦み、地謠「又は兄弟、かれといひこれといひ、いづれも〳〵睦しく、親子兄弟と榮ふる事も、是孝行を守り給ふ、三島の宮の御利生と伏拜み、親子兄弟さも睦しく打連れて鎌倉へこそ參りけれ。

嘉辰令月―節詠集に嘉辰月歌無極

いはゝ―歲を掛く

御利生―御かげのこと

外九

第六天

梗概　解脱上人、伊勢大神宮に詣で、里人に逢ひて、尊き神徳の物語を聽く。かくて第六天の魔王、群鬼さま〳〵現れ、素盞嗚尊亦現じ給ふ、遂に魔群は神威に怖れて虛空に去る事を作る。脇能の類なり。

シテ　魔王（前は里女）　前ツレ　里女　ワキ　解脱上人

ワキ 次第謡「心の花を手向とて、心の花を手向とて、大神宮に參らん。詞 是は解脱と申す沙門にて候。我未だ大神宮に參らず候程に、この度思ひ立ち伊勢參宮と志し候。道行謡 旅衣、今日九重を立ち出でて、今日九重を立ち出でて、末は音羽の山櫻、花の瀧川是ぞこの、行くも歸るも逢坂の、杉の木の間に波よする、湖向ふ鏡山、やう〳〵行けば鈴鹿路や、多氣の都の程もなく、度會の宮に著きにけり。度會の宮に著きにけり。

沙門―僧
行くも歸るも―崎丸の歌によりて書く
多氣の都―伊勢

ツレ、ツレ一聲謡「神路山、御裳濯川のその上に、契りし事の末は違はじ。ツレ謡「永き代までも仕へ來て、シテ、ツレ謡「盡きぬ惠は頼もしや。レテ、サシ謡「見渡せば千木もゆがまずかたそぎもそらず、シテ、ツレ謡「これ正直捨方便の、形を現すかと見え、古松枝を垂れ老樹緣を添へ、皆これ上求菩提の相を表す。有難かりし宮居かな。下歌 神風に、心安くぞ任せつる、上歌 櫻の宮の花盛、櫻の宮の花盛、花の白雲立ち迷ひ、空さへ匂ふ月讀の、もりくる影も長閑にて、知るも知らぬも道の邊の、行きかふ袖の花の香に、春一しほの氣色かな、春一しほの氣色かな。

シテ詞「是なる御僧は何處よりの御參詣にて候ぞ。ワキ詞「是は都方より出でたる沙門にて候。和光同塵の本願は結緣の始、濁世の我等なんぞ神力の妙樂を蒙らざらんや。神祕を委しく語り給へ。シテ詞「優しき人のいひごとや。懇に語り參らせうずるにて候。ダリ地謡「夫れ御裳濯川といつぱ、倭姫の命、七百餘歲にいたるまで、宮居を尋ねおはします。シテ、サシ謡「然れば當國二見の浦に上り、地謡「裳裾の穢れ給ひしを、この川にて洗ひし

多氣郡に齋宮の御住所ある故に都といふとぞ
度會の宮―大神宮
千木―屋根の上に組違へたる木かたそぎはその一方を取離したるなり
正直捨方便―神は佛と異なり正直を主として方便を捨てゝ用ひずとなり
神風に―西行の歌末句花の盛は月讀のもり―森に洩りを掛く月讀宮は内宮別宮の一つ
倭姫命―垂仁天皇の皇女宮居―大神宮の鎮座在すべき土地

六種の震動―動震動等震動、震吼等震吼、涌震動等震涌、吼震動等震吼、起震動等震起、覺震動等震覺の六つ

により、御裳濯川と申すなり。クセ〜當社は垂仁の御宇にはじめて、下津岩根に宮柱、太敷き立てよ、日神月神をあがめ申すなり。蛭子素盞嗚は、枝を連ぬる御神、高天の原の昔より、レテ謡「今も變らぬ神德の、地謡「その品々の方便を、語るもいかで盡くさまし。仰ぎても猶あまりあり。かゝる惠をおしなめて、賴めや賴め神の告、木綿四手に榊葉添へ、御法の障碍有るべしと、夢に來りて申すとて、かき消すやうに失せにけり。（中入）

ワキ謡「かくて神前に心を澄ます折節に、地謡「俄に大空さえかへり、風雨雷電肝を消し、六種の震動夥しや。

後レテ謡「そも〜是は佛法を破却する、第六天の魔王とは我が事なり。地謡「さて又供奉は誰々ぞ。レテ謡「六天には煩惱の惡魔、地謡「陰魔死魔、レテ謡「天子業魔、地謡「その外從類悟の道を、障碍の群鬼はさま〜なり。ワキ謡「その時解脫合掌して、地謡「その時解脫合掌して、觀念をなしければ、不思議や天つ空よりも、素盞嗚現れ出で給へり。即ち素盞嗚現れ給ひ、即ち素盞嗚現れ給へば、さしもに猛き六天なれども、恐れをなしてぞ見えたりける。（囃子）ツレ謡「素盞嗚なほも怒り給ひ、地謡「素盞嗚なほも怒り給ひて、寶棒を取り直し打たんとせしに、飛び違ひ、須彌に上らんとするを引きとゞめ、大地に打ち伏せて、忽ち散々に苦を見せ給へば、今よりこの土に來るまじと、誓をなせば、尊は雲居に上らせ給ひ、魔王は通力盡き果てよ、魔王は通力盡き果てよ、虛空に跡なく失せにけり。

土蜘蛛

梗概　源頼光、病の床に臥せるに、土蜘蛛の精現れたるを、頼光膝丸といふ太刀もて切る。やがて郎等葛城山に向ひて土蜘蛛を退治することを作る。依りて膝丸を蜘蛛切と命ずる由来を説き、劔の徳を讃嘆す。（五番目）

シテ　土蜘蛛（前は僧）　前ツレ　頼光
同　胡蝶　ワキ　一人武者

典薬の頭―醫官

胡蝶次第謡「浮き立つ雲の行方をや、浮き立つ雲の行方をや、風の心地を尋ねん。サレ是は頼光の御内に仕へ申す、胡蝶と申す女にて候。詞さても頼光例ならず悩ませ給ふにより、典薬の頭より御薬を持ち、只今頼光の御所へ参り候。いかに誰か御入り候。トモ詞「誰にて御座候ぞ。胡蝶詞「典薬の頭より御薬を持ちて、胡蝶が参りたる由御申し候へ。トモ詞「心得申し候、御機嫌を以て申し上げうずるにて候。頼光、サレ謡「こゝに消えかしこに結ぶ水の泡の、浮世にめぐる身にこそありけれ。げにや人知れぬ、心は重き小夜衣の、恨みん方もなき袖を、片敷きわぶる思ひかな。トモ詞「いかに申し上げ候。典薬の頭より御薬を持ちて胡蝶の参られて候。頼光詞「こなたへ来れと申し候へ。トモ詞「畏つて候。此方に御参り候へ。胡蝶詞「いかに申し上げ候。典薬の頭より御薬を持ちて参りて候。御心地は何と御入り候ぞ。頼光詞「昨日より心も弱り、身も苦みて、今は期を待つばかりなり。胡蝶謡「いやいやそれは苦からず。病ふは苦き習ひながら、療治によりてなほる事の、例は多き世の中に、頼光謡「思ひも捨てず様々に、地謡「色をつくして夜晝の、色をつくして夜晝の、境も知らぬ有様の、時の移るをも、覺えぬほどの心かな。げにや心を轉ぜず、そのまゝに思ひ沈む身の、胸を苦むる、心となるぞ悲しき。シテ一聲謡「月清き、夜半とも見えず雲霧の、かゝれば曇る心かな。詞いかに頼光、御心地は何と御座候ぞ。頼光謡「ふしぎやな誰とも知らぬ僧形の、深更に及んで我を訪ふ。その名はいかにおぼつかな。シテ詞「愚の仰せ候や。悩み給ふも我がせこが、来べき宵なりさ

朝を待つ―死期を待つこと

色をつくして―品をつくして

我がせこが―衣

通版の歌宋句かねてしるしも

膝丸―太刀の名

いしくも―いみじくも

さがにの、頼光謡「蜘蛛のふるまひかねてより、知らぬといふに猶近づく、姿は蜘蛛の如くなるが、シテ詞「かくるや千筋の糸すぢに、頼光謡「五體をつゞめ、シテ謡「身を苦しむる、地謡「化生と見るよりも、化生と見るよりも、枕にありし膝丸を、抜き開きちやうと切れば、そむくる所をつゞけざまに、足もためず薙ぎ伏せつゝ、得たりやおうと罵る聲に、形は消えて失せにけり。形は消えて失せにけり。

シテ詞「御聲の高く聞え候ほどに馳せ參じて候。何と申したる御事にて候ぞ。頼光詞「いしくも早く來たる者かな。近う來り候へ語つて聞かせ候べし。物語さても夜半ばかりの頃、誰とも知らぬ僧形の來りわが心地を問ふ。何者なるぞとたづねしに、我せこが來べき宵なりさゝがにの、蜘蛛のふるまひかねてしるしもといふ古歌をつらね、即ち七尺ばかりの蜘蛛となつて、我に千筋の糸を繰りかけしを、枕にありし膝丸にて切り伏せつるが、化生の者とてかき消すやうに失せしなり。是と申すもひとへに劍の威徳と思へば、今日より膝丸を蜘蛛切と名づくべし。なんぼう奇特なる事にて無きか。ツレ詞「言語道斷、今に始めぬ君の御威光劍の威徳、かたゞ〳〵以てめでたき御事にて候。また御太刀附のあとを見候へば、けしからず血の流れて候。この血をたんだへ化生の者を退治仕らうずるにて候。頼光詞「急いで參り候へ。ツレ詞「畏つて候、（中入）

此血をたんだへ―通解に血の跡を認め行く意とせり

土も木も―初句草も末句すみかなるべき上卷田村を見よ

一人武者―保昌

下知―命令

ツレ一聲謡「土も木も、我が大君の國なれば、いづくか鬼のやどりなる。その時一人武者すみ出で、彼の塚にむかひ大音あげていふやう、是は音にも聞きつらん、頼光の御内にその名を得たる一人武者。いかなる天魔鬼神なりとも、命魂を斷たんこの塚を、地謡「崩せや崩せ人々と、呼ばはり叫ぶその聲に、力を得たるばかりなり。下知に從ふ武士の、塚を崩し石をかへせば、塚の内より火焔を放ち、水を出すといへども、大勢崩すや古塚の、あやしき岩間の陰よりも、鬼神の形は現れたり。

後シテ謡「汝知らずや我昔、葛城山に年を經し、土蜘蛛の精魂なり。なほ君が代に障をなさんと、頼光に近づき奉れば、却つて命を斷たんとや。ツレ謡「その時一人武者進み出で、地謡「その時一人武者すゝみ出でて、汝王地に住みながら、君を惱ますその天罰の、劍に

あたつて惱むのみかは、命魂を斷たんと、手に手を取り組みかゝりければ、蜘蛛の精靈、千筋の糸を繰りためて、投げかけ〳〵白糸の、手足に纏はり五體をつゞめて、艶れ伏して見えたりける。（舞働）ワキ謡「然りとはいへども、地謡「しかりとはいへども、神國王地の惠を賴み、彼の土蜘蛛を中に取込め、大勢亂れかゝりければ、劍の光に少し恐るゝ氣色を便りに、切り伏せ〳〵土蜘蛛の、首打落し悅び勇み、都へとてこそ歸りけれ。

舍利

十六羅漢―釋尊の弟子にて阿羅漢

梗概　出雲より出でたる旅僧、都に上り、泉涌寺に詣でて舍利殿を拜む。嘗て外道の足疾鬼、この舍利を奪ひ去りしを韋駄天取り返せしといふ緣起の樣を、まのあたりに現ぜらるゝ奇特に逢ふ。（五番目）

シテ　足疾鬼（前は里人）　ツレ　韋駄天
ワキ　旅僧　狂言　寺僧

ワキ謡「是は出雲國美保の關より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候程に、この度思ひ立ち洛陽の佛閣一見せばやと思ひ候。道行謡朝立つや、空行く雲の美保の關、空行く雲の美保の關、心は留まる故鄕の、跡の名殘も重なりて、都に早く著きにけり。都に早く著きにけり。謡日を重ねて急ぎ候間、程なく都に著きて候。まづ承り及びたる東山泉涌寺へ參り、大唐より渡されたる十六羅漢、又佛舍利をも拜み申さばやと存じ候。是なる

因果といふ貨路を得たる十六人　佛舍利―佛骨

寺ぞ泉涌寺と申すげに候。寺中の人に委しく案内をも尋ねばやと思ひ候。如何に誰かわたり候。狂言調「何事を御尋ね候ぞ。ワキ調「是は遙かの田舍より上りたる僧にて候、當寺の御事を承り及び遙々參りて候、大唐より渡りたる十六羅漢、又佛舍利をも拜み申したく候。狂言調「實に〳〵聞召し及ばれて御參り候か。聊爾に拜み申す事叶はず候。但し今日彼御舍利の御出で有る日にて候。我等當番にて只今戸を明け申さんとて、鍵を持つて罷り出で候。まづこの舍利を御拜み有つて、その後山門に登りて、十六羅漢をも拜ませ申し候べし。此方へ御出で候へ。がら〳〵さつと御戸を開き申して候。よく〳〵御拜み候へ。

ワキ調「あら有難や候。さらば御供申し候べし。

ワキ、ツレ謠「實にや事として何か都の愚なるべきなれども、ことさら靈驗あらたなる、佛舍利を拜み申す事の貴さよ。是なん足疾鬼が奪ひしを、韋駄天取り返し給ひし、現住奇特の牙舍利の御相好、感涙肝に銘ずるぞや。一心頂禮萬德圓滿釋迦如來。上歌地謠「有難や、今も在世の心地して、今も在世の心地して、まのあたりなる佛舍利を、拜する事のあらた

後五―釋迦入滅後五百年づつ五期を置れたる最終の一期

さを、何に喩へん墨染の、袖をも濡らす氣色かな。袖をも濡らす氣色かな。

ツレ謠「有難や佛在世の御時は、法の御聲を耳に觸れ、聞法値遇の結緣に、一劫をも浮むこの身ながら、二世安樂の心を得るに、後五の時代の今さらに、猶執心の見佛の緣、嬉しかりける時節かな。

ワキ調「我佛前に觀念し、寥々とある折節に、御法を尊む聲すなり。如何なる人にてましますぞ。ツレ調「是はこの寺のあたりに住む者なるが、妙なる法の御聲を受けて、こゝに立ち寄るばかりなり。ワキ調「よし誰とてもその望、佛舍利を拜まん爲ならば、同じ心ぞ我も旅人、ツレ謠「來るもよそ人、ワキ謠「所もまた、ツレ、ワキ謠「都の邊東山の、末につゞける峯なれや、上歌地謠「月雪の、古き寺井は水澄みて、古き寺井は水澄みて、庭の松風さえかへり、更け行く鐘の聲までも、心耳を澄ます夜もすがら、實に聞けや峯の松、谷の水音澄み渡る、嵐や法を稱ふらん、嵐や法を稱ふらん。

クリ地謠「それ佛法あれば世法有り、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生もあり、善惡又不

西天―天竺
日域―日本
三如來―釋迦藥師阿彌陀
四菩薩―觀音勢至普賢文殊
泥洹―涅槃
白毫―眉間の毛
釋迦卅二相の一つ

二なるべし。レヲ、サレ謠「しかるに後五百歳の佛法、既に末世の折を得て、地謠「西天唐土日域に、時至つて久堅の、月の都の山並に、佛法流布のしるしとて、佛骨を納め奉り、レヲ謠「實に目前の妙光の影、地謠「この御舍利に若くはなし。クセ然るに佛法東漸とて、三如來四菩薩も、皆日域に地を占めて、衆生を濟度し給へり。常在靈山の秋の空、わづかに二月に臨んで魂を消し、泥洹雙樹の苔の庭、遺跡を聞いて腸を斷つ、有難や佛舍利の、御寺ぞ在世なりける。實にや鷲の御山も、在世の砌にこそ、草木も法の色を見せ、皆佛身を得たりしに、レヲ謠「今は淋しく凄ましき、地謠「月ばかりこそ昔なれ。孤山の松の間には、よそ〳〵白毫の、秋の月を禮すとか、蒼海の波の上に、わづかに四諦の、曉の雲を引く空の、淋しささぞな鷲の御山、それは上見ぬ方ぞかし。こゝは正に目前の、佛舍利を拜する、御寺ぞ貴かりける。

ワキ詞「不思議やな俄に晴れたる空かき曇り、堂前に輝く電光、こはそもいかなる事やらん。レヲ詞「今は何をか包むべき、その古への疾鬼が執心、猶此舍利に望あり。謠ゆるし給へや御僧達。ワキ謠「こはそも見れば不思議やな、面色變り鬼となりて、レヲ詞「舍利殿に臨み昔の如く、ワキ謠「金冠を見せ、レヲ謠「寶座をなして、地謠「栴檀沈瑞香、栴檀沈瑞香の、上に立ち上る雲煙を立てゝ、稻妻の光に飛び紛れて、固より足疾鬼とは、足疾き鬼なれば舍利殿に飛び上り、くる〳〵と、見る人の目を暗めて、その紛れに牙舍利を取つて、天井を蹴破り、虛空に飛んで上ると見えしが、行方も知らず失せにけり。（中入）

韋駄天謠「そも〳〵是は、この寺を守護し奉る、韋駄天とは我が事なり。詞こゝに足疾鬼といふ外道、在世の昔の執心殘つて、またこの舍利を取つて行く。謠いづくまでかは遁すべき、この牙舍利置いて行け。後シテ謠「いや叶ふまじとよこの佛舍利は、誰も望のあるものを、地謠「欲界色界無色界、欲界色界無色界、化天耶摩天他化自在天、三十三天攀上りて、帝釋天まで追ひ上ぐれば、梵王天より出で逢ひ給ひて、もとの下界に追つ下すレヲ謠「左へ行くも、地謠「右へ行くも、前後も天地も塞がりて、疾鬼は虛空にくる〳〵く

化天云々―佛法にて言ふ天の階級卅三あり

ると、渦巻い廻るを、韋駄天立ち寄り寶棒にて、疾鬼を大地に打伏せて、首を踏まへて牙舍利はいかに、出だせや出だせと責められて、泣く〳〵舍利を指し上ぐれば、韋駄天舍利を取り給へば、さばかり今までは足はやき鬼の、いつしか今は足弱車の力も盡き、心も茫々と起き上りてこそ、失せにけれ。

小鍛冶

宗近―姓は橘、信濃大掾たり

梗概　三條の小鍛冶宗近、勅命を蒙りて御劔を打つ。その丹誠、神に通じ、稲荷明神示現ありて加勢し給ふ事を作る。文中、劔の威德を述ぶ。（五番目）

シテ　稲荷明神（前は童子、後は狐）　ワキ　宗近
ワキツレ　橘道成

道成詞「是は一條の院に仕へ奉る橘の道成にて候。さても今夜帝不思議の御告ましますにより、三條の小鍛冶宗近を召し、御劔を打たせらるべきとの勅諚にて候間、只今宗近が私宅へと急ぎ候。如何に此屋の内に宗近が在るか。ワキ詞「宗近とは誰にて渡り候ぞ。道成詞「是は一條の院の勅使にて有るぞとよ。さても帝今夜不思議の御告ましますにより、宗近を召し御劔を打たせらるべきとの勅諚なり。急いで仕り候へ。ワキ詞「宣旨畏つて承り候。さやうの御劔を仕るべきには、我に劣らぬ者相鎚を仕りてこそ、御

領掌―御受

稲荷―代見に鎧坐あり

なべてならざる御事―唯人ならずの意

剣も成就候べけれ。是は兎角の御返事を、申し兼ねたるばかりなり。道成詞「實に〳〵汝が申す所は理なれども、帝不思議の御告ましませば、頼もしく思ひつゝ、早々領掌申すべしと、謡重ねて宣旨ありければ、ワキ謡「この上は、兎にも角にも宗近が、地謡「兎にも角にも宗近が、進退こゝに谷りて、御剣の刃の、亂るゝ心なりけり。さりながら御政道、直なる今の御代なれば、若しも奇特の有りやせん、それのみ頼む心かな。それのみ頼む心かな。

ワキ詞「言語道斷、一大事を仰せ出だされて候ものかな。かやうの御事は神力を頼み申すならではと存じ候。某が氏の神は稲荷の明神なれば、是より直に稲荷に參り、祈誓申さばやと存じ候。

シテ詞「なう〳〵あれなるは三條の小鍛冶宗近にて御入り候か。ワキ詞「不思議やなべてならざる御事の、我が名をさして宣ふは、いかなる人にてましますぞ。シテ詞「雲の上なる帝より、剣を打ちて參らせよと、汝に仰せ有りしよなう。ワキ詞「さればこそそれに付けても

壁に耳岩の物いふ―秘密の洩るる意

漢王云々―朗詠集の漢高三尺之剣坐制諸侯」を引く漢高は漢の高祖

煬帝―隋の天子

けいの剣―未詳

鍾馗大臣―前の鍾馗を見よ

伊勢や尾張の云云―伊勢物語を引く

猶〳〵不思議の御事かな。剣の勅も只今なるを、早くも知し召さるゝ事、返す〴〵も不審なり。シテ詞「實に〳〵不審はさる事なれども、我のみ知ればよそ人までも、ワキ謡「天に聲あり、シテ謡「地に響く、地謡「壁に耳、岩の物いふ世の中に、岩の物いふ世の中に、隠れはあらじ殊に猶、雲の上人の御剣の、光は何か暗からん。只頼めこの君の、恵によらば御剣も、などか心に適はざる、などかは適はざるべき。

クリ地謡「それ漢王三尺の剣、居ながら秦の亂れを治め、又煬帝かけいの剣、周室の光を奪へり。シテ、サシ謡「その後玄宗皇帝の鍾馗大臣も、地謡「剣の徳に魂魄は、君邊に仕へ奉り、シテ謡「魍魎鬼神に至るまで、地謡「剣の刃の光に恐れて、その寇をなす事を得ず。シテ謡「漢家本朝に於て剣の威徳、地謡「申すに及ばぬ奇特とかや。クセ又我が朝のその始め、人皇十二代、景行天皇、詔の御名をば、日本武と申しょが、東夷を退治の勅を受け、關の東も遙かなる、東の旅の道すがら、伊勢や尾張の海面に、立つ波までも、歸る事よと羨み、いつか我も歸る波の、衣手にあらめやと、思ひつゞけて行く程に、シテ謡「こゝやかし

この戰ひに、地謡「人馬巖窟に身を碎き、血は涿鹿の川となつて、紅波楯流し、數度に及べる夷も、兜を脱いで矛を伏せ、皆降參を申しけり。尊の御宇より、御狩場を始め給へり。頃は神無月、二十日あまりの事なれば、四方の紅葉も冬枯の、遠山にかゝる薄雪を、詠めさせ給ひしに、シテ謡「夷四方を圍みつゝ、地謡「枯野の草に火を懸け、餘焔しきりに燃え上り、敵攻鼓を打ちかけて、火焔を放ちかゝりければ、シテ謡「尊は劍を抜いて、地謡「尊は劍を抜いて、あたりを拂ひ忽に、焔も立ち退けと、四方の草を薙ぎ拂へば、劍の精靈嵐となつて、焔も草も吹き返されて、天に輝き地に滿ち〳〵て、猛火は却つて敵を燒けば、數萬騎の夷どもは、忽こゝにて失せてんげり。その後四海治まりて、人家戸ざしを忘れしも、その草薙の故とかや。只今汝が打つべき、其瑞相の御劍も、いかでそれには劣るべき。傳ふる家の宗近よ、心安く思ひて下向し給へ。

戸ざしを忘れ—太平の象

ワキ謡「漢家本朝に於て劍の威德、時に取つての祝言なり。さて〳〵御身は如何なる人ぞ。

シテ謡「よし誰とても只頼め、まづ〳〵勅の御劍を、打つべき壇を飾りつゝ、謡その時我を待ち給はど、地謡「通力の身を變じ、通力の身を變じて、必ず其時節に、參り會ひて御力を、附け申すべし待ち給へと、夕雲の稻荷山、行方も知らず失せにけり。行方も知らず失せにけり。（中入）

南瞻—須彌四洲の一

僧伽陀國—天竺の内

天國—刀鍛冶の元祖

恒沙—多數の意

ワキ謡「宗近勅に隨つて、即ち壇に上りつゝ、不淨を隔つる七重の注連、四方に本尊を懸け奉り、幣帛を捧げ、仰ぎ願はくは、宗近時に至つて、人皇六十六代、一條の院の御宇に、其職の譽を蒙る事、是私の力にあらず。伊弉諾伊弉册の、天の浮橋を踏み渡り、豐蘆原を探り給ひし、御矛より始まれり。その後南瞻僧伽陀國、波斯彌陀尊者より此方、天國ひつきの子孫に傳へて今に至れり。願はくは、地謡「願はくは、宗近私の功名に非ず、晉天卒土の勅命によれり。さあらば十方恒沙の諸神、只今の宗近に、力を合はせてたび給へとて、幣帛を捧げつゝ、天に仰ぎ頭を地に付け、骨髓の丹誠、聞き入れ納受せしめ給へや。ワキ謡「謹上再拜。

謡「いかにや宗近勅の劍、いかにや宗近勅の劍、打つべき時節は虛空に知れり。頼めや

小狐―俗に稲荷の神體を狐なりとす

頼め只頼め。（舞働）シテ謡「童男壇の上にあがり、地謡「童男壇の上にあがつて、宗近に參拜の膝を屈し、さて御劍の鐵はと問へば、宗近も恐悦の心を先として、鐵取り出だし、敎へへの鎚をはつたと打てば、シテ謡「ちやうと打つ。地謡「ちやう〳〵と、打ち重ねたる鎚の音、天地に響きておびたゞしや。

ワキ詞「かくて御劍を、打ち奉り、表に小鍛冶宗近と打つ。シテ詞「神體時の弟子なれば、小狐と裏にあざやかに、地謡「打ち奉る御劍の、刃は雲を亂したれば、天の叢雲とも是なれや。シテ謡「天下第一の、地謡「天下第一の、二つ銘の御劍にて、四海を治め給へば、五穀成就もこの時なれや。即ち汝が氏の神、稲荷の神體小狐丸を、勅使に捧げ申し、是まで なりと言ひ捨てゝ、又群雲に飛び乘り又群雲に飛び乘りて東山、稲荷の峯にぞ歸りける。

定基―寶光の子文章家永延二年出家長保四年入宋

清涼山―天台山にある寺

石橋―廣さ尺に滿たず長さ數歩其下數千丈と傳ふ

山路に云々―朗詠集に山路日暮滿耳者樵歌牧笛之聲

誤つて云々―同書に譯入仙家雖驚半日之客

石橋

梗　寂昭法師入宋して、清涼山下の石橋に到りしに、樵童あらはれて橋の由來を物語り、後、獅子舞の奇特に逢ふ。能としては重き習物なり。

シテ　獅子（前樵童）　ワキ　寂昭法師

ワキ詞「是は大江の定基といはれし寂昭法師にて候。我入唐渡天し、初めて彼方此方を拜み廻り、只今清涼山に參り候。是に見えたるが石橋にて有りげに候。暫く人を待ち委しく尋ね、この橋を渡らばやと存じ候。

シテ一聲謡「松風の、花を薪に吹き添へて、雪をも運ぶ山路かな。サレ山路に日暮れぬ、樵歌牧笛の聲、人間萬事さまゞ〳〵の、世を渡り行く身の有樣、物毎に遮る眼の前、光の陰をやおくるらん。下歌餘りに山を遠く來て、雲又跡を立ち隔て、上歌入りつる方も白波の、入りつる方も白波の、谷の川音雨とのみ、聞えて松の風もなし。實にや誤つて半日の客た

恐顧=書里=機逢。七世之孫。

りしも、今身の上に知られたり。今身の上に知られたり。ワキ詞「何事を御尋ね候ふぞ。ワキ詞「是なるは承り及びたる石橋にて候か。シテ詞「さん候是こそ石橋にて候。向ひは文殊の浄土清涼山、よく〳〵御拜み候へ。ワキ詞「さては石橋にて候ひけるぞや。さあらば身命を佛力にまかせて、此橋を渡らばやと思ひ候。シテ詞「暫く候。其上名を得給ひし高僧達も、難行苦行捨身の行にて、こゝにて月日を送り給ひてこそ、橋をば渡り給ひしに、謡獅子は小蟲を食はんとても、先勢をなすとこそ聞け、我が法力のあればとて、行く事難き石の橋を、たやすく思ひ渡らんとや。あら危しの御事や。ワキ謡「謂れを聞けば有難や。只世の常の行人は、左右無う渡らぬ橋よなう。シテ詞「御覽候へこの瀧波の、雲より落ちて數千丈、瀧壺までは霧深うして、身の毛もよだつ谷深み。ワキ謡「巖峨々たる岩石に、シテ謡「わづかに懸る石の橋、ワキ詞「苔は滑りて足もたまらず、シテ謡「渡れば目もくれ、ワキ謡「心もはや、上歌地謡「上の空なる石の橋。上の空なる石の橋、まづ御覽ぜよ橋もとに、歩み臨めばこの橋の、面は

泥梨―地獄のこと

尺にも足らずして、下は泥梨も白波の、虚空を渡る如くなり。危しや目もくれ心も、消え消えとなりにけり。おほろけの行人は、思ひもよらぬ御事。ワキ謡「なほ〳〵橋のいはれ委しく御物語り候へ。クリ地謡「夫れ天地開闢の此方、雨露を降して國土を渡る、是すなはち天の浮橋ともいへり。シテ、サシ謡「その外國土世界に於て、橋の名所さま〴〵にして、地謡「水波の難をのがれ、萬民富める世を渡るも、すなはち橋の德とかや。クセしかるにこの石橋と申すは、人間の渡せる橋にあらず、おのれと出現して、つゞける石の橋なれば、石橋と名を名づけたり。その面わづかに、尺よりは狹うして、苔甚だ滑かなり。その長さ三丈餘、谷のそくばく深き事、千丈餘に及べり。上には瀧の糸、雲より懸て、下は泥梨も白波の、音は嵐に響き合ひて、山河震動し、雨塊を動かせり。橋のけしきを見渡せば、雲にそびゆる粧ひの、たとへば夕陽の雨の後に、虹をなせる姿、又弓を引ける形なり。シテ謡「遙に臨んで谷を見れば、地謡「足冷しく肝消え、すゝんで渡る人もなし。神變佛力にあらずは、誰かこの橋を渡るべき。向ひは文殊

獅子團亂旋―樂名
たいきんりきん―大金裏金又は體禁離均の字を充つ

の淨土にて、常に笙歌の花降りて、笙笛琴箜篌、夕日の雲に聞え來、目前の奇特あらたなり。暫く待たせ給へや、影向の時節も、今幾程によも過ぎじ。

地謡「獅子團亂旋の舞樂の砌、獅子團亂旋の舞樂の砌、牡丹の花房にほひ滿ちく、たいきんりきんの獅子頭、打てや囃せや、牡丹芳、牡丹芳、黄金の蘂現れて、花に戯れ枝に臥し轉び、實にも上なき獅子王の勢、靡かぬ草木も無き時なれや、萬歳千秋と舞ひ納め、萬歳千秋と舞ひ納めて、獅子の座にこそ直りけれ

外十　合浦

梗概

鮫人、人家に寄寓し、去るに臨みて、報謝のため、泣く涙を寶の珠として殘しきと云ふ漢土の故事を主とし、後漢の孟嘗の太守たりし合浦の地に結附けて作れり。（五番目）

シテ　鮫人（前は童子）　ワキ　里人

ワキ詞「是は唐合浦と申す所に住まひする者にて候。今日は日もうらゝに候程に、浦に出で釣するを眺めばやと思ひ候。（狂言ンカ〳〵）

シテ一聲謡「わたづみの、そこともいさやしら波の、龍の都を出づるなり。詞いかにこの屋の内に主やまします。一夜の宿を貸し給へ。ワキ詞「日もはや暮れてとざしつるに、宿とは誰にてましますぞ。シテ詞「よし誰なりともその情に、一村雨の雨宿り、謡一夜の宿を貸し

たゝく―水鶏の鳴聲は戸を敲く如し
埴生の小屋―賤が家
我妹子が―備馬藥に「妹が門々せなが門行過ぎかねて我行かば肱笠の雨もゝふちん死出田長雨宿り笠宿り宿りてまゐちん死出田長」

給へ。ワキ謡「たゝく水鶏の外面に立つや久方の、埴生の小屋に小雨ふる、レテ謡「床冴えぬれば、ワキ謡「我妹子が、上歌地謡「ひぢ笠の、雨は降り來ぬ雨宿りの、頼む木蔭かや、一樹の陰の宿も、この世ならぬ契なり。一河の流を汲みて知る、合浦の浦の江のほとり、鱗もなどや命恩の、その情をば知らざらん。その情をば知らざらん。

ひれふし―平伏
ひれは鰭として魚の縁語
龍女―八才の龍女が變成男子の事法華經にあり

ワキ詞「何と見申せども更に人間とは見え給はず候。名を御なのり候へ。レテ謡「今は何をかつゝむべき、我は鮫人といへる魚の精なり。謡命をつがれまゐらせし、報謝の爲に來りたり。我が泣く涙の露の玉、絶えぬ寶となるべきなり。地謡「鮫人涙に、玉をなして命恩を、寶珠を猶も捧げて、合浦にも入らせ給へと、前なる渚の波の上に、入るゝと見えつるが、白魚となつてそのまゝに、ひれふして失せにけり。あとひれふして失せにけり。(中入)

後レテ謡「龍女は如意の寶珠を釋尊に捧げ、變成就の法をなし、地謡「奈落の底の白魚なれども、など命恩を報ぜざらんと、波立騒ぎ汐うづまいて、うたかたの上にぞ現れたる。(獅子舞)

レテ謡「是こそ眞如の玉の緒の、壽命長遠息災延命の寶の

珠はふたゝび―孟嘗太守となりし時鄙内疲弊して珠も境を出せしに後富み榮えて再び歸り納まる

珠は、當來までの二世の願ひも成就なるべし、是までなりや、織りつる綾の浦は合浦、珠はふたゝび歸る波の、千秋萬歳の寶の玉は、千秋萬歳の寶の玉は、合浦の浦にぞをさまりける。

生田敦盛

梗概　敦盛の遺孤、法然上人に養はれ居たりしが、御夢想を受けて、津の國生田の森に下り、父の幽靈に逢ふ。恩愛孝養の情偲ばれてあはれなる曲なり。（二番目）

シテ　平敦盛　　子方　同遺子　　ワキ　法然上人の従者

法然上人―浄土宗の開祖

ワキ詞「是は黒谷法然上人に仕へ申す者にて候。又是に渡り候人は、あるとき上人加茂御參詣御下向の時、さがり松の下に二歳ばかりなる男子の美しきを、手箱の蓋に入れ尋常に拵へ、捨て置きて候を、上人不便に思召され抱かせ御歸り候ひて、いろ〳〵育て給ひ候程に、はや十歳に御餘り候。父母のなき事を歎き給ひ候程に、説法の後此事を御物語り候へば、聽衆の内より若き女性の走り出で、我が子にて候由おほせ候を、ひそかに御尋ね候へば、一年一の谷にて討たれ給ひし、敦盛の御子にておはしまし候。この事を聞き給ひて、夢になりとも父の姿を見せて給はり候へと、加茂の明神へ祈誓有るべき由仰せられ候ひて、一七日詣で給ひ、今日はははや滿參にて候程に、同道申し加茂の明神へ、參詣申し候。是ははや加茂の明神にて御座候。よく〳〵御祈誓候へ。

水無瀬川―攝津

子、サシ謡「有難や所からなる御社の、朱の玉垣神さびて、こゝろも澄める御手洗の、深き惠を頼むなり。下歌地謡「夢になりともたらちねの、その面影を見せ給へ。上歌かくばかり、祈る心の末遂げば、祈る心の末遂げば、惠になどか漏るべきと、誓ひ糾の神ともに、願ひを叶へおはしませ。願ひを叶へおはしませ。

子詞「あら不思議や少し睡眠の内に、あらたに御靈夢を蒙りて候。ワキ詞「あらめでたやな、御靈夢のやうを御物語り候へ。子詞「あの御寶殿の内よりも、あらたなる御聲にて、汝夢になりとも父を見んと思はゞ、是より津の國生田の森へ下れと、あらたに靈夢を蒙りて候。ワキ詞「是は不思議なる事にて候ものかな。黒谷へ御歸りあるまでもなく候。是より生田の森へ御供申し候べし、やがて思召し立ち候へ。道行謡山陰の、賀茂の宮居を立出でて、賀茂の宮居を立出でて、急ぐ行くへは山崎や、霧立渡る水無瀬川、風も身にしむ旅衣、

昨日だに―新古今集家隆の歌宋句秋は來にけり

五蘊―色受想行識の五つすべて空しとなり

秋は來にけり昨日だに、訪はんと思ひし津の國の、生田の森に著きにけり。生田の森に著きにけり。

ワキ詞「御急ぎ候程に、是ははや津の國生田の森にて候。森のけしき川の流、都にて承り及びたるにもいやまさりて面白き名所にて候。あれに見えたる野邊は生田の小野にてもや候らん。立ち寄り詠めばやと思ひ候。こゝかしこを詠め候程に、はや日の暮れて候は如何に。あれに燈の影の見えて候は人家にて有りけに候。立ち寄り宿を借らばやと思ひ候。

シテ、サシ謡「五蘊もとよりこれ皆空、何によつて平生此身を愛せん。苦を守る幽魂は夜月に飛び、屍を失ふ愚魄は秋風に嘯く。あら心すごの折柄やな。

ワキ謡「不思議やな是なる草の庵の内に、さも花やかなる若武者の、甲冑を帶し見え給ふぞや、是は如何なる事やらん。シテ謡「おろかの人の心やな。詞「面々是まで來り給ふも、我に對面のためならずや。はづかしながら古の、敦盛が幽靈來りたり。子詞「なう敦盛と

絕えとがれ―氣絕の意

撫子―遺子を指す

木曾の棧―かけての序詞

天ざかる―鄙の枕詞

はわが父かと、身にも覺えず走りより、地謡「袂にすがり絕えこがれ、袂にすがり絕えこがれ、泣く音にたつる鶯の、逢ふ事のうれしさも、うき身にあまるばかりなり。かくは思へど頼まれぬ、夢の契を、現に返すよしもがな。

シテ謡「無慙やな忘れがたみの撫子の、花やかなるべき身なれども、衰へはつる墨染の、袂を見るこそあはれなれ、さても御身孝行の心深き故、加茂の明神に歩みを運び、夢になりとも我父の、姿を見せてたび給へと祈誓申す。明神憐れみおはしまし、閻王に仰せつかはさる。閻王仰せを承り、暫の暇を賜はるなり。親子の契も今を限なるべし。

地謡「更け行く月の夜もすがら、昔をいざや語らん。ヲセ然るに平家の、榮花を極めしその始、花鳥風月の戯れ、詩歌管絃のさまぐ〜に、春秋を送り迎へしに、如何なるをりか來りけん、木曾の棧かけてだに、思はぬ敵に落されて、主上を始め奉り、一門の人も悉く、花の都を立ち出で、西海の空に赴きぬ。習はぬ旅の道すがら、山を越え海を渡り、暫は天ざかる、鄙の住居の身なりしに、又立ち歸る浦波の、須磨の山路や一の谷、

生田川の身を捨てし―大和物語の生田川に身を投げし處女の故事によりて云ふ　鬘謡―逢ふを掛く

生田の森に著きしかば、こゝは都も程近しと、一門の人々も、喜をなしゝ折節に、レチ謡「範頼義經の其勢、地謡「雲や霞の如くにて、暫く戰ふといへども、平家は運も槻弓の、やたけ心もよわ〳〵と、皆散り〴〵になりはてゝ、あはれも深き生田川の、身を捨てし物語、かたるぞよしなかりける。

レチ謡「うれしやな夢の契の假初ながら、親子鷸鴕の袖ふれて、地謡「名殘つきせぬ心かな。（中ノ舞）レチ謡「あれに見えたるは如何なる者ぞ。何閻王よりの御使とや、片時の暇と有りつるに、今までの遲參心得ずと、謡閻王怒らせ給ふぞと、地謡「いふかと見れば不思議やな、いふかと見れば不思議やな、黒雲俄に立ち來り、猛火を放ち劍を降らして、其數知らざる修羅の敵、天地を響かし滿ち〳〵たり。レチ謡「物々し明暮に、地謡「馴れつる修羅の敵ぞかしと、太刀眞向にさしかざし、こゝやかしこに走り廻り、火花を散らして戰ひしが、暫く有りて黒雲も、次第に立ち去り修羅の敵も、忽に消え失せて、月澄み渡りて明明たる、曉の空とぞなりたりける。レチ謡「恥しや子ながらも、地謡「かく苦しみを見る事よ、急ぎ歸りてなき跡を、懇に弔ひてたび給へと、泣く〳〵袂を引き別れ、立ち去る姿は蜻蛉の、小野の淺茅の露霜と、形は消えて失せにけり。形は消えて失せにけり。

草子洗小町

概　　梗

内裏にて歌合ある折、大伴の黒主竊に小野の小町の邸に忍びて、題詠の歌を竊み聽き、さていよ〳〵其日となり、小町が歌の殊に叡感ありしを、黒主はかれて奸計を廻らしたる如く、萬葉集に入筆したるを取出して、そは古歌なりと主張す。小町は言ひ説く術なかりしが、やがてこの草紙を洗ひ見んとて、勅許を仰ぎて洗ひしに、入筆の跡失せて、黒主の奸策露顯し、黒主面目を失す。然るに之も亦道を嗜む志、苦しからずとて免され、尚小町に舞を奏せしめられて一座めでたく納ることとなる。もと古今集の序に六歌仙の歌風を評して、小野小町は古の衣通姫のながれなり、哀なるやうにて強からず、いはゞよき女の惱める所あるに似たり、強からぬは女の歌なればなるべし。大伴の黒主はそのさま卑し、いはば薪負へる山人の花の陰に休めるが如し」とあるに據りて思ひ設けしなり。「蒔かなくに」の歌は、怖らくは、小町の「わびぬれば身を萍のねをたえて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」の換骨脱胎なるべし。（三番目）

シテ　小野小町　子方　帝王　ツレ　貫之

大伴の黒主―六歌仙の一人
小野小町―同
救世の提闡―世を救ふ慈悲者
片岡山の駅―河内の片岡山にて餓死人を見て「しなくるや片岡山に飯に飢て臥せる旅人あはれ親なし」と詠み給へり

ワキ　大伴黒主　狂言　大伴黒主從者

ワキ詞「是は大伴の黒主にて候。さても明日内裏にて御歌合有るべしとて、黒主が相手には小野の小町を御定め候。小町と申すは歌の上手にて、さらに相手には叶ひがたく候程に、明日の歌をさだめて吟ぜぬ事は候まじ、かの私宅へ忍び入り、歌を聞かばやと存じ候。

シテ、サシ謡「夫れ歌の源を尋ぬるに、聖德太子は救世の提闡、片岡山の製を路生に弘め給ふ。詞　さても明日内裏にて御歌合有るべきとて、小町が相手には黒主を御定め候ひて、水邊の草といふ題を賜はりたり。おもしろや水邊の草といふ題に浮みて候は如何に。謡　蒔かなくに何を種とて浮草の、波のうね〳〵生ひ茂るらん。詞　この歌をやがて短册に寫しさむらはん。

ワキ詞「如何に只今の歌を聞いて有るか。狂言「さん候　承りて候。ワキ詞「何と聞いてあるぞ。狂言詞「蒔かなくに何を種とて瓜蔓の、畑のうねをまろびころびあるくらん。ワキ詞「いや

道可道非常道——老子の語

御影——肖像を掛けて祭るなり

躬恒——古今集の撰者

貫之——同

忠岑——同

ほの〳〵と——此の歌を人丸の詠として古今集に出せり

左様にてはなきぞ、道の道たるは常の道にはあらず、知れるを以て道とす。不得心なる事にて候へども、只今の歌を萬葉の草子に寫し、帝へ古歌と訴へ申し、明日の御歌合に勝たばやと存じ候。

ワキ、ツレ吹第謡「めでたき御代の歌合、めでたき御代の歌合、詠じて君を仰がん。サレときしも頃は卯月半、清涼殿の御會なれば、はなやかにこそ見えたりけれ。ツレ謡「かくて人丸赤人の御影を懸け、ワキ立衆謡「おの〳〵詠みたる短册を、われも〳〵と取りいだし、御影の前にぞ置きたりける。ツレ謡「さて御前の人々には、ワキ立衆謡「小町を始め河内の躬恒紀の貫之、ツレ謡「右衛門の府生壬生の忠岑、ワキ立衆謡「ひだりみぎりに著座して、ツレ謡「既に詠をぞ始めける。ほの〳〵と明石の浦の朝霧に、島隠れ行く舟をしぞ思ふ。地謡「實に島隠れ入る月の。實に島隠れ入る月の、淡路の絵島國なれや、始めて歌の遊びこそ、心和ぐ道となれ。その歌人の名所も、みな庭上に竝みゐつゝ、君の宣旨を待ち居たり。君の宣旨を待ち居たり。

衣通姫——允恭天皇の御妃玉津島明神は姫を祀る和歌三神の一つ

王詞「いかに貫之。ツレ詞「御前に候。王詞「始めより小町が相手には黒主を定めたり。まづまづ小町が歌を讀み上げ候へ。ツレ詞「畏つて候。水邊の草、謡まかなくに何を種とて浮草の、波のうね〳〵生ひ茂るらん。王詞「面白と詠みたる歌や。この歌に優るはよもあらじ、皆々詠じ候へ。ツレ詞「畏つて候。ワキ詞「暫く候。これは古歌にて候。王詞「なにと古歌と申すか。ワキ詞「さん候。王詞「如何に小町、何とて古歌をば申すぞ。ツレ謡「恥しの勅諚やな。先代の昔はそも知らず、詞既に衣通姫此道のすたらんことをなげき、和歌の浦わに跡を垂れ給ひ、玉津島の明神より此方、皆この道を嗜むなり。それに今の歌を古歌と仰せ候は、古今萬葉の勅撰にて候か。又は家の集にて有るやらん。作者は誰にてましますぞ、委しく仰せ候へ。ワキ詞「仰せの如くその證歌分明ならでは如何でか奏し申すべき。草子は萬葉題は夏、水邊の草とは見えたれども、讀人知らずと書きたれば、作者は誰とも存ぜぬなり。シテ詞「夫れ萬葉は奈良の天子の御字、撰者は橘の諸兄、歌の數は七千首に及んで皆妄が知らぬ歌はさむらはず、萬葉といふ草子に數多の本の候か。覺束なうこそ候へ。

猿丸大夫―近江の人黒主も同國の人にて縁ありとするなり

富士のなるさの大將―鑑大寺左大臣無明の酒を名も無き酒と詠みて名無しの大將といはれ後成富士の鳴澤をなるさと詠みてなるさの入道といはれし失策談を交ぜてなるさの大將といへるなり

四病八病―喜撰式に見え其他歌學の書に載す歌の惡き體を歌へ立てたるにても詩學より出づ

三代八部―古今集より新古今集迄の勅撰集しどろ―亂れたること

人目さがなや―面目無し

ワキ詞「げに〳〵それはさる事なれども、御身は衣通姫の流なれば、あはれむ歌にて強からねば古歌を盗むは道理なり。シテ詞「さてはおことは古の猿丸太夫の流れ、それは猿猴の名を以て、我が名をよそに立てんとや。正しく是は古歌ならず。ワキ詞「花の蔭ゆく山賤の、シテ詞「そのさま賤しき身ならねば、何とて古歌とは見るべきぞ。ワキ詞「さて詞をたゞさで誤りしは、富士のなるさの大將や、四病八病三代八部同じ文字、シテ詞「文字もかほどの誤は、ワキ謡「昔も今もシテ謡「有りぬべし。地謡「不思議や上古も末代も、三十一字の其内に、一字も變らで詠みたる歌、是萬葉の歌ならば、和歌の不思議と思ふべし　さらば證歌を出だせとの、宣旨度々下りしかば、初めは立春の題なれば、花も盡きぬと引き開く、夏は涼しき浮草の、これこそ今の歌なりとて、既に讀まんとさし上ぐれば、我身に當らぬ歌人さへ、胸に苦しき手を置けり。ましてや小町が心の内、たゞ轟の橋打渡りて、危き心は隙もなし。

シテ謡「恨めしやこの道の、大祖柿の本の太夫君も、小町をば捨てはて給ふか恨めしやな。

この歌古歌なりとて、左右の大臣その外の、局々の女房達も、小町ひとりを見給へば、夢に夢見る心地して、さだかならざる心かな。此草子を取り上げ見れば、行の次第もしどろにて、文字の墨付違ひたり、詞 如何さま小町がひとり詠ぜしを黒主立聞し、帝へ古歌と訴へ申さん爲に、謡 この萬葉に入筆したると覺えたり。あまりに恥しうさむらへば、清き流れをむすび上げ、此草子を洗はばやと思ひ候。ツレ詞「小町はさやうに申せども、若し又さなき物ならば、青丹衣の風情たるべし。シテ謡「とにかくに思ひまはせども、やるかたもなき悲しさに、地謡「泣く〳〵立ちてすご〳〵と、歸る道すがら人目さがなや恥しや。ツレ詞「小町暫く御待ち候へ。その由奏聞申さうずるにて候。如何に奏聞申し候。小町申し候は、只今の萬葉の草子をよく〳〵見候へば、行の次第もしどろにて、文字の墨付も違ひて候程に、草子を洗ひて見たき由申し候。王詞「實に〳〵小町が申す如く、さらば洗ひて見よと申し候へ。ツレ詞「畏つて候。如何に小町勅諚にて有るぞ、急いで草子を洗ひ候へ。シテ謡「綸言なればうれしくて、落つる涙の玉襷、結んで肩に打掛けて、既に草

天の川瀬に―以下洗ふといふ語を縁にして續けたり　顯川云々―許由の故事

住吉―和歌三神の一つ

子を洗はんと、次第地謡「和歌の浦わの藻鹽草、和歌の浦わの藻鹽草、波寄せかけて洗はん。シテ謡「天の川瀬に洗ひしは、地謡「秋の七日の衣なり。シテ謡「花色衣の袂には、地謡「梅の匂や交るらん。雁がねの、翅は文字の數なれど、跡定めねば顯れず、顯川に耳を洗ひしは、シテ謡「濁れる世を澄ましけり。地謡「舊苦の鬚を洗ひしは、シテ謡「川原に解くる薄氷、地謡「春の歌を洗ひては、霞の袖を解かうよ。シテ謡「冬の歌を洗へば、冬の歌を洗へば、地謡「袂も寒き水鳥の、上毛の霜に洗はん、上毛の霜に洗はん。戀の歌の文字なれば、忍草の墨消え、シテ謡「涙は袖に降りくれて、忍草も亂るゝ、忘れ草も亂るゝ。地謡「釋教の歌の數々は、シテ謡「蓮の糸ぞ亂るゝ。地謡「神祇の歌は榊葉の、シテ謡「庭火に袖ぞ乾ける。地謡「時雨に濡れて洗ひしは、シテ謡「紅葉の錦なりけり。地謡「住吉の、住吉の、久しき松を洗ひては、岸に寄する白波を、さつと掛けて洗はん。洗ひ〳〵て取り上げて見れば不思議やこは如何に、數々のその歌の、作者も題も文字の形も少しも亂るゝ事もなく、入筆なれば浮草の、文字は一字も、殘らで消えにけり。有難や〳〵。出雲住吉玉津島、人丸赤人の、御惠かと伏し拜み、悅びて龍顏にさし上げたりや。

ワキ謡「よく〳〵物を案ずるに、かほどの恥辱よもあらじ、自害をせんと罷り立つ。シテ謡「なうなう暫く。謡この身皆以て、その名ひとりに殘るならば、何かは和歌の友ならん。道を嗜む　志、誰もかうこそ有るべけれ。王詞「如何に黑主。ワキ詞「御前に候。王詞「道を嗜む者は誰もかうこそ有るべけれ。苦しからぬ事座敷へ直り候へ。ワキ詞「これ又時の面目なれば、宣旨をいかで背くべき。黑主御前に畏る。

地謡「實に有難き砌かな。小町黑主遺恨なく、小町に舞を奏せよと、おの〳〵立ちより花の打衣、風打烏帽子を著せ申し、笏拍子を打ち座敷を靜め、シテ謡「春來つては、偏くこれ桃花の水、地謡「石に障りて遲く來れり。シテ謡「手まづ遮る花の一枝、地謡「桃色の衣や重ぬらん。シテ謡「霞たつ、（中ノ舞）ワカ霞立てば、遠山になる朝ぼらけ、地謡「日影に見ゆる松は千代まで、松は千代まで、四海の波も四方の國々も、民の戸ざしもさゝぬ御代こそ、堯舜の嘉例なれ、大和歌の起りは、荒金の土にして、素盞嗚尊の、守り給へる神國なれば、

暮來遲是桃花水―朗詠集の句又次に磯石遲來心猶待春流遣過手先遮をも引けり

花の都の春も長閑に、花の都の春も長閑に、和歌の道こそめでたけれ。

六浦

梗概　六浦の稱名寺に青葉の楓あり　旅僧詣でて里人にその由來を聞き、やがて楓の精夢中に現れ出づることを作る。（三番目）

シテ　楓の精（前は里女）　ワキ　旅僧

三人次第謡「思ひやるさへ遙なる、思ひやるさへ遙なる、東の旅に出でうよ。ワキ詞「是は洛陽の邊より出でたる僧にて候。我未だ東國を見ず候程に、この秋思ひ立ち陸奥の果までも修行せばやと思ひ候。ワキ三人道行謡「逢坂の、關の杉村過ぎがてに、關の杉村過ぎがてに、ゆくへも遠き湖の、舟路を渡り山を越え、幾夜な夜なの草枕、明け行く空も星月夜、鎌倉山を越え過ぎて、六浦の里に著きにけり。六浦の里に著きにけり。ワキ詞「千里の行も一歩より起るとかや、はるぐと思ひ候へども、日を重ねて急ぎ候程に、是ははや相摸國六浦の里に著きて候。この渡りをして安房の清澄へ參らうずるにて

星月夜―鎌倉の枕詞

六浦―武州金澤灣沿ひ―日蓮上人

の剃髪せし寺なり

爲相―定家の孫爲家の子母は阿佛尼

候。又あれに由ありげなる寺の候を人に問へば、六浦の稱名寺とかや申し候程に、立ち寄り一見せばやと思ひ候。なう〳〵御覽候へ山々の紅葉今を盛と見えて、さながら錦を晒せる如くにて候。都にもかやうの紅葉の候べきか。又是なる本堂の庭に楓の候が、木立餘の木に勝れ、只夏木立の如くにて、一葉も紅葉せず候。如何さま謂れのなき事は候まじ、人來りて候はど尋ねばやと思ひ候。

レヲ謡「なう〳〵御僧は何事を仰せ候ぞ。ワキ詞「さん候是は都より始めてこの所一見の者にて候が、山々の紅葉今を盛と見えて候に、是なる楓の一葉も紅葉せず候程に、不審をなし候。レヲ詞「げによく御覽じ咎めて候、いにしへ鎌倉の中納言爲相の卿と申しょ人、紅葉を見んとてこの所に來りたまひし時、山々の紅葉いまだなりしに、この木一本に限り紅葉色深くたぐひなかりしかば、爲相の卿とりあへず、謡如何にしてこの一本に時雨けん、詞山にさきだつ庭のもみぢ葉と詠じ給ひしより、今に紅葉をとどめて候。ワキ詞「おもしろの御詠歌やな。われ數ならぬ身なれども、手向のためにかくばかり、謡舊りはつるこの

功成名遂身退天道―老子の語

一本の跡を見て、袖のしぐれぞ山にさきだつ。

レヲ詞「さて〳〵先に爲相の卿の御詠歌より、今に紅葉をとどめたる、謂れは如何なる事やらん。レヲ詞「實に御不審は御理。さきの詠歌に預りし時、この木心に思ふやう、かよる東の山里の、人も通はぬ古寺の庭に、われさきだちて紅葉せずは、いかで妙なる御詠歌にも預るべき、謡功成り名遂げて身退くは、詞是天の通なりといふ古き言葉を深く信じ、今に紅葉をとどめつょ、只常磐木の如くなり。ワキ謡「是は不思議の御事かな。この木の心をかほどまで、知しめしたる御身はさて、如何なる人にてましますぞ。レヲ詞「今は何をか包むべき、我はこの木の精なるが、御僧たつとくまします故に、只今現れ來りたり。謡今宵はこょに旅居して、夜もすがら御法を說き給はど、重ねて姿を見え申さんと、下歌地謡「夕べの空も冷ましく、この古寺の庭の面、霧の籬の露深き、千草の花をかき分けて、ゆくへも知らずなりにけり。ゆくへも知らずなりにけり。（中入）

三人上歌謡「所から、心にかなふ稱名の、心にかなふ稱名の、御法の聲も松風も、はや更け過ぐる秋の夜の、月澄み渡る庭の面、寢られんものかおもしろや。寢られんものかおもしろや。

後シテ一聲謡「あら有難の御弔ひやな。妙なる値遇の緣に引かれて、二度こゝに來りたり。夢ばしさまし給ふなよ。ワキ謡「不思議やな月澄みわたる庭の面に、有りつる女人と思しくて、影の如くに見え給ふぞや。草木國土悉皆成佛の、この妙文を疑ひ給はで、なほ〳〵昔を語り給へ。

シテ、クリ謡「夫れ四季をり〳〵の草木、おのれ〳〵の時を得て、地謡「花葉さま〴〵のその姿を、心なしとは誰かいふ。シテ、サシ謡「先づ青陽の春のはじめ、地謡「色香妙なる梅が枝の、かつ咲きそめて諸人の、心や春になりぬらん。シテ謡「又は櫻の花盛、地謡「只雲とのみ三吉野の千本の花にしくはなし。クセ「月日經て移れば變る詠めかな。櫻は散りし庭の面に、咲きつゞく卯の花の、垣根や雪に紛ふらん。時移り夏暮れ、秋も半になりぬれば、空定

露時雨云々―古今集に「白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり」

佛果―成佛

秋の夜の云々―伊勢物語の歌

吹きしをり―吹き綴むこと

めなき村時雨、きのふは薄きもみぢ葉も露時雨もる山は、下葉殘らぬ色とかや。シテ謡「さるにても、東の奥の山里に、地謡「あからさまなる都人の、哀も深き言の葉の、露の情に引かれつゝ姿をまみえ數々に、言葉を交す値遇の緣、深き御法を授けつゝ、佛果を得しめ給へや。

シテ謡「更け行く月の夜遊をなし、地謡「色なき袖をや返さまし。（序ノ舞）シテ、ワカ謡「秋の夜の、千夜を一夜に重ねても、地謡「言葉殘りて鳥や鳴かまし。

シテ謡「八聲の鳥も數々に、地謡「八聲の鳥も數々に、鐘も聞ゆる、シテ謡「明方の空の、地謡「所は六浦の浦風山風、吹きしをり吹きしをり、散るもみぢ葉の月に照り添ひて、唐紅の庭の面、明けなば恥し、暇申して歸る山路に、行くかと思へば木の間の月の、行くかと思へば木の間の月の、かげろふ姿となりにけり。

松山鏡

梗概　越後の松の山家に、母に別れし少女、亡き母を慕ひてその形見の鏡を取出しては己が姿の映るを、母よと懐しがりて暮せりといふを前段とし、後段にては、母は地獄にありたれど、孝女の弔ひによりて、極樂往生をなす事を作る。（五番目）

シテ　俱生神　ツレ　母　ツレ　姫　ワキ　父

ワキ詞「是は越後國松の山家に住まひする者にて候。さても某久しく添ひ馴れし妻に後れ、昨日今日とは存じ候へども、はや三年になりて候。又忘れ形見に姫を一人持ちて候が、あまりに母が事を歎き候程に、對の屋を作り傍に置きて候。又今日は彼が母の命日にて候程に、持佛堂に立ち出で、燒香せばやと思ひ候

姫、サレ詞「雲となり雨となり、陽臺の時留め難く、花と散り雪と消え、金谷の春ゆくへもなし。月日の道に關守なければ、母御に離れて今年ははや、既に三年のその日なり。

對の屋―寢殿造りの廂築にて東西に構へたる建物

雲となり雨となる―楚襄王神女に會ひて別るゝ時神女の言ひし語

金谷―晉の石崇の別莊

ワキ詞「あら無慙や、何事やらん姫が獨言を申し候。いかに姫が有るか。父が來りたるぞ、持佛堂を開け候へ。あら不思議や、何やらん物を立ち隱すやうに候。如何に姫、さても汝が母に後れし時、元結切り遁世せばやと存じ候ひつれども、一族どもの諫めにより、今まで浮世の住まひたり。汝男子ならば父と一所に有るべけれども、女子なれば對の屋を作り置くなり。それに父が來りて姫よと呼ばゝ、さも嬉しげにて立ち迎ふべきにさはなくして。何やらん物を立ち隱すけしきの見えて候。さては人の申すも誠にて候ひけるぞや、實に汝は今の母を木像に作り、明暮呪詛するといふは眞か。何とてさやうにあさましき心をば持ちて有るぞ。母を戀しく思はど、經念佛し弔ひてこそ、死したる母も成佛し、おことも同じ蓮の緣となるべきにさはなくして、さやうに恐しき事をたくまば、正しく浮べき母も奈落に沈み、おことも同じ罪に沈むべき事のあさましさよ。何とて物をば申さぬぞ。姫詞「さやうに御叱り候はど、隱さず申し候べし。いたはしや母御前、今を限りの御時、この鏡を和御前に取らするなり。母が姿を殘す形見なり、戀しき時は見

鏡山―古今集黒主の歌に「鏡山いざ立寄りて見て行かん年経ぬる身は老いやしぬると」とあるを鏡の縁にて引く

るべしと、仰せ候ひし程に、ある時この鏡を見れば、母の面立映りしより、猶若やぎて見え給へば、上歌地謡「さてはなからん跡までも、さてはなからん跡までも、添ひ添はれんと面影を、残させ給ひける、母御の慈悲ぞ有難き。不審に思召されば、見せ参らせん鏡山、立ち寄り給へ父御前、立ち寄り給へ父御前。

ワキ詞「是は不思議なる事を申す物かな。空しくなりし母の何しに鏡に映りて見え候べき。但しきつと思ひ出だしたる事の候。漢の武帝の后李夫人亡くならせ給ひて後、帝后の御別れを悲しみ給ひ、御姿を甘泉殿の壁に寫し、明暮叡覽有りしかども、もとより繪に書ける形なれば物いはず笑はず、なか〳〵愁ぞ増ると悲しみ給ふ。ある時仙人の告げて曰く、まこと后の御姿を、叡覽有りたく思召さば、月の夜の隈なからんに、反魂香を焚き給へと有りしかば、敎へにまかせて月の夜の隈なきに、反魂香を焚き給へば、煙の内に后の御姿まみえ給ひし例もあり。又我朝の聖武皇帝の后、光明皇后亡くならせ給ひて後、是も后の御別れを悲みたまひ、梵天に祈誓し給へば、閻王憐みたまひ、玉の輿に乘せ奉り、二たび娑婆に送り給ひし例もあり。さりながらそれは上代の事、是は末世の今の世に、さやうの事の有るべきとは存じ候はねども、かれが母も姫に名残を深く惜しみ候ひし程に、もし又さやうの事もや候らん、立寄りて鏡を見ばやと存じ候。や、さればこそ筋なき事を申し候。やあ如何に姫、この鏡に母が影のうつる事はなきぞとよ。何とて筋なき事をば申すぞ。姫詞「恨めしやあれ程母のましますを、思ひ隔てよ山鳥の、おろかに見させ給ふかと、鏡の前に泣き居たり。クドキ實にや別れての、涙も未だ干ぬ袖に、異妻を重ね給ひぬれば、其恨みにや戀衣の、見えじと思召さるらめ、よし父にこそ疎くとも、地謡「我には見えよ垂乳根の、親の飼ふ蠶の、黛の、いと細し誰をかも、戀ひ痩せ顔ぞ見ても泣く、涙がすみの悲しやな。底より曇り増鏡、あれこそ母よ御覽ぜよと、我が影に指をさす。實にあはれなりされば、幼き身の心なれ。幼き身の心なれ。ワキ詞「言語道斷の事。我が影の鏡に映るを見て、母が影にて有る由を申し候は如何に。總じてこの松の山家と申すは、無佛世界の所にて、女なれども齒鐵漿をつけず、色を飾る

山鳥の―尾ををろといふより愚に掛く山鳥のをろのはつをに鏡掛けといふ歌あり山鳥の友を慰ひしに鏡を見せし話枕草子に出づ

垂乳根の―拾遺集の歌三句以下層ごもりいぶせくもあるか妹にあはずて

無佛世界―愚癡者の多き土地

事もなければ、まして鏡などと申す物をも知らず候ひしを、某一年都に上りし時、鏡を一面買ひとりて彼が母に取らせて候へば、世になき事に悦び候ひしが、今はのとき姫を近づけ、我を戀しく思はん時は、この鏡を見よと申しょ程に、我が影の映るを見て母と思ひ歎く事の不便さは候。いやゝ所詮鏡の謂れを語つて歎きをとどめばやと思ひ候。やあ如何に姫、總じて鏡といふ物には、何にてもあれ向ふ物の影の映るぞとよ、是是見候へ、父が立ちよれば父が影、扇を映せば扇の影、こょを以て思ひ知れ。姫「實に實に父の仰せの如く、今こそかくとも三吉野の、ワキ「岸の山吹風吹けば　姫「底なる影も散れば散り、ワキ「匿ければ匿く欺冬の、姫「影をあやまつ、ワキ「はかなさよ。地「子ながらも、是ほど母に似けるよと、わが影ながら懐しや。ワキ「父は涙にかきくれてや、地「我こそは曇らすれ、面目なの鏡や。

ツレ「子は親に、似るなる物と思はれて、戀しき時は鏡をぞ見る。ダリ地「往事渺茫としてすべて夢に似たり。舊友零落してなかば泉に歸す。母、サレ「之を水といはんとすれば、

三吉野の云々―古今六帖の「吉野川岸の山吹吹く風に底の影さへうつろひにけり」の意

往事渺茫都似夢舊友零落半歸泉―白氏文集の句景は黄泉なり冥途也

之を水と云々―源順の賦「花光浮水上」の文句

地「卽ち漢女が粉を添ふる鏡清瑩たり。母「花といはんとすれば、蜀人文を洗ふ錦。地「我とても、娑婆の故郷に立ち歸らば、錦の袴君が爲、母「昔を語り申すべし。地「夢驚かし給ふなよ。クセ唐に陳氏とて、賢女の聞え有りけるが、世の習思はずも、夫遠行の子細あり、是や限と思ひけん、形見の鏡割りて猶、光ぞ殘る三日月の、宵に待ち明けて恨み、文も絶え主も來ず、憂き年月を故郷の、軒端の荻の秋更けて、風の便りの傳聞けば、夫はその國の主となり、あらぬ妹背の川波の、立ち歸るべきやうもなし。さては逢ふ事もかた見の鏡我ひとり、涙ながらに影見れば、半月の山の端に、打ち傾いて泣くならで、せん方もなき折節に、母「いづくよりとも知らざりし、地「鵲一つ飛び來り、陳氏が肩に羽を休め、飛び廻り飛び下り、舞ふよと見しが不思議やな、有りし鏡の割となり、もとの如くになりにけり。滿月の山を出で、碧天を照らす如くなり。是や賢女の、名を磨く鏡なるべし。

陳氏―陳の徐德言の妻

後シテ「如何に罪人何とて遲きぞ。詞片時の暇といひつるに、地「冥官怒をなし給へば、

冥官―地獄の官人

俱生神―鬼人を責むる神
玻璃の鏡―閻魔の殿にあり

ワキ　俱生神急ぎ苦患を見せよとの仰せを蒙り、瞋恚の燃えたつ熱鐵の笞を振り上げて、地謡「うつ蟬の、うつ蟬の、骸は娑婆にや留まるらん、魂は冥途にもぬけの衣の、玻璃の鏡の潔き、面前に引つさげ引き向け、あれ見よ娑婆にての罪科よ。（舞働）シテ　地謡「こは如何に不思議やな、地謡「こは如何に不思議やな、孝子の弔ふ功力によつて、鏡の影をよく見れば、頭に玉釵膚は金色、兩臂をかどみて手を合はすれば、さながら菩薩の坐像かと、御空に花降り虚空に音樂、聞かず見もせぬ冥途の奇特、すはや地獄に歸るぞとて、大地をかつぱと踏み鳴らし、大地をかつぱと踏み破つて、奈落の底にぞ入りにける。

平の都―延暦十三年平安京遷都
伏見云々―金札宮として天太玉命を祀る社を造營せらるゝなり

外十一　金札

梗概

桓武天皇御遷都の砌、勅使伏見に至りて神社造營の折ふし、奇特に逢ふ由を作る。祝言能なり。

シテ　天太玉神（前は老翁）　ワキ　勅使

三人　次第謡「風も靜に楢の葉の、風も靜に楢の葉の、鳴らさぬ枝ぞ長閑けき。ワキ謡「抑是は桓武天皇に仕へ奉る臣下なり。さても山城國愛宕の都に、平の都をたて置き給ひ、國土安全のみぎんなり。同じく當國伏見の里に、大宮造有るべきとの勅諚を蒙り、只今伏見に下向仕り候。三人　上歌謡「嬉しきかなやいざさらば、嬉しきかなやいざさらば、この松蔭に旅居して風も嘯く寅の時、神の告をも待ちて見ん、神の告をも待ちて見ん。レ

眞如の槻弓―月より槻につるく蒼蠅なす―惡神の形容　ひもろぎ―神籬

謡「守るべし、我が國なれば、皇の、萬代いつと限らまし。地謡「限らじな限らじな、榮ゆく御代を守のしるし、ワキ謡「たゞ重くせよ神と君。地謡「重くすべしや重くすべしや、扉も金の御札の神體、光もあらたに見え給ふ。四海を治めし御姿、四海を治めし御姿、ワキ謡「あらたに見よや君守る、地謡「八百萬代のしるしなれや。ワキ謡「惡魔降伏の眞如の槻弓、地謡「さて又次には蒼蠅なす、ワキ謡「荒ぶる神も祓のひもろぎ、地謡「その神託は數々に、左も右も神力の、惡魔を射拂ひ淸めをなすも、金胎兩部の形なり。（舞働）ワキ謡「とても治まる國なれば、地謡「とても治まる國なれば、なか〳〵なれや君は船、臣は瑞穗の國も豐に治まる代なれば、東夷西戎、南蠻北狄の、恐れなければ、弓を外し劍を納め、君も直に民を守の、御札は宮に、納まり給へば影さしおろす玉簾、影さしおろす玉簾、ゆるがぬ御代とぞなりにける。

西川―京都の西なる大井川　占方―陰陽師の占ひ勘へたることをいふ

一人武者―誰とも名明ならず前

大江山

梗概　頼光保昌の一行、勅を受けて、大江山の酒呑童子を退治せんとて、山伏姿にて出で向ひ、めでたく討取りて來る事を作る。（五番目）

シテ　酒呑童子　ツレ　同行山伏　ワキ　源頼光　狂言　童子侍女

ワキ、ツレ、一聲謡「秋風の、音にたぐへて西川や、雲も行くなり大江山。ワキ、サシ謡「抑是は源の頼光とは我が事なり。扨もこの度丹波國、大江山の鬼神の事、占方の言葉に任せつゝ、頼光保昌に仰せ付けらる。ツレ謡「頼光保昌申すやう、たとひ大勢有りとても、人倫ならぬ化生の者、いづくを境に攻むべきぞ。ワキ謡「思ふ子細の候とて、山伏の姿に出で立ちて、ツレ謡「兜にかはる兜巾を著、ワキ謡「鎧にあらぬ篠懸や、ツレ謡「兵具に對する笈を負ひ、ワキ謡「そのぬし〳〵は頼光保昌、ツレ謡「貞光季武綱公時、ヒトリ武者謡「又名を得たる一人武者、

の土御祓にもあり

ツレ謡「彼是以上五十餘人。ワキ謡「まだ夜の内に有明の、ツレ、地謡「月の都を立ち出でて、月の都を立ち出でて、行末問へば西川や、波風立てゝ白木綿の、御祓も頼もしや。鬼神なりと大君の、惠に漏るゝ方あらじ。只分け行けや足引の、大江の山に著きにけり。大江の山に著きにけり。

手をさゝじ―手向はじ

ワキ詞「急ぎ候程に、大江山に著きて候。いかに誰かある、狂言詞「御前に候。ワキ詞「この所にて童子の栖を尋ねて宿をとり候へ。狂言詞「畏つて候。如何に童子の御座有るか。シテ詞「童子と呼ぶは如何なるものぞ。狂言詞「山伏達の御入り候が、一夜の御宿とおほせられ候。シテ詞「何と山伏達の一夜の宿と候や。恨めしや桓武天皇に御請申し、われ比叡の山を出でしより、出家には手をさゝじと、固く誓約申せしなり。中門の脇の廊に留め申し候へ。狂言シカ〳〵、

狂言―この狂言方は童子の侍女にて折から川にて衣を洗ひ居るなり

シテ詞「いかに客僧達、いづくより何方へ御通り候へば、この隱家へはおんいでにて候ぞ。ワキ詞「さん候、是は筑紫彦山の客僧にて候が、麓の山陰道より道に踏み迷ひ、前後を忘じ佇み候所に、今宵の御宿何より以て祝著申し候。さて御名を酒呑童子と申し候は、何と申したる謂れにて候ぞ。シテ詞「我が名を酒呑童子と云ふ事は、明暮酒を好きたるにより、眷屬ともに酒呑童子と呼ばれ候。されば此を見彼を聞くにつけても、酒ほど面白き物はなく候。客僧達もきこし召され候へ。ワキ詞「仰せにて候程に一つ下され候べし。又この山をばいつの頃よりの御居住にて候ぞ。シテ詞「われ比叡の山を重代のすみかとし、年月を送りしに、大師坊と云ふえせ人、嶺には根本中堂を建て、麓に七社の靈神を齋ひし無念さに、一夜に三十餘丈の楠となつて奇瑞を見せし所に、大師坊一首の歌に、謡「阿耨多羅三貌三菩提の佛たち、詞「我が立つ杣に冥加あらせ給へとありしかば、佛たちも大師坊にかたらはされ、出でよ〳〵と責め給へば、力なくして重代の、比叡のお山を出でしなり。ワキ謡「さて比叡山を御出でありて、そのまゝこゝに御座ありけるか。シテ詞「いや何くとも定めなき、霞にまぎれ雲に乘り、ワキ謡「身は久方の天ざかる、鄙の長路や遠田舍。シテ詞「御身の故郷と承る、謡「筑紫をも見て候なり。ワキ謡「さては殘らじ天が下、天ざか

大師坊―傳教大師

根本中堂―毘沙門護世堂と一切經藏との中なる一乘止觀院のこと

七社―大宮二宮聖眞子八王子客人十禪師三宮を山王七社といふ

阿耨多羅三藐三菩提―佛を讃美して稱する語

る日のたてぬきに、シテ謡「飛行の道に行脚して、ワキ謡「あるひは彦山、シテ謡「伯耆の大山、ワキ謡「白山立山富士の御嶽、シテ詞「上の空なる月に行き、ワキ謡「雲の通路歸り來て、シテ詞「猶も輪廻に心ひく、ワキ謡「都のあたり程近き、シテ詞「この大江の山に籠り居て、ワキ謡「忍び〳〵の御住まひ、シテ詞「隱れすまして有りし所に、今客僧達に見顯れ申し、謡通力を失ふばかりなり。ワキ謡「御心安く思召せ、人に顯す事あるまじ。シテ詞「うれしよ〳〵一筋に、頼み申すぞ一樹の陰、ワキ謡「一河の流を汲みて知る、心は本より慈悲の行、シテ謡「人をたすくる御姿、ワキ謡「我はもとより出家の形、シテ謡「童子もさすが山育ち、ワキ謡「さも童形の御身なれば、シテ謡「あはれみ給へ、ワキ謡「神だにも、地謡「一兒二山王と立て給ふは、神を避くるよしぞかし。御身は客僧、我は童形の身なれば、などかあはれみ給はざらん、かまへてよそにて、物語りせさせ給ふな。

上歌地謡「陸奥の、安達が原の塚にこそ、安達が原の塚にこそ、鬼こもれりと聞きし物を、眞なり〳〵、こよは名を得し大江山、生野の道は猶遠し、天の橋立與謝の海、大山の天

一兒二山王―當時の語

陸奥の云々―上総安達原をみよ

大江山云々―小式部内侍の歌を引く

狗も、我に親しき、友ぞと知ろし召されよ。いざ〳〵酒を飲まうよ。いざ〳〵酒を飲まうよ。さてお肴は何々ぞ。頃しも秋の山草、桔梗刈萱我帽額、紫苑と云ふは何やらん、鬼の醜草とは、誰がつけし名なるぞ。シテ謡「げにまこと、地謡「げにまこと、丹後丹波の境なる。鬼が城も程近し、頼もしや〳〵、飲む酒は數そひぬ、面も色づくか、赤きは酒の料ぞ、鬼となる思しそよ、恐れ給はで、我に馴れ〳〵給はど、興がる友と思召せ。我もそなたの御姿、打ち見には、打ち見には、恐しげなれど、馴れてつほいは山伏。猶々めぐる盃の、たび重なれば有明の、天も花に醉へりや。足本はよろ〳〵と、たどよふかいざよふか、雲折り敷きてそのまよ、日に見えぬ鬼の間に入り、荒海の障子おしあけて、夜のふしどに入りにけり。夜のふしどに入りにけり。（中入）

ワキ詞「すでにこの夜も更方の、空なほ闇き鬼が城、鐵の扉を押開き、見れば不思議や今までは、人の形と見えつるが、地謡「その丈二丈ばかりなる、その丈二丈ばかりなる、鬼神の裝ひ、眠れるだにも勢の、あたりを拂ふ氣色かな。かねて期したる事なれば、と

宗苑―しをんの昔をしをにと云ふより鬼の意を轉ず

鬼の醜草―宗苑のことなりとも忘れ草のことなりとも云ふ

訓れてつほい―つほいといはいとしげといふ意にて奥州の方言なりと其蜘蛛草にに見ゆ

鬼の間―荒御の障子共に傳涼殿に在り鬼の緣として此所に記す

ても命は君のため、又は神國氏社、南無や八幡山王權現、我等に力をそへ給へと、頼光保昌、綱、公時、貞光、季武一人武者、心を一つにして、まどろみ伏したる鬼の上に、劍を飛ばする光の影、稲妻震動おびたゞし。後シテ謡「情なしとよ客僧達。僞あらじと云ひつるに、鬼神に横道なきものを。ヒトリ武者謡「何鬼神に横道なしとや。シテ謡「なか〳〵の事。ヒトリ武者謡「あら空言やなどさらば、王地に住んで人を取り、世の妨げとはなりけるぞ。我をば音にも聞きつらん、保昌が館に一人武者、鬼神なりとも遁すまじ。ましてや是は勅なれば、謡土も木も我が大君の國なれば、いづくか鬼の宿りなるらん。地謡「餘すな洩らすな、攻めよや攻めよ人々とて、切先を揃へて切つてかゝる。山河草木震動して、山河草木震動して、光満ちくる鬼の眼、たゞ日月の天つ星、照りかゝやきてさながらに、面を向くべき樣ぞなき。（働）

ワキ謡「頼光保昌もとよりも、地謡「頼光保昌もとよりも、鬼神なりともさすが頼光が、手なみにいかで洩らすべきと、走りかゝつてはつたと打つ手に、むずと組んで、えいやえいやと組むとぞ見えしが、頼光下に組み伏せられて、鬼一口に食はんとするを、頼光下より刀を抜いて、二刀三刀さしとほし〳〵、刀を力にえいやとかへし、さもいきほへる鬼神を押しつけ、怒れる首を打ち落し、大江の山をまた踏みわけて、都へとてこそ歸りけれ。

岩船

梗概　住吉の浦にて市を開かれ、外國の寶を買取るため、勅使參向あり。龍神現じて寶船を曳く事を作る。御代をことほぐ祝言能なり。本文は原文を省略したる形なり。

シテ　龍神　ワキ　勅使

三人　次第　けに治れる四方の國、けに治れる四方の國、關の戸さよで通はん。ワキ　そもそも是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても我が君賢王にましますにより、吹く風枝を鳴らさず民戸ざしをさゝず、誠にめでたき御代にて候。さる間攝州住吉の浦に始めて濱の市を立て、高麗唐の寶を買ひ取るべしとの宣旨に任せ、只今津の國住吉の浦に下向仕り候。三人　上歌　けに今とても神の代の、けに今とても神の代の、誓は盡きぬしるしとて、神と君との御恵眞なりけり、有難や。眞なりけり　有難や。ワキ　我はこれ下界に住んで、神を敬ひ君を守る、秋津島根の龍神なり。地　あるひは神

寶の市―船著場に市を開くこと

勅も重しや―勅も船も重しとなり

天の探女―岩舟に乘りて下りし神

八大龍王―上卷春日龍神を見よ

津守―積りを樹く

代の佳例をうつし、ワキ　又は治る御代に出でて、地　寶の御船を守護し奉り、ワキ　勅も重しや勅も重しや、この岩船、地　寶をよする波の鼓、拍子を揃へてえいやゝ。ワキ　引けや岩船、地　天の探女は、ワキ　波の腰鼓、地　ていたうの拍子を、打つなりやさゞら波、經めぐりめぐりて住吉の松の風、吹きよせよえいさ、えいさらえいさと、おすや唐艪の、おすや唐艪の、潮の滿ちくる浪に浮んで、八大龍王は海上に飛行し、御船の綱手を手に繰り絡まき、汐に引かれ波に乘つて、長居もめでたき住吉の岸に、寶の御船を著け納め、數も數萬の捧げ物、運び出すや心の如く、金銀珠玉は降り滿ちて、山のごとくに津守の浦に、きみを守の神は千代まで、榮うる御代とぞなりにける。

知章

梗概　一の谷の軍敗れて、つひに討死せし知章の遺跡に廻り會ひし旅僧の、知章の幽靈現れて軍物語をなすを聽くことを作る。（二番目）

シテ　平知章（前は男）　ワキ　僧

ワキ次第謡「春を心のしるべにて、春を心のしるべにて、憂からぬ旅に出でうよ。詞　是は西國方より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候程に、只今思ひ立ち都一見と志候。道行謡旅衣、八重の潮路をはるゞと、八重の潮路をはるゞと、猶末ありと行く波の、雲をも分くる沖つ船、われも浮世の道出でて、いづくともなき海際や、浦なる關に著きにけり。浦なる關に著きにけり。詞　さてもわれ鄙の國よりはるゞと、是なる磯邊に來て見れば、新しき卒都婆を立て置きたり。亡き人の追善と思しくて、要文さまゞ書き記し、物故平の知章と書かれたり。謡　知章とは平家の御一門の御中にては、誰にてかましますらん、あら痛はしや候。

浦なる關―須磨

要文―佛經中の重なる文句

物故―故人のこと

シテ詞「なうゝ御僧は何事を仰せ候ぞ。ワキ詞「是は遠國より上りたる僧にて候が、是なる卒都婆を見れば、物故平の知章と書かれて候。御一門の御中にて候やらんと痛はしく存じ、一遍の念佛を廻向申して候。シテ詞「げにゝ遠國の人にてましませば、知ろしめさぬは御ことわり。知章とは相國の三男新中納言知盛の御子息にて候、二月七日の合戰に、此一の谷にて討たれさせ給ひて候。さればその日も今日にあたりたれば、ゆかりの人の立てたる卒都婆にて候。時もこそあれ御僧の、今日しもこゝに來り給ひ、廻向し給ふありがたさよ。謡　一樹の陰一河の流、是又他生の縁なるべし。よくゝ弔ひ給ひ候へ。ワキ謡「げにゝ仰せのごとく、他生の縁のおればこそ、かりそめながらこゝに來て、シテ謡「無緣の利益をなす事よと、ワキ謡「思の珠の數繰りて、ワキ謡「弔ふ事よさなきだに、シテ、ワキ謡「一見卒都婆永離三惡道、何況造立者、必生安樂國、物故平の知章成等正覺。下歌地謡「きのふは人の上、けふは我をも知らぬ身の、しかも弓馬の家人ならば、法にひか

思の珠―數珠

一見云々―上卷卒都婆小町を見上

れつゝ、佛果に至り給へや。上歌只一念の功力だに、只一念の功力だに、三惡の罪は消えぬべし。まして妙にも說く法の、道のほとりの亡き跡を、逆緣もなどかなかるべき、逆緣もなどかなかるべき。

ワキ詞「さて知盛の御最期は何とかならせ給ひて候ぞ。シテ詞「さん候知盛は、あれに見えたる釣舟の程なりし、遙の沖の御座船に、追ひつき助かり給ひて候。ワキ詞「さてあれまでは小船に召されて候か。シテ詞「いや馬上にて候ひし。その頃井上黑と云ふ竟の名馬たりしが、二十餘町の海の面を、やすゝと泳ぎ渡り、主を助けし馬なり。されども船中に所無かりし間、乘する人も無くして、又もとの汀に泳ぎ上り、この馬主の別れを慕ふかと思しくて、沖の方に向ひ高嘶きし、足搔きしてぞ立つたりける。語畜類も心ありけるよと、見る人哀を催しけり。地謡「越鳥南枝に巢をかけ、胡馬北風に嘶えしも、舊鄕を忍ぶ故なりとか、胡馬は北風をしたひ、この馬は西に行く船の、纜につながれても、行かばやと思ふ心なり。

用意―丈夫

越鳥云々―故郷を戀ふる意の語文選の古詩に出く

ロンギ地謡「さるほどに、日もはや暮れて須磨の浦、海士の磯屋に宿りして、逆緣ながら弔はん。シテ謡「げに有難や我とても、よそ人ならず一門の、内外に通ふ夕月の、後の世の暗を訪ひたまへ。地謡「そも一門の内ぞとは、御身いかなる人やらん。シテ謡「今は何をか包井の、水隱れて住むあはれ世に、地謡「亡き跡の名は、シテ謡「白眞弓の、地謡「歸る方を見れば、須磨の里にも野山にも、行かで汀のかたをなみ、蘆邊をさして行く田鶴の、浮きぬ沈むと見えしまゝに、後影も失せにけりや。後影も失せにけり。（中入）

ワキ上歌謡「夕波千鳥友寢して、夕波千鳥友寢して、處も須磨の浦づたひ、野山の風もさえかへり、心も墨の衣手に、この御經を讀誦する。この御經を讀誦する。後シテ一聲謡「あら有難の御弔ひやな。われ修羅道の苦しみの、隙なき内にかくばかり、魂靈にひかれて來りたり。浮べき、波こゝもとや須磨の浦、地謡「海少しある通路の、シテ謡「うしろの山風上野のあらし、地謡「草木國土有情非情も、悉皆成佛の、彼岸の海際に、浮出でたる有難さよ。ワキ謡「ふしぎやなさもなまめきたる若武者の、波に浮みて見え給ふは、いかなる人にてま

かたをなみ云々―山部赤人の歌を引く

波こゝもとや―このあたり源氏物語の語に據る

つま匂ひ―端を美しく彩れること
繪島―淡路の名所
ちはいとの―内大臣宗盛のこと
監物太郎―知章の郎等頼賢

しますぞ。シテ詞「誰とはなどや愚なり。御弔ひのありがたさに、知章これまで参りたり。ワキ謡「さては平家の公達を、まのあたりに見たてまつることよと、昔にかへる浦波の、シテ謡「浮織物の直垂に、つま匂ひの鎧著て、ワキ謡「さも華やかなる御姿、シテ謡「所もさぞな、ワキ謡「須磨の浦に、上歌地謡「朧なる、假の姿や月の影、假の姿や月の影、うつす繪島の島隠れ、行く船を、惜しとぞ思ふ我が父に、別れし船影の、跡白波もなつかしや。よしとても終にわが、憂き身を捨てよ西海の、藻屑となりし浦の波、重てとひてたび給へ、重てとひてたび給へ。

ワキ詞「さらばその時の有樣委しく御物語り候へ。クリ地謡「さてもその時の有樣語るにつけて憂き名のみ、龍田の山の紅葉葉の、くれなる靡く旗のあし、ちりぐにになるけしきかな。シテ、サシ謡「主上二位殿をはじめ奉り、その外おほいとの父子、地謡「一門皆々船に取り乗り、海上に浮よそほひ、只滄波のうねに浮き沈む水鳥の如し。シテ謡「その中にも親にて候新中納言、われ知章監物太郎、主従三騎に討ちなされ、地謡「御座船をうかどひこの

累葉―兄弟のこと

汀に打出たりしに、敵手しげくかよりし間、又引つかへし打ちあふ程に、知章監物太郎、主従こよにて討死する。シテ謡「その際に知盛は、地謡「二十餘町の沖に見えたる、大臣殿の御船まで、馬を泳がせ追ひついて、御船に乗りうつり、かひなき御命助かり給ふ。クセ知盛その時に、おほいとのの御前にて、涙を流し宣はく、武蔵の守も討たれぬ、監物太郎頼賢も、あの汀にて討たるゝを、見捨てゝ是まで参る事、面目もなき次第なり、いかなれば子は親のため、命を惜しまぬ心ぞや、いかなる親なれば、子の討たるゝを見すてけん、命は惜しきものなりとて、さめぐと泣き給へば、よその袖も濡れにけり。おほいとのも宣はく、武蔵の守はもとよりも、心も剛にして、よき大將と見しぞとて、御子清宗の、方を見やりて御涙を、流し給へば船の中に、つらなれる人々も、鎧の袖をぬらしけり。シテ謡「武蔵の守知章は、地謡「生年二八の春なれば、清宗も同年にて、共に若葉の磯馴松、千代を重ねて榮ゆくや、累葉枝を連ねつゝ、一門門をならべしも、今年の今日のいかなれば、所も須磨の山櫻、若木はちりぬ埋木の、浮きてたゞよふ船人と、なりゆく

果ぞかなしき。ロンギ地謡「げに痛はしき物語。同くは御最期を、懺悔に語りたまへや。レテ謡「げにや最期のありさまを慙愧懺悔にあらはし、修羅道の苦患免れん。地謡「げに修羅道のくるしみの、その一念も最期より、レテ謡「聞きつるまゝの敵にて、地謡「すはや寄せくる。レテ謡「浦の波、地謡「團扇の旗は兒玉黨か、ものゝしといふまゝに、監物太郎が放つ矢に、敵の旗さしの、首の骨篦深に射させて、眞逆さまにどうと落つれば、レテ謡「主人とおほしき武者、主人とおほしき武者、新中納言を目にかけて、かけよせて討つ處を、親を討たせじと、知章かけ塞がつて、むずと組んでどうと落ち、取つて押さへて首かき切つて、起きあがる處を、又敵の郎等落ち合ひて、知章が首を取れば、終にこゝにて討たれつゝ、そのまゝ修羅の業に沈むを、思はざるに御僧の、弔ひは有難や、是ぞ眞の法の友よ、これぞ眞の知章が、跡とひてたび給へ　亡きあとをとひてたび給へ。

旗さし―旗持の雜兵

菜ッ―卵の窟

俊成忠度

梗概　岡部六彌太、忠度を討取りたるに「行きくれて」の歌を見出でしかば、そを俊成の許に届けたるに、折から忠度の幽靈も現れ出でて、修羅道の苦患を叙ぶることを作る。中に歌道の事を交へ説けり。上卷の忠度と併せ見るべし。（二番目）

シテ　平忠度　　ツレ　藤原俊成
ワキ　岡部六彌太　　トモ　俊成從者

ワキ謡「かやうに候者は、武藏國の住人、岡部の六彌太忠澄にて候。さても今度西海の合戰に、薩摩の守忠度をば、某が手に懸け失ひ申して候。御最期の後尻籠を見奉れば、短册の御座候。又承り候へば、五條の三位俊成卿と、和歌の御値遇の由申し候間、この短册を持ちて參り、俊成卿の御目にかけばやと存じ候。如何に案内申し候。トモ詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「岡部の六彌太忠澄が參りたる由御申し候へ。トモ詞「心得申し

尻籠―矢を容るる器

候。如何に申し上げ候。トモ詞「何事にて有るぞ。トモ詞「岡部の六彌太忠澄の伺候申されて候
俊成詞「此方へと申し候へ。トモ詞「畏つて候。此方へ御參り候へ。ワキ詞「心得申し候。
俊成詞「いかに忠澄、さて只今は何のために來り給ひて候ぞ。ワキ詞「さん候只今參る事餘
の儀にあらず。西海の合戰に薩摩の守忠度をば、某が手に懸け失ひ申して候。御最期の
後尻籠を見候へば短册の御座候。承り候へば忠度とは、淺からぬ和歌の御値遇の由承
り候ふ間、御目に懸けばやと存じ、只今持ちて參りて候。俊成詞「此方へ賜はり候へ。謡實
にや弓馬の道ならねど、いつしか世に名を殘し置き給ふ事のあはれさよ。何々旅宿の花
と云ふ題にて、謡行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵の主ならまし。上歌地謡「痛はし
や忠度は、痛はしや忠度は、破戒無慙の罪を恐れ、仁義禮智信、五つの道も正しくて、
歌道に達者たり、弓矢に名をあげ給へば、文武二道のたどのりの、船を得て彼岸の、臺
に至り給へや。臺に至り給へや。
レテ、サシ謡「前途程遠し、思ひを雁山の夕の雲に馳す、八重の汐路に沈みし身なれども、猶

たどのり―忠度に正法を掛く
前途程遠―駿界於雁山之暮雲―朗詠集の句

九重の春に引かれ、共に詠めし花の色、我が面影や見えつらん。命只心に叶ふものな
らば、何か別れの物憂かるべき。詞如何に俊成卿、忠度こそこれまで參りて候へ。
俊成謡「不思議やな夢現とも分ざるに、薩摩の守の御姿、現れ給ふ不思議さよ。レテ詞「さ
ても千載集に、一首の歌を入れさせ給ふ御志は嬉しけれども、よみ人知らずと書かれ
し事心にかゝり候。俊成謡「尤それはさる事なれども、詞朝敵の御名を顯さんは世の憚な
り、よしやこの歌あるならば、御名は隱れよもあらじ、謡御心安く思召せ。レテ謡「我もさこ
そとしら雪の、古き世までも歌あらば、俊成謡「其名もさすが武藏鐙、隱はあらじ我人の、
レテ謡「情の末も深見草、俊成謡「引くや詠歌も心ある、レテ謡「故郷の花といふ題にて、上歌地謡「さ
さ波や、志賀の都は荒れにしを、志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山櫻かなと、よみ
しも永き世の、譽を殘す詠歌かな、實にや浮世は電光、胡蝶の夢の戯れに、謡へや舞へ
や津の國の、なにはの事もたどのりなり、疑はせ給ふな、われ疑はせ給ふな。
俊成、サシ謡「凡そ歌には六義あり。道の六道の衢に詠じ、地謡「千早振神代の歌は、文字の數

六義―もと詩の六義より出づ賦比興風雅頌

人丸云々―古今集序の詞
留まりぬ―殘れる意
鳥の跡―文字のこと

も定めなし。シテ謡「その後天照大神の御兄、地謡「素盞嗚尊より、三十一字に定め置きて、末世末代のためしとかや。クセその故は、素盞嗚尊の、女と住み給はんとて、出雲國にいまして、大宮造せし所に、八色雲の立つを御覽じて、尊の一首の御詠かくばかり、八雲立つ、出雲八重垣妻こめに、八重垣つくるその八重垣をと、神詠もかたじけなや、今の世のためしなるべし。さてもわれ須磨の浦に、旅寢して詠めやる、明石の浦の朝霧と、よみしも思ひ知られたり。シテ謡「人丸世になくなりて、地謡「歌の事留まりぬと、紀の貫之も躬恒も、かくこそ書き置きしかども、松の葉の散り失せず、正木のかづら長く傳はり、鳥の跡あらんその程は、よも盡きせじな敷島の、歌には神も納受の、男女夫婦の媒とも、この歌の情なるべし。あら名殘惜しの夜すがらやな。

俊成謡「不思議や見れば忠度の、けしき變はりてけうとき有樣、こはそも如何なる事やらん。シテ謡「あれ御覽ぜよ修羅王の、梵天に攻め上るを、帝釋出で逢ひ修羅王を、謡もとの下界に追つ下す。地謡「すは敵陣は亂れ合ひ、すは敵陣は亂れ合ひ、をめき叫べは忠度も

月照花同惜少年春―白氏文集の句

瞋恚の焔は荒磯の、波の打物拔いて、切つてかゝれば敵人は、矛を揃へてかゝり給へば、忠度相向つて打ち拂へば、そのまゝ見えず、敵を失ひあきれて立てば、天よりは火車降りかゝり、地よりは鐵刀足を貫き、立つも立たれず、居るも居られぬ修羅王の責、こは如何にあさましや。シテ謡「やゝあつてさゝ波や、地謡「やゝあつてさゝ波や、志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山櫻かなと、梵天感じ給ひしより、劍の責を免れて、くら闇となりしかば、燈を背けては、共に憐む深夜の月、花を踏んでは同じく惜しむ、少年の春の夜も、早白々と明け渡れば、有りつる姿は消え〳〵と、有りつる姿は鷄籠の山、木隱れて失せにけり。あと木隱れて失せにけり。

外十二

戀重荷

梗概

白河院の御時、山科荘司として賤しき者、女御を戀ひ、重荷を持たしめられし苦役に身を空しくせしかば、女御いと不便に思召さるゝ所に荘司の幽靈現れ出でて述懐する事を作る。此文後花園院の御作なりと傳ふ。（重習）

シテ　山科荘司（後は其幽靈）　シテツレ　女御
ワキ　官人　狂言　下人

ワキ詞「そも〳〵是は白河の院に仕へ奉る臣下なり。さても我が君菊を御寵愛有つて、毎年あまたの菊を植ゑそだてられ候。又こゝに山科の荘司とて賤しき者の候。いつも菊の下葉を取らせられ候間、申しつけばやと存じ候。又承り候へば、彼の者いかなる折に

所勢―病氣

か、忝くも女御の御姿を拜み申し、勿體なくも戀となりたる由承り候間、彼の者を召し出だし尋ねばやと存じ候。いかに誰かある。狂言詞「御前に候。ワキ詞「山科の荘司に此方へ來れと申し候へ。狂言詞「畏つて候。いかに山科の荘司の渡り候か。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。狂言詞「急ぎ御參りあれとの御事にて候。シテ詞「畏つて候。ワキ詞「いかに荘司、何とて此間は御庭をば濟めぬぞ。シテ詞「さん候　此程所勢仕り候ひて、偖怠申して候。シテ詞「尤もにて候。さて汝は戀をするといふは眞か。シテ詞「さやうの事をば何とて知しめされて候ぞ。ワキ詞「いや〳〵はや色に出でてあるぞとよ。さる間此事を忝くも女御聞召し及ばれ、急ぎ此荷を持ちて御庭を百度千度廻るならば、此間に御姿を拜ませ給ふべきとの御事なり。なんぼう有難き御諚にてはなきか。シテ詞「何と此事を聞召し及ばれ、其荷を持ちて御庭を百度千度まはれとかや。百度千度とは、百度も千度も持ちて廻らば、其間に御姿を拜まれさせ給ふべきと候や。ワキ詞「げによく心得て有るぞ。なんぼう有難き御事にてはなきか。シテ詞「さらば其荷を御見せ候へ。ワキ詞「此方へ來り候へ。是こそ戀の重荷よ。な

唐國の云々―李廣が虎と思ひて石を射し故事　荷前―年の終に十陵八墓に幣帛を奉らるゝ公事

んほう美しき荷にてはなきか。シテ詞「げに〳〵美しき荷にて候。たとひ叶はぬ業なりとも、仰せならばさこそあるべけれ、況や是は賤しき業、謡さのみは隔てし名を聞くも、地謡「重荷なりとも逢ふ迄の、重荷なりとも逢ふ迄の、戀の持夫にならうよ。シテ謡「誰踏みそめて戀の路、地謡「徒に人の迷ふらん。シテ謡「名も理や戀の重荷、地謡「げに持ちかぬる此身かな。シテ、ツレ謡「夫れ及びがたきは高き山、思の深きは綿津海の如し。地謡「何れ以て易からんや。げに心さへ輕き身の、塵の浮世にながらへて、よしなく物を思ふかな。ロンギ地謡「思ひや少し慰むと、露のかごとを夕顔の、黄昏時も早過ぎぬ。戀の重荷を持つやらん。シテ謡「重くとも、思ひは捨てじ唐國の、虎と思へば石にだに、立つ矢の有るぞかし。いかにも輕く持たうよ。地謡「持つや荷前の運ぶなる、心ぞ君がためを知る。重くとも心そへて、持てや〳〵下人、シテ謡「よしとても、この身は輕し徒らに、戀の奴になりはてて、亡き世なりと憂からじ。地謡「なき世に爲すもよしなやな、げには命ぞ只頼め。シテ謡「しめぢが腹立ちや、地謡「よしなき戀を菅筵、伏して見れども寢られぬこ

あはれてふ―古今集の歌三句何をかは宋句限結にせん

そ、苦しや獨寢の、我が手枕の肩替へて、持てども持たれぬ、そも戀は何の重荷ぞ。シテ謡「あはれてふ、言だに無くは何をさて、戀の亂れの、束緒も絶えはてぬ。地謡「よしや戀ひ死なん。報はどそれぞ人心。亂戀になして、思ひ知らせ申さん。ワキ詞「何と莊司が空しくなりたると申すか。言語道斷近頃ふびんなる事にて候ぞや。總じて戀と申す事は、高き賤しき隔てぬ事にて候へどもさりながら、彼の者の戀の心を止めんとの御方便にて、重荷を作つて上を綾羅錦繡を以て美しく包みて、いかにも輕げに見せて持たせなば、彼の者思はんには、かほど輕げなる荷なれども、戀の叶ふまじき故に持たれぬぞと心得、戀の心や止まるべきとの御事にて候處に、賤しき者のかなしさは、是を持ち御庭を廻らば、御姿をまみえさせ給はん事を悦び、精力を盡し候へども、もとより重荷なれば持たれぬ事を恨み、嘆きてかやうに身を失ひ候事、返すゞすもふびんにこそ候へ、この山を申し上げうずるにて候。いかに申し上げ候。山科の莊司重荷を持ちかねて、御庭にて空しくなりて候。かやうの賤しき者の一念は恐しく候。何か苦しう

候べき、そと御出であつて、彼の者の姿を一目御覽ぜられ候へ。

レツレ謡「戀よ戀、我が中空になすな戀、戀には人の死なぬものかは。無慙の心やな。ワキ詞「是はあまりに忝き御諚にて候。謡はや〳〵立たせおはしませ。レツレ詞「いや立たんとすれば磐石に押されて、更に立つべきやうもなし。地謡「報いは常の世の習ひ。

後レツレ謡「吉野川岩切り通し行水の、音には立てじ戀ひ死にし、一念無量の鬼となるも、只よしなやな誠なき、言よせ妻の空頼め。地謡「げにもよしなき心かな。レツレ謡「浮寢のみ、三世の契の滿ちてこそ、石の上にも座すといふに、我はよしなや逢ひ難き、巖の重荷持たるよものか。あら恨しや葛の葉の、玉襁歇傍の山の山守も、地謡「さのみ重荷は持たればこそ。レツレ謡「重荷といふも思なり、地謡「淺間の煙あさましの身や、衆合地獄の重き苦み、さて懲り給へや懲り給へ。思の煙立ち別れ、思の煙立ち別れ、稻葉の山風吹亂れ、戀路の闇に迷ふとも、跡弔はど其恨は、霜か雪か霰か、終には跡も消えぬべしや。是までぞ姫小松の、葉守の神となりて、千代の陰を守らんや千代の陰をも守らん。

吉野川―古今集の歌宋句こひけしぬとも
言よせ妻―言葉をよせたる妻
玉襁―枕詞
葉守の神―木々を守る神

砧

梗概

蘆屋の何某、訴訟のため在京してはや三年も經たればとて、侍女夕霧を下して、古里の妻を訪はしむ。妻は思のあまりに、砧を搗ちて閨怨の情を遣る。かくて病みて死せり。後幽靈となりて現じ、夫の弔ひを受けて成佛す。（重習）

シテ　蘆屋の妻（後は其幽靈）　前ツレ　侍女夕霧
ワキ　蘆屋某

ワキ詞「是は九州蘆屋の何某にて候。我自訴の事あるにより在京仕りて候。假初の在京と存じ候へども、當年三歳になりて候。あまりに故郷の事心もとなく候程に、召使ひ候夕霧と申す女を下さばやと思ひ候。いかに夕霧、あまりに故郷心もとなく候程に、おことを下し候べし。この年の暮には必ず下るべき由心得て申し候へ。ツレ詞「さらばやがて下り候べし。かならずこの年の暮には御下りあらうずるにて候。道行謡この程の、旅の衣の

蘆屋の里―筑前遠賀郡

比目―比目魚雌雄二つ目を竝べて水中に住むといふ

日も添ひて、旅の衣の日も添ひて、いく夕暮の宿ならん、夢も數そふ假枕、明かし暮らして程もなく、蘆屋の里に著きにけり。詞急ぎ候程に、蘆屋の里に著きて候。やがて案内を申さうずるにて候。いかに誰か御入り候。都より夕霧が參りたる由御申し候へ

レテ、サシ謡「夫れ鴛鴦の衾の下には、立ち去る思を悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる愁有り。ましてや深き妹背の中、同じ世をだに忍草、我は忘れぬ音を泣きて、袖に餘れる涙の雨の、晴間稀なる心かな。

ツレ詞「夕霧が參りたる由それ〳〵御申し候へ。レテ詞「何夕霧と申すか、人までもあるまじ此方へ來り候へ。いかに夕霧珍しながら怨めしや。人こそ變り果て給ふとも、風の行方のたよりにも、などや音づれ無かりけるぞ。ツレ謡「さん候とくにも參りたくは候ひつれども、御宮仕の隙も無くて、心より外に三年まで、都にこそは候ひしが。レテ謡「なに都ずまひを心の外とや、思ひやれ實には都の花ざかり、なぐさみ多きをり〳〵にだに、憂き

人目も草も―古今集に「山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば」人目かるとは人の訪ひ來ぬこと

鶴の―同集の歌末句鶴しからまし

臥猪の床―猪のしゝの寢所

は心の習ひぞかし。下歌地謡「鄙のすまひに秋の暮れ、人目も草もかれ〴〵の、契も絶えはてぬ。何を賴まん身のゆくへ。上歌三年の秋の夢ならば、夢ならば、憂きはそのまゝ覺めもせで、思出は身に殘り、昔は變り跡もなし。實にや偽の、なき世なりせば如何ばかり、人の言の葉嬉しからん。愚の心やな、愚なりける賴みかな。

レテ詞「あら不思議や、何やらんあなたに當つて物音の聞え候。あれは何にて候ぞ。ツレ詞「あれは里人の砧擣つ音にて候。レテ詞「げにや我が身の憂きまゝに、古事の思ひ出でられて候ぞや。唐に蘇武といひし人、胡國とやらんに捨て置れしに、故郷に留め置きし妻や子、夜寒の寢覺を思ひやり、高樓に上つて砧を擣つ。志の末通りけるか、萬里の外なる蘇武が旅寢に、故郷の砧聞えしとなり。謡妾も思や慰むと、とてもさみしきくれはとり、綾の衣を砧にうちて、心を慰まばやと思ひ候。ツレ詞「いや砧などは賤しき者の業にてこそ候へ、さりながら御心慰めん爲にて候はゞ、砧をこしらへて參らせ候べし。レテ謡「いざいざ砧うたんとて、剛れて臥猪の床の上、ツレ謡「涙かたしく狹筵に、レテ謡「思をのぶる便ぞ

と、ツレ謡「夕霧立ちより諸共に、シテ謡「怨の砧、ツレ謡「うつとかや。

宮漏高低風北廻隣砧綴急月西傾―新撰朗詠集の句

次第地謡「衣に落つる松の聲、衣に落ちて松の聲、夜寒を風や知らすらん。　シテ一聲謡「音づれの、稀なる中の秋風に、　地謡「憂きを知らする夕かな、シテ謡「遠里人もながむらん。

故郷の云々―砧をうちながら松風に呼びかけて閨怨の情を述べたり文選味ふべし

地謡「誰が世と月はよも訪はじ。シテ、サシ謡「面白の折からや、頃しも秋の夕つ方、　地謡「牡鹿の聲も心凄く、見ぬ山風を送り來て、梢は何れ一葉散る、空冷しき月影の、軒のしのぶにうつろひて、シテ謡「露の玉簾かゝる身の、　地謡「思をのぶる夜すがらかな。宮漏高く立ちて風北に廻り、シテ謡「隣砧緩く急にして月西に流る。　地謡「蘇武が旅寢は北の國、是は東の空なれば、西より來る秋の風の、吹き送れと、間遠の衣擣たうよ。故郷の、軒端の松も心せよ、己が枝々に、嵐の音を殘すなよ。今の砧の聲添へて、君がそなたに吹けや風。餘りに吹きて松風よ、わが心、通ひて人に見ゆならば、その夢を破るな。破れて後はこの衣、誰か來もて訪ふべき。來て訪ふならばいつまでも、衣は裁ちも更へなん、夏衣、うすき契は忌まはしや。君が命は長き夜の、月にはとても寢られぬに、いざ〳〵衣擣たうよ。彼の七夕の契には、一夜ばかりの狩衣、天の河波立ち隔て、逢ふ瀬かひなき浮舟の、梶の葉もろき露涙、二つの袖やしをるらん。水陰草ならば、波うち寄せようたかた。

梶の葉―歌書きて七夕に奉る

八月九月正長夜千聲萬聲無了時―白氏文集の句

シテ謡「文月七日の曉や、　地謡「八月九月、實に正に長き夜、千聲萬聲の、憂きを人に知らせばや。月の色風のけしき、影におく霜までも、心凄き折ふしに、砧の音夜嵐、悲しみの聲蟲の音、交りて落つる露涙、ほろ〳〵はら〳〵と、いづれ砧の音やらん。

ツレ謡「いかに申し候。都より人の參りて候が　この年の暮にも御下りあるまじきにて候。シテ謡「怨めしやせめては年の暮をこそ、僞ながら待ちつるに、さてははや誠に變り果て給ふぞや。　地謡「思はじと思ふ心も弱るかな。　上歌聲も枯野の蟲の音の、亂るゝ草の花心、風狂じたる心地して、病の床に伏し沈み、つひに空しくなりにけり。つひに空しくなりにけり。（中入）

きさだたぬ云々―古今集の歌を引く

ツレ謡「無慙やな三年過ぎぬる事を恨み、引き別れにし妻琴の、つひの別れとなりけるぞや。上歌謡きさだたぬ、悔の八千度百夜草、悔の八千度百夜草の、陰よりも二度、歸りく

る道と聞くからに、梓の弓の裏弭に、言葉をかはすあはれさよ。言葉をかはすあはれさよ。

三瀬川―三途の川

標梅云々―詩經に出づる男女の婚期のことを述ぶ

後シテ謡「三瀬川、沈み果てにしうたかたの、あはれはかなき身の行方かな。標梅花の光を並べては、娑婆の春をあらはし、地謡「跡のしるべの燈は、シテ謡「眞如の秋の月を見する。さりながら我は邪婬の業深き、思の煙の立居だに、安からざりし報の罪の、亂るゝ心のいとせめて、獄卒阿防羅刹の、笞の數の隙もなく、うてや〳〵と報の砧、怨めしかりける因果の妄執。地謡「因果の妄執の思の涙、砧にかゝれば、涙はかへつて火焔となつて、胸の煙の焔に咽べば、叫べど聲が出でばこそ、砧も音なく松風も聞えず、呵責の聲のみ恐しや。上歌羊の歩み隙の駒、羊の歩み隙の駒、うつりゆくなる六つの道、因果の小車の、火宅の門を出でざれば、廻り廻れども、生死の海は離るまじや、あぢきなの浮世や。シテ地「恨は葛の葉の、地謡「恨は葛の葉の、歸りかねて執心の面影の、恥かしや思ひ夫の、二世と契りてもなほ、末の松山千代までと　かけし頼みはあだ浪の、あらよしなや空言

羊の歩み―廻き　こと
隙の駒―疾きこ　とのたとへ

大をそ鳥―をそは鴈の寫萬葉集に證歌あり

や、そもかゝる人の心か。シテ謡「烏てふ、大をそ鳥を心して、地謡「うつし人とは誰かいふ、草木も時を知り、鳥獸も心あるや。げにまこと喩へつる、蘇武は旅雁に文を附け、萬里の南國に至りしも、契の深き　志、淺からざりし故ぞかし。君いかなれば旅枕、夜寒の衣うつつとも、夢ともせめてなど、思ひ知らずや恨めしやシテ地謡「法華讀誦の力にて、法華讀誦の力にて、幽靈まさに成佛の、道明らかになりにけり。是も思へば假初に打ちし、砧の聲の内、開くる法の華心、菩提の種となりにけり。菩提の種となりにけり。

鷺

梗概　醍醐天皇の御代、神泉苑に行幸あり。をりから洲崎の鷺を捕れとの勅諚あり。藏人之を捕へしを御感のあまり爵を賜ひ、鷺も共に五位になさるゝ事を作る。源平盛衰記の本文に據れり。（重習）

シテ　鷺　　シテツレ　帝王
ワキ　藏人　　ワキツレ　大臣

ワキツレ一聖謡「久方の、月の都の明けき、光も君の惠かな。ワレ夫れ明君の御代のしるし、萬機の政すなほにして、四季をり〳〵の御遊までも、捨て給はざる叡慮とかや、王謡「夫れ青陽の春になれば、ワキツレ謡「ところ〴〵の花見の御幸、王謡「秋は時雨の紅葉狩、ワレワキ謡「日數も積る雪見の行幸、王謡「寒暑時を違へざれば、ワキツレ謡「御遊のをりも、王謡「時を得て、上歌今は夏ぞと夕涼み、今は夏ぞと夕涼み、松のこなたの道芝を、誰踏みならし通ふらん。是は妙なる御幸とて、小車の、直なる道を廻らすも、同じ雲居の大内や、神泉苑に著きにけり。神泉苑に著きにけり。

神泉苑―天皇の御遊覽所又雨乞の御祈請ある所なり
三千世界眼前盡十二因緣心裏空―竹生島明神の御作と傳ふる詩

王ワレ謡「面白や孤島峙つて波悠々たるよそほひ、眞に湖水の浪の上、三千世界は眼の前に盡きぬ、十二因緣は心の裏に空し。げに面白きけしきかな。上歌地謡「鷺の居る、池の汀に松舊りて、池の汀に松舊りて、都にも似ぬ住居はおのづから、實にめづらかに面白や、或は詩歌の舟を浮め、又は糸竹の、聲綾なす曲水の、手まづ遮る盃も浮むなり。あら面白の池水やな。あら面白の池水やな。

普天の下云々―時經に普天之下莫レ非ニ王土一率土之濱莫レ非ニ王臣一を引く

王詞「いかに誰かある。ワキツレ詞「御前に候。王詞「あの洲崎の鷺をりから面白う候。誰にても取りて參れと申し候。ワキツレ詞「畏つて候。いかに藏人、あの洲崎の鷺をりから面白う思召され候間、取りて參らせよとの宣旨にて候。ワキ詞「宣旨畏つて承り候さりながら、かれは鳥類飛行の翅、いかゞはせんと休らへば、ワキツレ謡「よしやいづくも普天の下、率土の内は王地ぞと、ワキ謡「思ふ心を便にて、ワキツレ謡「次第々々に、ワキ謡「蘆間の陰

に、地謡「ねらひよりねらひよりて、岩間の陰より取らんとすれば、この鷺驚き羽風を立てゝ、ばつとあがれば力なく、手を空しうして、仰ぎつゝ走り行きて、汝よ聞け勅諚ぞや、勅諚ぞと呼ばはりかくれば、この鷺立歸つて、本の方に飛び下り、羽を垂れ地に伏せば、抱きとり叡覽に入れ、實に忝き王威の恵、有難や頼もしやと、みな人感じけり。實にや佛法王法のかしこき時の例とて、飛ぶ鳥までも地に落ちて、叡慮に適ふ有難や、叡慮に適ふ有難や。猶々君の御恵、仰ぐ心もいやましに、御酒を勸めて諸人の、舞樂を奏し面々に、鷺の藏人、召し出だされてさまゞの、御感のあまり爵を賜び、共になさるゝ五位の鷺、さも嬉しげに立ち舞ふや、シテ謡「洲崎の鷺の羽を垂れて、地謡「松も磯馴るゝけしきかな。

シテ謡「畏き恵は君道の、地謡「かしこき恵は君道の、四海に翔る翅まで、靡かぬ方もなかりければ、まして鳥類畜類も、王威の恩德のがれぬ身ぞとて、勅に從ふこの鷺は、神妙神妙放せや放せと、重ねて宣旨を下されければ、げに忝き宣命を含めて、放せばこの鷺、心嬉しく飛び上り、心嬉しく飛び上りて、行方も知らずぞなりにける。

宣命―みことのり

望月

梗概

小澤刑部友房といふもの、近江守山にて宿屋を營む。こゝに本の主安田庄司の妻子泊る。かゝる處に、二人敵なる望月秋長亦來合せたり。友房計略を廻らし、酒宴に事よせ、主の妻を賢女として謠はせ、子に鞨鼓を打たせ、又自らも獅子舞をなして秋長に近づき、遂に討取りて本望を遂ぐる筋なり。（重習）

シテ　小澤刑部友房　ツレ　安田庄司の妻　子方　花若
ワキ　望月秋長　狂言　望月從者

シテ詞「かやうに候者は、近江國守山の宿、甲屋の亭主にて候。さても某本國は信濃國の者にて候が、さる子細候ひてこの甲屋の亭主となり、往來の旅人を留め申して身命を繼ぎ候。今日も旅人の御通り候はゞ、御宿を申さばやと存じ候。

ツレ「子方、次第謠「波の浮鳥住む程も、波の浮鳥住む程も、下安からぬ心かな。ツレ、サシ謠「是は

従類―家來などをいふ
撫子―子供のことその名の花若に續けていふ

信濃國の住人、安田庄司友治の妻や子にて候。さても夫の友治は、同國の住人望月の秋長に、あへなく討れ給ひし後は、多かりし從類も散り〴〵になり、賴む木蔭も撫子の、花若ひとり隱し置かんと、敵の所緣の恐しさに、思ひ子を誘ひ立ち出づる。ツレ子方下歌謠「何くとも定ぬ旅を信濃路や、上歌月を友寢の夢ばかり、月を友寢の夢ばかり、名殘を忍ぶ故郷の、淺間の煙立ち迷ふ、草の枕の夜寒なる、旅寢の床の憂き涙、守山の宿に著きにけり。守山の宿に著きにけり。

ツレ詞「急ぎ候程に、近江國守山の宿に著きて候、此所にて宿を借らばやと思ひ候。いかに此屋の内へ案内し申候。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ツレ詞「是は信濃國より上る者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。シテ詞「安き間の事にて候。此方へ御入り候へ。不思議やな是に留め申して候御方を、いかなる人ぞと存じて候へば、某が古への主君の北の御方、幼き人は御子息花若殿には御座候は如何に。あら痛はしの御有樣や候。やがて某と名のつて力を付け申さばやと存じ候。いかにお旅人に申すべき事の候。信濃國よりと仰せ候につきて、

古へ御目にかゝりたる樣に存じ候。ツレ詞「いや是は行方もなき者にて候程に、思ひもよらぬ事にて候。シテ詞「何を御包み候ぞ。まづ某名のつて聞かせ申し候べし。是こそ古へ御内に召使はれ候ひし、小澤の刑部友房にて候へ。ツレ謡「さては古への、小澤の刑部友房か。あら懐やとばかりにて涙に咽ぶばかりなり。子謡「父に逢ひたるこゝちして、花若小澤に取りつけば、シテ謡「別れし主君の面影の、殘るも今は恨めしや。子謡「こはそも夢か現かと、主從手に手を取りかはし、上歌地謡「今までは、行方も知らぬ旅人の、行方も知らぬ旅人の、三世の契の主從と、頼む情も是なれや。げに奇緣ある我等かな。げに奇緣ある我等かな。シテ詞「あれなる一間に御入りあつて御休み有らうずるにて候。ワキ次第謡「歸る嬉しき故郷に、歸る嬉しき故郷に、誰憂き旅と思ふらん。詞「是は信濃國の住人、望月の何某にて候。さても同國の住人、安田の庄司友治と申す者を、某が手にかけ生害させて候科により、この十三年が間在京仕り候處に、されども緩怠なき山聞召し開かれ、安堵の御教書を賜はり悦びの色をなし、只今本國信濃に下向仕り候。急

緩怠なき由―不都合無きこと
安堵の御教書―本領に落着くべき指令

ぎ候間、近江國守山の宿に著きて候。今夜はこの宿に泊らばやと存じ候。いかに誰かある。従者詞「御前に候。ワキ詞「今夜はこの宿にとまるべし、宿を取り候へ。又存ずる子細のある間、某が名をば申すまじく候。従者詞「畏つて候。いかに此屋の主の渡り候か。シテ詞「誰にて御座候ぞ。従者詞「是は信濃國へ御下向の御方にて候。御宿を申され候へ。シテ詞「心得申し候。さて御名字をば何と申す人にて御座候ぞ。従者詞「是は信濃國に隱れもなき大名、望月の秋長殿では御座ないぞ。シテ詞「苦しからず候、此方へ御入り候へ。従者詞「心得申し候。いかに申し上げ候。此方へ御通り候へ。シテ詞「言語道斷の事。我頼み申して候人の北の御方、同く御子息花若殿この屋に留め申して候處に、花若殿御親の敵、望月が泊りて候事は候。やがてこの由申し上げばやと存じ候。や、いかに申し候。不思議なる事の候。今夜此處に望月が著きて候。子詞「何望月と申すか。シテ詞「暫く、あたり近く候。まづ靜まつて聞召され候へ。只今申す如く、望月がこの屋に泊りて候。是は天の與ふる所と存じ候。如何にもして今夜の内に、御本望

御本望―欲討のこと

八撥―鶴敦

達せさせ參らせうずるにて候。御心やすく思召され候へ。きつと思案仕りたる事の候。今頃この宿にはやり候ものは盲御前にて候。何の苦しう候べき、夜にまぎれ杖にすがり、花若殿に御手を引かれさせ給ひ、盲の振舞にて座敷へ御出で候へ。某彼の者に酒を勸め候べし。又何にても候へ御謠ひあれと申し候はゞ、そと御謠ひ候へ。花若殿は八撥を御打ちあらうずるにて候。某は獅子舞をまなび、其まぎれに近づきて、本望を遂げさせ申さうずにて候。ツレ詞「ともかくもよきやうに計らひて給はり候へ。レヲ詞「何事も某に御まかせ候へ。

ツレ、ザシ謠「嬉しやな望みし事の叶ふよと、盲の姿に出で立てば、子謠「習はぬ業も父のため、ツレ謠「竹の細杖つきつれて、地謠「彼の蟬丸の古へ、彼の蟬丸の古へ、たどりたどるも遠近の、道のほとりに迷ひしも、今の身の上も思ひはいかで劣るべき。かゝる憂き身の業ながら、盲目の身の習、歌聞召せや旅人よ。歌聞召せや人々よ。

レヲ詞「いかに申すべき事の候。從者詞「何事にて候ぞ。レヲ詞「此屋の亭主にて候が、めでたき御下向にて候間、御祝ひの爲に酒を持たせて參りて候。然るべきやうに御申し候へ。從者詞「心得申し候。いかに申し上げ候。この屋の亭主御下向めでたき由申し候ひて、御樽を持たせ參りて候。ワキ詞「此方へと申せ。從者詞「畏つて候。此方へ御參り候へ。又是なる人達はいかなる人にて候ぞ。シテ詞「さん候是はこの宿に候盲御前にて候。かやうの御旅人の御著の時は、罷り出で謠などを申し候。御前にてそと御謠はせ候へ。從者詞「日本一の事にて候。やがて申し上げうずるにて候。いかに申し上げ候。ワキ詞「何事ぞ。從者詞「あれに候は、この宿にある盲御前にて候が、けしからず面白く謠ふ由を申し候。謠はせられ候へ。ワキ詞「汝所望し候へ、從者詞「畏つて候。なう是なる人達、御所望にて候ぞ面白からんずる處を一節御謠ひ候へ。ツレ詞「一萬箱王が親の敵を討つたる處を謠ひ候ふべし。從者詞「いやいや思ひも寄らぬ事にて候。ワキ詞「何事を申すぞ。從者詞「是なる人達に謠を所望仕り候へば、一萬箱王が親の敵討つたる所を謠はうずる由申され候程に、御前にてはいかゞと存じいやと申して候。ワキ詞「何の苦しう候べき急いで謠はせ候へ。從者詞「さらば今の仰せられ

迦陵頻伽―極楽浄土にすむ美麗の鳥

不動と申し―不動と工藤とを混じて滑稽の意を含ましむ

たる處を御諭ひ候へ。

クリ、ツン謡「夫れ迦陵頻伽は卵の内にして聲諸鳥にすぐれ、地謡「鷲といふ鳥は小さけれども、虎を害する力あり。ツレ、サシ謡「こゝに河津三郎が子に、一萬箱王とて、兄弟の人のありけるが、地謡「五つや三つの頃かとよ、父を從弟に討たせつゝ、既に年ふり日を重ね、七つ五つになりしかば、いとけなかりし心にも、父の敵を討たばやと、思の色に出づるこそ、けに哀には覺ゆれ。クセある時おとどひは、持佛堂に參りて、兄の一萬香を燒き、花を佛に供ずれば、弟の箱王は、本尊をつくゞゝと守りて、いかに兄御前聞召せ、本尊の名を

ば我が敵、工藤と申し奉り、劔を提げ縄を持ち、我等を睨みて、立たせ給ふが憎ければ、走りかゝりて御首を、打ち落さんと申せば、兄の一萬これを聞きて、ツレ謡「いはけなやいかなる事ぞ佛をば、地謡「不動と申し、敵をば工藤といふを知らざるか。さては佛にてましますかと、拔いたる刀を鞘にさし、赦させ給へ南無佛、敵を討たせ給へや。

子詞「いざ討たう。從者詞「あう討たうとは。シテ詞「暫く候。何事を御騒ぎ候ぞ。從者詞「御用心

獅子團亂旋―榮名にて祕なり

の時分にて候に、是なる幼き者がいざ討たうと申し候程に候よ。シテ詞「子細を御存じ候はぬ程に尤にて候。此者の諭を申したる後には、又幼き者八撥を打ち候。その八撥を打たうずると申す事にて候。從者詞「日本一の事やがて打たせうずるにて候。いかに申し上げ候。是なる幼き者が八撥を打つべき由を申し候。ツレ詞「急いで打たせ候へ。又亭主は何にても能はなきか。子詞「獅子舞を御所望候へ。ツレ詞「あら面白の事を申すものかな、いかに亭主、是なる幼き者の申すは、亭主は獅子舞が上手なる由を申し候。そと一さし舞ひ候へ。シテ詞「是は幼き者の筋なき事を申し候。思ひもよらぬ事にて候。ツレ詞「ひらに舞うて見せ候へ。シテ詞「此上は御意にて候程に、そと御前にて舞はうずるにて候。このまゝにては如何にて候間、獅子頭をかづきて參らうずるにて候、其間に此幼き者に八撥を打たせ候べし。皆々かう渡り候へ、地謡「獅子團亂旋は時を知る。雨村雲や騒ぐらん。（獅子舞）あまりに祕曲の面白さに、あまりに祕曲の面白さに、猶々廻る盃の、醉を勸めばいとゞなほ、眠も來るばかりなり。

シテ謡「さるほどに〳〵、地謡「折こそよしとて脱ぎおく獅子頭、又は八撥を、打てや打て と、目を引き袖を振り、立ち舞ふ氣色に戯れよりて、敵を手ごめにしたりけり。

地謡「この年月のうらみのする、いまこそ晴るれ望月よとて、おもふかたきを討つたりけり。

キリ地謡「かくて本望遂げぬれば、かくて本望遂げぬれば、後本領に立ち歸り、子孫に傳へ今の世に、その名隱れぬ御事は、弓矢のいはれなりけり、弓矢のいはれなりけり。

目を引き云々―時分はよしと合圖をなすこと

弓矢のいはれ―武道の名譽

外十三

七騎落

梗概

頼朝、石橋山の戰に敗れ、安房上總の方へ落ちんとす。乘船の砌、主從八騎となれるは、祖父が都落の折に同じくして不吉なりとて、誰か一人取殘さるゝ事となり、遂に實平は其子遠平を上陸せしむ。後、和田義盛遠平を伴なひ身方に加はり、先の愁嘆は悅の酒宴となりてめでたく收る。（四番目）

シテ　土肥次郎實平　　子方　土肥遠平　　ツレ　源頼朝
ツレ　岡崎義實　　ツレ　四人　　ワキ　和田義盛

シテ次第謡「身は捨小舟うらみても、身は捨小舟うらみても、かひなきや憂き世なるらん。

頼朝詞「是は兵衛佐頼朝とは我が事なり。さても昨日石橋山の合戰に味方打負け、餘りに無勢に候程に、一先安房上總の方へ開かばやと存じ候。如何に土肥の次郎。シテ詞「御前に

うらみても云々―浦、貝の意をかけて海の縁語を用ひたり

石橋山―相模國足柄下郡にあり

鎮西―實際は東國へ下らんとし近江より引返せし也
田代殿―信綱
新開の次郎―忠氏
土屋の三郎―宗遠
土佐坊―昌俊
龍門云々―白氏文集に龍門原上土埋骨不埋名とあるを引く

候。頼朝詞「餘りに味方無勢にある間、一先安房上總の方へ開かうずるにて有るぞ。急いで舟の事を申し付け候へ。シテ詞「畏つて候。疾くより御舟の事を申し付けて候。急いで召されうずるにて候。頼朝詞「いかに實平。シテ詞「御前に候。頼朝詞「只今船中に供したる人數は如何程あるぞ。シテ詞「さん候。只七騎御座候。頼朝詞「さては頼朝までは八騎よな。急度思ひ出だしたる事有り。祖父爲義鎮西へ開きし時も主從八騎、父義朝江州へ落ち給ひしも主從八騎、思へば不吉の例なり。實平はからひて舟より一人おろし候へ。シテ詞「畏つて候。謡實平仰せ承り、舟のせがいに立上り、御供の人數を見渡せば、まづ一番には田代殿、地謡「さて二番には新開の次郎、シテ謡「又三番には土屋の三郎、地謡「四番は土佐坊五番には、シテ謡「實平候。六番には、遠平謡「同じき遠平、シテ謡「艫板には、義實詞「義實あり。地謡「この人人は君のため、この人々は君のため、龍門原上の土に屍をば曝すとも、惜しかるまじき命かな、何れを選出さんと、さしもの實平思ひかね、赤面したるばかりなり。赤面したるばかりなり。

義忠―源平盛衰記によれば義貞
俣野―五郎景國
御分―御身

頼朝詞「如何に實平、何とて遲きぞ急いでおろし候へ。シテ詞「畏つて候。如何に岡崎殿に申し候、急いで御舟より御下り候へ。義實詞「何と某に御舟より下りよと候や。シテ詞「なかなかの事。義實詞「暫く、この御供の内に、某一の老體にて候程に、かひ〴〵しく御用にも立つまじき者と御覽じ限られて、かやうに承り候な。その儀に於ては御舟よりは下り候まじ。シテ詞「いや〳〵左樣の儀にては無く候。艫板に召されて候程に、陸の近さに申し候。義實詞「いや所詮この船中に、命二つ持ちたらんずる者を御船より下され候へ。シテ詞「是は不思議なる事を承り候ものかな。それ人は生ずるより死するまで、命をば一つこそ持ちて候へ。二つ持ちたる謂れの候か。義實詞「さん候某も昨日までは命を二つ持ちて候を、早一つの命をば我が君に參らせ上げて候。シテ詞「さてその謂れは候。義實詞「その事にて候。昨日石橋山の合戰に、子にて候眞田の與一義忠は、副將軍を賜はり、俣野と組んで討たれぬ。されば親子は一體二つの命ならずや。見申せば土肥殿こそ、この御舟に親子一所に渡られ候へ。御分殘つて遠平をおろすか、遠平を殘して御分おるよか、親子の

内一人おりられ候へ。シテ詞「尤にて候。餘りの道理に物なのたまひそ。如何に遠平、君よりの御諚にて有るぞ、急いで御舟より下り候へ。遠平詞「何と御舟より下りよと仰せ候か。シテ詞「なか〳〵の事。急いで下り候へ。遠平詞「遠平幼く候へども、君の御大事に立たん事、誰にか劣り候べき。御舟よりは下りまじく候。シテ詞「こざかしき事を申す者かな。君の御爲父が命にては無きか。急いで御舟より下り候へ。遠平詞「いや〳〵君の御爲父の命をば背くとも、御舟よりは下りまじく候。シテ詞「言語道斷の事を申すものかな。君の御爲父が命をば背くとも下りまじきと申すか。その儀ならば人手には掛けましいぞ。義實詞「暫く。是は君の御門出なるに、誤りたるか實平。シテ詞「何くまでも某が誤りて候。所詮おりまじきと申す者をおろさんより、某御舟より下りようずるにて候。遠平詞「如何に申し候。さらば某御舟より下り候べし。シテ詞「何と下りようずると申すか。實に〳〵今こそ某が子にて候へ。あれを見よ敵大勢討ち出でたり、かまへて某が子と名のつて、尋常に討死せよ。名殘こそ惜しけれ。謡かくて我が子をおろし置き、實平御舟に參りけり。地謡「ゆ

御出門なるに―御出陣御出陣のめでたき折からにの意

ゆゝしく―貴むる意

ゆしく見ゆる實平かなと、互の心を思ひやり、親子の別れ痛はしや。

遠平謡「父の別れは申すに及ばず、君を始め參らせて、皆人々に御名殘こそ惜しう候へ。

上歌地謡「彼の松浦佐用姫が、彼の松浦佐用姫が、唐舟を慕ひわびて、渚にひれ伏しゝ有樣も、今遠平が親と子の、別れにかはらじと、皆涙をぞ流しける。

遠平謡「契程無き早舟を、暫しとだにも言ひあへず、跡を見送りたゝずめば、地謡「はや遠ざかる浦の波立ち別れゆく有樣を、遠平謡「餘の人々は心して、地謡「あはれみあへる、遠平詞「舟の内に、地謡「實平はひたすらに、弱氣を見えじとて、なか〳〵かへり見おきもせで、心強くも行く跡に、敵大勢見えたりすはやゝ遠平は討たるゝとて、賴朝もあはれみ陸を見給へばさすが實に、恩愛の契も只今を限ぞと思ひ實平は、磯邊に向ひ人知れず、心のまゝならば、あはれ遠平と一所に、討死せばやとあこがれて、飛び立つばかりに思ひ子の別れぞ哀れなりける。別れぞ哀れなりける。

ワキ一聲謡「弓張月の西の空、行くへ定めぬ舟路かな。狂言詞「沖なる波の音までも、關の聲か

御座舟―頼朝の乘船をさす

身方―平家方

と恐しや。ワキ詞「あれに見えたるが御座舟にてありけに候。急いで舟を漕ぎ候へ。狂言詞「畏つて候。シテ詞「如何に申し候。あれに兵船一艘見えて候。先こなたより詞を掛けうずるにて候。義實詞「しかるべう候。シテ詞「如何にあれなる舟は誰が召されたる御舟にて候ぞ。ワキ詞「我もそなたの船影を、怪しく思ひ休らうなり。そも誰人の舟やらん。シテ詞「是は土肥の次郎實平が乘りたる舟候よ。ワキ詞「何と土肥殿の御舟と候や。シテ詞「なか〳〵の事。さてその御舟は誰が召されたる御舟にて候ぞ、ワキ詞「是こそ和田の小太郎義盛が乘りたる船候よ。シテ詞「さては和田殿の御舟にて候か。ワキ詞「中々の事、内々申し通ぜし如く、御味方に參らんために、是まで參じて候。さて君は其御舟に御座候か。シテ詞「和田は内々申し合はせたる事の候間、只今參りて候さりながら、先づたばかつて心を見うずるにて候。如何に和田殿へ申し候。是までの御參めでたう候さりながら、面目もなき事の候。昨日の暮程より我が君を見失ひ申し、かやうに浮れ舟と爲つて尋ね申し候よ。ワキ詞「何と君はその御舟に御座なきと候や。シテ詞「さん候。ワキ詞「言語道斷の事にて候ものかな。我身方を

引出物―贈物のこと

ば忍び出で、月日とも頼み奉る頼朝にははなれ申し、この上は命ありても何かせん、いでいで自害に及ばんと、腰の刀に手を掛くる。シテ詞「あよ暫く、君はこの舟に御座候。ワキ詞「何と君はその御舟に御座候とや。シテ詞「中々の事。ワキ詞「さて何とてかやうには承り候ぞ。シテ詞「是は戯言にて候。幸に陸近く候程に、その舟を寄せられ候へ。御舟をも寄せ候ひて、陸にて御對面あらうずるにて候。ワキ詞「心得申し候。さらばやがて陸へ參らうずるにて候。

シテ詞「如何に申し候。御前にて候。ワキ詞「我が君を見奉りて、今は安堵仕りて候。シテ詞「實に〳〵尤にて候。ワキ詞「如何に土肥殿に申し候。シテ詞「何事にて候ぞ。ワキ詞「この御供の中に、何とて御子息遠平は御座候はぬぞ。シテ詞「その事にて候。さる謂れ有つて陸に殘し置きて候。ワキ詞「疾くよりかくと申したくは候ひつれども、以前某に心を盡させられ候その返報に、今まではかくとも申さぬなり。いで土肥殿に引出物申さんと、隱し置きたる舟底より、遠平を引立て見せければ、シテ詞「その時實平あきれつゝ、地謡「夢か現

たとへば云々―朗詠集に謬入。仙家に離宮半日之客に恐歸舊里紛逢七世之孫とあるを引く前の句は王質後の句は劉阮の故事

不覺―未詳

かこは如何にとて、覺えず抱き付き泣き居たり。たとへば仙家に入りし身の、半日の程に立ちかへり、七世の孫に逢ふ事の、喩へも今に知られたり、喩へも今に知られけり。

シテ詞「如何に義盛に申し候。さてこの者をば何として召しつれられ候ぞ。ワキ詞「さん候是まで伴ひ申したる謂れを、御前にて申し上げうずるにて候。シテ詞「急いで御物語り候へ

ワキ詞「さても昨日石橋山の合戰破れしかば、大場が手勢君を討ち奉らんと、大勢渚に打出でたりしに、某も一所に討つて出でしが、汀を見れば、引きかねたる若武者一騎ひかへたり。某駒かけよせて見れば御子息遠平なり。急ぎ馬より飛んで下り、生捕る體にもてなし舟底に乘せ申し、是まで伴ひ參りたり。なんぼう土肥殿に義盛は忠の者にて候ぞ。

シテ謡「かよる有難き事こそ候はね。只今の御物語を聞き候ひて落涙仕りて候を、さぞ人々の不覺の涙とや思召すらんさりながら、地謡「嬉し泣きの涙は、嬉し泣きの涙は、何か包まん唐衣、日も夕暮になりぬれば、月の盃とり〳〵に、シテ謡「主從ともに悅びの、地謡「心うれしき酒宴かな。ワキ詞「如何に實平、餘りにめでたき折なれば一さし御舞ひ候へ。

シテ詞「さらばそと舞はうずるにて候。地謡「心嬉しき酒宴なか。（男舞）

キリ地謡「かくて時日を廻らさず、かくては時日を廻らさず、國々の兵馳せ參ずれば、程なく御勢二十萬騎になり給ひつゝ掌に、治め給へるこの君の御代の、めでたき始めも、實平正しき忠勤の道に入る、實平正しき忠勤の道に入る、弓矢の家こそ久しけれ。

入る―射るとかけて弓矢をとつづけたり

弱法師

梗概

繼母の讒にあひて、父に捨てられし俊德丸の盲目となり弱法師とて流離せしが、後、父之を悔いて天王寺にて施行をなす折しも、俊德丸に迴り會ひ伴ひ歸るよしを作る。中に天王寺緣起を說くこと詳に、之に配するに難波の致景を以てし、肉眼盲ひたれど心眼開けたりとの意を寓する所、文情活躍せり。（四番目）

シテ　俊德丸　ワキ　高安通俊

ワキ詞「かやうに候者は、河内國高安の里に、左衞門の尉通俊と申す者にて候、さても某子を一人持ちて候を、さる人の讒言により暮に追ひ失ひて候。餘りに不便に候程に、二世安樂のため天王寺にて、一七日施行を引き候。今日も施行を引かばやと存じ候。

シテ一聲謠「出入の、月を見ざれば明暮の、夜の境をえぞ知らぬ。難波の海の底ひなく、深き思ひを人や知る。サレ夫れ鴛鴦の衾の下には、立ち去る思ひを悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる愁ひあり。況や心あり顏なる、人間有爲の身となりて、憂き年月の流れては、妹背の山の中に落つる、吉野の川のよしや世と、思ひもはてぬ心かな。あさましや前世に誰をか厭ひけん、今又人の讒言により、不孝の罪に沈む故、思ひの涙かき曇り、盲目とさへなりはてよ、生をも變へぬこの世より、中有の道に迷ふなり。下歌元よりも心の闇は有りぬべし。上歌傳へ聞く、彼の一行の果羅の旅、彼の一行の果羅の旅、闇穴道の巷にも、九曜の曼陀羅の光明、赫奕として行末を、照らし給ひけるとかや。今も末世と言ひながら、さすが名に負ふこの寺の、佛法最初の天王寺の、石の鳥居こよなれや、立寄りて拜まん、いざ立寄りて拜まん。

ワキ謠「頃は二月時正の日、誠に時も長閑なる、日を得て貴き貴賤の場に、施行をなして勸めけり。

シテ詞「實に有がたき御利益、法界無邊の御慈悲ぞと、踊をついで群集する。

ワキ詞「や、これに出でたる乞丐人は、如何さま例の弱法師よな。

シテ詞「又我等に名を付けて、皆弱法師と仰せ有るぞや。謠實にもこの身は盲目の、足弱車の片輪ながら、よろめ

天王寺―聖德太子物部守屋を討ちて後建立せしる

施行を引き―佛事を營み物を施すこと

出入の月云々―實目なることを云ふ

夫れ云々―前の詩と似たる文句有爲―有爲轉變

中有―極樂と地獄の中間

一行―阿闍梨にして唐玄宗の御持僧なり諸を得て果羅へ流されしこと平家物語に見ゆ

時正―こゝは彼岸中の日をさす

折梅花而挿頭二月之雪落衣―本朝文粹の句

きありけば弱法師と、名付け給ふは理なり。ワキ詞「實に言ひ捨つる言の葉までも、心ありげに聞ゆるぞや。先々施行を受け給へ。シテ詞「あら有難や候。や、花の香の聞え候。いかさまこの花散りがたになり候な。ワキ詞「あう是なる籬の梅の花が、弱法師が袖に散りかかるぞとよ。シテ詞「うたてやな難波津の春ならば、只この花とこそ仰せ有るべきに、謡今は春べも半ぞかし。梅花を折つて頭に挿しはさまざれども、二月の雪は衣に落つ、あら面白の花の匂ひやな。ワキ謡「實にこの花を袖に受くれば、花もさながら施行ぞとよ。シテ詞「中々の事草木國土、悉皆御法の施行なれば、ワキ謡「皆成佛の大慈悲に、シテ謡「漏れじと施行に連なりて、ワキ謡「手を合はせ、シテ謡「袖を擴げて、上歌地謡「花をさへ、受くる施行のいろ〳〵に、受くる施行のいろ〳〵に、匂ひ來にけり梅衣の、春なれや、何はの事か法ならぬ、遊び戯れ舞ひ謡ふ、誓の網には漏るまじき、難波の海ぞ頼もしき。實にや盲龜の我等まで、見る心地する梅が枝の、花の春の長閑さは、なにはの法によも漏れじ、なにはの法によも漏れじ。

梅衣―衣白裏紫紡色

三會―鄭福寺の維摩會興福寺の最勝會大極殿の御齋會をいふ釋尊逝いて第二の釋尊現れず我國色法の興隆未だしとなり

上宮太子―聖德太子のこと

如意輪―六觀音の一つ

太子の御前生云云―此事元亨釋書にあり

閻浮提金―黃金

萬代に云々―後拾遺集に「萬代にすめる龜井の水やさは富の小川の流なるちんし龜井を太子影面の井ともいふ

あら照る―難波の枕詞なるを難波のことに云へり

地謡「夫れ佛日西天の雲に隱れ、慈尊の出世遙に、三會の曉未だなり。シテ、ワキ謡「然るにこの中間に於て、何と心を延ばへまし。地謡「こゝによつて上宮太子、國家をあらため萬民を教へ、佛法流布の世となして、普く惠を弘め給ふ。シテ謡「然れば當寺を御建立あつて、地謡「始めて僧尼の姿を顯し、四天王寺と名付け給ふ。クセ金堂の御本尊は、如意輪の佛像、救世觀音とも申すとか、太子の御前生、震旦國の思禪師にて、渡らせ給ふ故なり。出離の佛像に應じつゝ、今日域に至るまで、佛法最初の御本尊と、現れ給ふ御威光の、眞なるかなや末世相應の御誓。然るに當寺の佛閣の、御作の品々も、赤栴檀の靈木にて、塔婆の金寶に至るまで、閻浮檀金なるとかや。シテ謡「萬代に、澄める龜井の水までも、地謡「水上清き西天の、無熱池の池水を受けつぎて、流久しき世々までも、五濁の人間を導きて、濟度の舟をも寄するなる、難波の寺の鐘の聲、異浦々に響き來て、普き誓滿潮の、おし照る海山も、皆成佛の姿なり。ワキ詞「あら不思議や、是なる者をよく〳〵見候へば、某が追ひ失ひし子にて候は如何に。

り

日想觀―時正の日には夕日回轉して西に入るとて念佛して拜むことをいふ

阿字門―梵語四十二字母の一にて最貴重なる一門をいふ

江月云々―證道歌の文句

住吉の云々―頼政の歌

思ひのあまりに盲目となりて候。あら不便と衰へて候ものかな。人目もさすがに候へば、夜にまぎれて某と名のり、安高へ連れて歸らばやと存じ候。やあ如何に日想觀を拜み候へ。シテ詞「實に〳〵日想觀の時節なるべし。盲目なればそなたとばかり、謡心當なる日に向ひて、東門を拜み南無阿彌陀佛。ワキ詞「何東門とは謂れなや、こゝは西門石の鳥居よ。シテ詞「あらおろかや天王寺の、西門を出でて極樂の、東門に向ふは假事か。ワキ詞「實に〳〵さぞと難波の寺の、西門を出づる石の鳥居。シテ謡「阿字門に入つて、ワキ謡「阿字門を出づる、シテ謡「彌陀の御國も、ワキ謡「極樂の、シテ謡「東門に、向ふ難波の西の海、地謡「入日の影も舞ふとかや。

シテ詞「あら面白やわれ盲目とならざりしさきは、弱法師が常に見馴れし境界なれば、謡なに疑ひも難波江に、江月照らし松風吹き、永夜の淸宵何の爲すところぞや。住吉の、松の隙よりながむれば、地謡「月落ちかゝる淡路島山と、シテ謡「詠めしは月影の、地謡「詠めしは月影の、いまは入日や落ちかゝるらん。日想觀なれば曇も波の、淡路繪島須磨明石、紀の海までも見えたり、見えたり、滿目青山は心にあり。シテ謡「あゝ、見るぞとよ見るぞとよ。

草香山―難津

地謡「さて難波の浦の致景の數々、シテ謡「南はさこそと夕波の、住吉の松陰、地謡「東の方は時を得て、シテ謡「春の緣の草香山、地謡「北は何處、シテ謡「難波なる、地謡「長柄の橋のいたづらに、かなたこなたと歩く程に、盲目の悲しさは、貴賤の人に行き合ひの、轉び漂ひ難波江の、足もとはよろ〳〵と、實にも眞の弱法師とて、人は笑ひ給ふぞや。思へば恥しやな、今は狂ひ候はじ。今よりは更に狂はじ。

ロンギ地謡「今は早、夜も更け人も靜まりぬ。如何なる人の果やらん、その名を名のり給へや。シテ謡「思ひよらずや誰なれば、我がいにしへを問ひ給ふ。高安の里なりし、俊德丸が果なり。地謡「さては嬉しや我こそは、父高安の通俊よ。シテ謡「そも通俊は我が父の、その御聲と聞くよりも、地謡「胸打騷ぎ呆れつゝ、シテ謡「こは夢かとて、地謡「俊德は、親ながら恥しとてあらぬ方へ逃げ行けば、父は追ひ付き手を取りて、何をか包む難波寺の鐘の聲

も夜まぎれに、明けぬ先にと誘ひて、高安の里に歸りけり。高安の里に歸りけり。

絃上

梗概

師長、琵琶の祕曲を傳へ受けんとて、入唐の望ある折から、須磨の月を眺めんとて下向し、鹽屋に一泊を乞ふ。鹽屋の翁媼、師長の琵琶を聽き、二人もおの〳〵琵琶琴を彈ず。師長その妙技に感じ、入唐を思ひ止まる。かくて翁は村上天皇と現じ、龍宮より獅子丸といふ琵琶を持參せしめて師長に賜はる由を作る。（五番目）

シテ　村上天皇（前は老翁）　前ツレ　老女
前ツレ　藤原師長　ワキ　師長從者

師長―賴長の子

ワキ次第謡「八重の汐路を行く舟の、八重の汐路を行く舟の、唐は何くなるらん。師長詞「そもそも是は太政大臣師長とは我が事なり。ワキ詞「さてもこの君天下に隱れなき琵琶の御上手にて御座候が、入唐の御望ましますにより、この度思召し立ち道すがら名所の月をも御覽ぜんために、只今津の國須磨の浦に御下向にて候。師長、サシ謡「我はさていつの夕を都の

空、まだ夜深きに旅立ちて、末に見えたる山崎も、過ぐれば跡に早なりて、ツヤ上歌謠「波越す袖の湊川、波越す袖の湊川、まだ知らぬ、方にも我は生田の漏り來る月は木の間にて、心づくしの旅の道、されども是は唐の、門出と思へば勇みある、高麗の林をよそに見て、須磨の浦にも著きにけり。須磨の浦にも著きにけり。ツヤ詞「御急ぎ候程に、是は津の國須磨の浦に御著きにて候。暫くこの所に御休みあり、事の由をも御尋ねあらうずるにて候。

シテ、ツレ一聲謠「持ちかぬる、汐汲む桶の苦しきに、又力づく、老の杖、ツレ謠「拙なき業を須磨の浦、シテ、ツレ謠「眺に憂きや忘るらん。シテ、サシ謠「面白や浦に入日は海上に浮み、須磨や明石の浦の樣、鹽燒く海士の心にも、さも面白う候なり。ツレ謠「南を遙かに眺むれば、雲に續ける紀の路の小島、シテ詞「由良の戸渡る早舟も、汐追風の吹上や、ツレ謠「遠浦ながら住吉の、松こそ見ゆれ海越しに、シテ謠「富島の磯や昆陽難波、ツレ謠「名には繪島と云ひながら、シテ謠「いかで筆にも及ぶべき。シテ、ツレ謠「あら面白の浦の氣色や。下歌地謠「實にや面白き、

富島―摂津

雨ごさめれ―雨にてこそあるめれ

田子の浦云々―源氏物語の歌に「袖ぬるゝこひぢとかつは知りながらもりたつ田子のみづかちぞうき」。わくらはに云々―上卷松風を見よ

海士の磯屋とや淡路潟、あは沖舟の漕ぎ來るは、雨ごさめれ今一返も、汐汲めや人々。上歌そよや陸奥の、そよや陸奥の、千賀の鹽竈は、名のみにて遠ければ、如何が運ばん伊勢島や、阿漕が浦の汐をば、度重ねても汲み難し。田子の浦の汐をば、いざ下りたたんわくらはに、問ふ人あらばわぶと答へて、この須磨の浦の汐汲まん。この須磨の浦の汐汲まん。シテ詞「鹽屋に歸り休まうずるにて候。

ワキ詞「鹽屋の主の歸りて候。御宿を借らばやと存じ候。如何に是なるは鹽屋の主にてあるか。シテ詞「さん候、鹽屋の主にて候。ワキ詞「是に御座候は太政大臣師長公と申して、天下に隱れましまさぬ琵琶の御上手にて候が、入唐の御望にてこの浦に御下向にて候。一夜の御宿を參らせ候へ。シテ詞「いやさやうの人にて御座候はど、異浦にて御宿を召され候へ。ワキ詞「あら何ともなや、難波わたりにてこそ異浦なんどとは申すべけれ、是は須磨の浦にてはなきか。たど御宿を參らせ候へ。シテ謠「見苦しく候へども、さらば御宿を參らせ候べし。

ツレ謡「されば一年雨の祈の御時、神泉苑にして、琵琶の祕曲を遊ばされしかば、レヲ詞「龍神もめでけるにや、さしもの晴天にはかに曇り、大雨降る事終日、謡それよりしてこの君を、雨の大臣とは申すとかや。ツレ謡「かほどやごとなき此君に、一夜の御宿を參らせて、シテ謡「祕曲をも聽聞申すならば、レヲ、ツレ謡「例なき思出。下歌地謡「彼の蟬丸は逢坂や、藁屋にて琵琶を彈き給ふ。今この君は須磨の鹽屋、露も溜らぬ軒の板間、逢ひ難き砌に、逢ふぞ嬉しかりける。上歌里離れ、須磨の家居の習ひとて、須磨の家居の習ひとて、何事を松の柱や、竹あめる垣は一重にて、風もたまらじ痛はしや、海は少し遠けれども、波たどこよもとに聞えきて、いつの間に、夢をも御覽候べき。よし〳〵それも御琵琶を、寢られぬまゝに遊ばせや、我等も聽聞申すべし。我も聽聞申さん。

松の柱―待を言掛く

海は云々―源氏物語の文句を引く

ツヤ詞「如何に申し上げ候。夜もすがら御琵琶を遊ばされ候へ。師長謡「この須磨の卷の春かとよ、源氏この浦に遷され給ひ、初めて世の味ひの辛きを知るといへども、まだ汐じまぬ旅衣、泣くばかりなる涙の露の、玉の小琴を彈き鳴らし、戀ひわびて泣く音にまがふ浦波は、思ふ方より風や吹くらん。地謡「それは浦波の、音通ふらし琴の音の、音通ふらし琴の音の、是は彈く琵琶の、折からなれや村雨の、古屋の軒の板庇、目ざます程の夜雨や、管絃の障なるらん。シテ詞「や、何とて御琵琶をば遊ばし止められて候ぞ。ツヤ詞「さん候、村雨の降り候程に、さて遊ばし止められて候。レヲ詞「實に村雨の降り候ぞや。如何に姥、苫取り出だし候へ。ツレ詞「それは何の爲にて候やらん。シテ詞「苫にて板屋を葺き渡し、靜に聽聞申さんと、シテ、ツレ謡「祖父と姥は諸共に、ツレ謡「苫取出だし、レヲ謡「さつと葺き、地謡「鹽竈の名の、近々と寄り居つゝ、耳を聳て聞き居たり。ツヤ詞「如何に主、かほど漏らざる板屋の上を、何しに苫にて葺きて有るぞ。レヲ詞「さん候只今遊ばされ候ふ琵琶の御調子は黃鐘、板屋を敲く雨の音は盤渉にて候程に、謡苫にて板屋を葺き隱し、今こそ一調子になりて候へ。ロンギ地謡「さればこそ始より、只人ならず思ひしに、心にくしや琵琶琴を、いかでか彈かで有るべき。シテ、ツレ謡「所から江の邊、岩越す波の彈きやせん。琵琶琴の、思ひもよらぬ

近々―千賀の鹽竈の意を言掛く

調子―調子の合ふこと

心にくし―ゆかしき意

思ひも―緒を言掛く

御諚なり。地謡「おもひよらずも琴の音の、押して御琵琶を賜はりて、レヲ謡「祖父は琵琶を調れば、ツレ謡「姥は琴柱を立て竝べて、地謡「撥音爪音、ばらり、からり、からりばらりと、感涙もこぼれ、嬰兒も躍るばかりなりや。彈いたり〳〵面白や。師長謡「師長思ふやう、地謡「師長思ふやう、われ日の本にて、琵琶の奥儀を極めつゝ、大國を窺はんと、思ひし事のあさましさよや。まのあたり、かゝる堪能有りける事よ。所詮渡唐を止まらんと、忍びて鹽屋を出で給へば、それをも知らで琵琶琴の、心一つの嗜みにて、越天樂の唱歌の聲、梅が枝にこそ鶯は巣をくへ、風吹かば如何にせん、花に宿る鶯、宿人の歸るをも、知らで彈いたり琵琶琴。ツレ謡「なう旅人の御立ち候。シテ謡「何旅人の御立ち候とや。なにとて留め申さぬぞと、シテ、ツレ謡「祖父と姥は走りより、地謡「琵琶琴よりも御袖を、只引けや〳〵横雲の、夜はまだ深し浦の名の、明かして御立ち候へ。師長謡「何しに留め給ふらん。まづこの度は歸洛して、重ねて尋ね申すべし。御名を名のり給へや。レヲ、ツレ謡「今は何をか包むべき。我絃上

絃上―玄象が正字なり

梨壺の女御―實は宣耀殿の女御芳子

故院―源氏物語の桐壺の帝のこと

唐土より云々―平家物語にあり仁明の御字揚部頭貞敏渡唐して歸朝する時の事なり

獅子には云々―獅子は文殊菩薩の乘物

の主たりし、村上の天皇梨壺の女御夫婦なり。地謡「御身の入唐止めん爲、夢中にまみえ須磨の浦、故院の昔の夢の告、思ひ出でよ人々とて、搔消すやうに失せ給ふ。（中入）

後シテ謡「そも〳〵是は、延喜聖代の御讓り、村上の天皇とは我が事なり。その聖代の御宇かとよ、唐土より三面の琵琶を渡さるゝ。絃上青山獅子丸これなり。さる程に獅子は龍宮へ取られしを、いで召し出だし彈かせんと、漫々たる海上に向ひ、如何に下界の龍神たしかに聞け。獅子丸持參つかまつれ。

地謡「獅子丸浮むと見えしかば、獅子丸浮むと見えしかば、八大龍女を引き連れ〳〵、かの御琵琶を授け給へば、師長給はり彈きならし、八大龍王も絃管の役々、或は波の鼓を打てば、或は琵琶の名にし負ふ、獅子團亂旋に村上の天皇も、奏で給ふ。面白かりける祕曲かな。（舞）

シテ謡「獅子には文殊や召さるらん。地謡「獅子には文殊や召さるらん。帝は飛行の車に乘

じ、八大龍女に引かれ給へは、師長も飛馬に鞭を打ち　馬上に琵琶を携へて、馬上に琵琶を携へて、須磨の歸洛ぞ有難き

別一　淡路

吹上――吹上の濱とて名所なり

梗概

神代の遺跡を尋れんとて、淡路に參向せし廷臣、田を作れる老翁に逢ひ、その諸册二神の神德を物語るを聽く。のち老翁諸尊と現じて、まのあたり威靈を示したまふことをつくる。（能脇）

シテ　伊弉諾尊（前は老翁）　ツレ　男　ワキ　臣下

三人「次第」治まる國の始めもや、治まる國の始めもや、淡路の神代なるらん。ワキ「そも〳〵是は當今に仕へ奉る臣下なり。さてもわれ宿願の子細あるにより、住吉玉津島に參詣仕りて候。又よきつでなれば、是より淡路の國に渡り、神代の古跡をも一見せばやと存じ候。ワキ三人「道行」「紀の海や、波吹上の浦風に、波吹上の浦風に、跡遠ざかる沖つ舟、汐

陰陽―古冊二冊男女の道を開き給ひしをさす

心の池―心の廣きを池に喩ふ

春の田を―金葉集の歌下句花に心をつくる頃かな

水口―田に水を引く口

路程なく移りきて、よそに霞みし島影や、淡路潟にも著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、是は早淡路の國に著きて候。この所の人を待ち、神代の古跡を尋ねばやと存じ候。

シテ、ツレ一聲謡「神の代の、跡を殘して海山の、のどけき波の淡路潟、ツレ謡「種を收めし國なれば、シテ、ツレ謡「苗代水も豐なり。シテ、ザレ謡「夫れ陰陽の神代より、今人界に至るまで、シテ、ツレ謡「山河草木國土は皆、神の惠に作り田の、雨つちくれを潤して、千里萬里の外までも、皆樂める時とかや。下歌頃しも今はのどかなる、心の池の云ひがたき、春の氣色もさまざまに、上歌春の田を、人に任せて我はたど、人に任せて我はたど、花に心のあこがるゝ、盛りに引かれて苗代の、水に心の種蒔て、散ればこゝもや櫻田の、雪をもかへすけしきかな。雪をもかへす氣色かな。

ワキ詞「いかに是なる翁に尋ぬべき事あり。おことの風情を見るに、小田をかへしながら水口に幣帛を立て、誠に信心の氣色なり。いかさま是は御神田にて候か。シテ詞「さん候、

齋田―清淨なる幣

供田―神に供ふる米を作る田

然れば云々―當時神道家の俗說

春の田を作らんとては、よろづ祝ふ事の候程に、ある水口に齋串とて五十の幣帛を立て、神を祭り候、然ればある歌に、謡谷水をせく水口に齋串立て、苗代小田の種まきにけり、詞その上この御田は、當社二の宮の御供田にて御座候程に、殊には内外清淨にて御田を作り候よ。ワキ詞「さては當社二の宮にてましまさば、國の一の宮はいづくにてましますぞや。若し權現にて御座候やらん。シテ詞「畏れながら惡しく御心得候ものかな。當社は二の宮にてましませばとて、國中一二の次第にあらず。ツレ謡「御覽候へ當社の神達、二柱の社の御殿なれば、シテ詞「二つの宮居をそのまゝにて、二の宮と崇め奉るなり。シテ、ツレ謡「是は卽ち伊弉諾伊弉册の尊二柱の、神代のまゝに宮居し給ふ淡路の國の、神は一宮宮居は二つの、二の宮と崇め申すなり。ワキ謡「よく〳〵聞けば有難や、さて〳〵かゝる國土の種を、曹く受くる御恩德、只この神の誓よなう。シテ詞「事新しき御諚かな。國土世界や萬物の、出生あまねき御神德、只是當社の誓なり。ツレ謡「然れば開けし天地の、伊弉諾と書いては、シテ詞「種蒔くとよみ、ツレ謡「伊弉册と書いては、シテ詞「種を收む。ツレ謡「是

目前の御誓なり。レテ謡「その上神代は遠からず、ツレ謡「今目の前にも、レテ謡「御覽せよ。上歌地謡「種を蒔き、種を收めて苗代の、種を收めて苗代の、水うらゝにて春雨の、天よりくだれる種蒔きて、國土も豐に、千里榮る富草の、村早稻の秋になるならば、種を收めん神德、あら有難の誓やな。有難の神の誓やな。

富草―稻のこと

ワキ謡「なほ〳〵當社の神祕ねんごろに御物語り候へ。クリ地謡「夫れ天地開闢の昔より、渾沌未分やうやく分れて、清く明かなるは天となり、重く濁れるは地となれり。レテ、サシ謡「然れば天に五行の神ましまします。木火土金水是なり。地謡「既に陰陽相分れて、木火土の精伊弉諾となり、金水の精凝り固まつて伊弉册と顯る。レテ謡「然れども未だ世界ともならざりし前を伊弉諾といひ、地謡「國土治まり萬物出生する所を、伊弉册と申す。卽ちこの淡路の國を始とせり。クセさればにや、一柱の御神の、磤馭盧島と申すも、この一島のことかとよ。凡そこの島はじめて、大八洲の國をつくり、紀の國伊勢志摩日向竝に、四つの海岸を作り出し、日神月神蛭子素盞嗚と申すは、地神五代の始にて、皆この島に御出

渾沌未分―一つにて未だ二つに分れざること

現。中にも皇孫は、日向の國に天降り給ひて、地神第四の火々出見の皇子を御出生、實に有難き代々とかや。レテ謡「天下をたもちたまふ事、地謡「すべて八十三萬、六千八百餘歲なり。かゝるめでたき皇子達に、御代を樔葉の、權現と現れおはします、伊弉諾伊弉册の神代も、只今の國土なるべし。

御客人―參向ありし臣下をさす

ロンギ地謡「實に神の代の道直に、實に神の代の道直に、今も妙なる秋津洲の、君の御影ぞ有難き。レテ謡「御影ぞと、夕日がくれの雲の端に、たなびく天の浮橋の、いにしへを現して、御客人をなぐさめん。地謡「そも浮橋のいにしへと、聞くはいかなる言の葉の、レテ謡「その神歌は烏羽玉の、我が黑髮も、地謡「亂れずに、結び定めよ小夜の手枕の、歌の種蒔きし神とも今は白波の、淡路山を浮橋にて、天の戸を渡り失せにけり。天の戸を渡り失せにけり。（中入）

ワキ上歌謡「實に今とても神の代の、實に今とても神の代の、御末はあらたなりけりと、いへば虛空に夜神樂の、月に聞えて光さす、けしきぞあらたなりけるや。けしきぞあらた

なりける。

後レテ謡「わたづみの插頭に插せる白玉の、波もて結へる淡路島、月春の夜ものどかなる、緑の空も澄み渡る、天の浮橋の上にして、八洲の國を求め得し、伊弉諾の神とは我が事なり。治まるや國常立の始めより、地謡「七つ五つの神の代の、シテ謡「御末は今に君の代より、地謡「和光守護神の扶桑の御國に、風は吹けども山は動ぜず。（神）ロンギ げにありがたき御誓、げに有難き御誓、そも〳〵天の浮橋の、その御出所はさるにても、いかなる所なるらん。シテ謡「振り下げし、鉾の滴り露凝りて、一島となりしを、淡路よと見つけし爰ぞ浮橋の下ならん。地謡「げにこの島の有様、東西は海漫々として、シテ謡「南北に雲峯を列ね、地謡「宮殿にかゝる浮橋を、シテ謡「立ち渡り舞ふ雲の袖、謡「さすは御鉾の手風なり。引くは、潮の時つ風、治まるは波の蘆原の、國富み民も豊に、萬歳をうたふ松の聲、千秋の秋津洲。治まる國ぞ久き。治まる國ぞ久き。

わたづみの―古今集の歌三句白ゆの末句淡路島山

七つ五つ―天神七代地神五代

淡路―あれはの寓のあはを掛く

放下僧

梗概　牧野小次郎といふ者、兄の禪僧と共に放下になりて諸國を遍歷し、父の敵利根信俊に廻り會ひて、遂に討取ることを作る。（四番目）

シテ　牧野兄禪僧　ツレ　牧野小次郎
ワキ　利根信俊　狂言　従者

ツレ謡「かやうに候ものは、下野の國の住人、牧野の左衛門何某が子に、小次郎と申す者にて候。さても親にて候者は、相摸の國の住人、利根の信俊と申す者と口論し、念なう討たれて候。親の敵にて候程に討たばやとは存じ候へども、敵は猛勢我等は只一人にて候間、思ふにかひなく月日を送り候。又兄にて候者は、幼少より出家仕り、あたり近き會下に候、あまりに便もなく候間、立ちこえこの事を談合せばやと存じ候。いかに案内申し候。シテ謡「誰にて渡り候ぞ。ツレ謡「某が參りて候。シテ謡「や、此方へ渡り候へ。さ

念無う―無念に

て只今は何の爲に來り給ひて候ぞ。ッレ詞「さん候 只今參る事餘の儀にあらず。我等が親の敵の事討たばやとは存じ候へども、敵は猛勢我等は只一人にて候程に、思ふにかひなく月日を送り候。あはれ諸共に思召し御立ち候へかし。ッレ詞「仰せはもつともにて候へども、我等が事は幼少より出家の身にて候程に、今更いかゞにて候。ッレ詞「御意はさる事にて候へども、親の敵を討たぬ者は不孝の由を申し候。ッレ詞「さて親の敵を討つて孝に備はりたる事の候か。ッレ詞「なか〳〵の事。物語 唐のことにや有りけん、母を惡虎に取られ、その敵をとらんとて、百日虎伏す野邊に出でて狙ふ。ある夕暮に、尾上の松の木陰に、虎に似たる大石のありしを敵虎と思ひ、番へる矢なればよつぴいて放つ、この矢すなはち巖に立ち、たちまち血流れけるとなり。是も孝の心深きにより、堅き石にも矢の立つと申し候へば、只思召し御立ち候へ。ッレ詞「是は面白き事を引いて承り候ものかな、この上は諸共に思ひ立たうづるにて候。ッレ詞「然るべう候。ッレ詞「さて彼者には何として近づき候ふべき。ッレ詞「某きつと案じ出したる事の候。此頃人の翫び候は放下にて候程に、

母を惡虎に取られ—李廣の故事 今昔物語にあり

放下—田樂法師の類

禪法—禪道

某は放下になり候べし。御身は放下僧に御なり候へ。彼者禪法に好きたる由申し候程に、禪法を仰せられうずるにて候。ッレ詞「げに是は面白き了簡にて候。さらばやがて思ひ立たうずるにて候。ッレ詞「尤にて候。ッレ謡「いざ〳〵さらばと思ひつゝ、行脚の姿に身をやつせば、ッレ謡「我も嬉しく思ひつゝ、放下の姿に出で立つて、ッレ謡「さもすご〳〵と、ッレ謡「立ち出づる。上歌地謡「故郷の、名殘もさぞな有明の、名殘もさぞな有明の、つれなきながらながらふる、命ぞ限り兄弟は、我が心をや賴むらん。我が心をや賴むらん。ワキ次第謡「歩みを運ぶ神垣や、歩みを運ぶ神垣や、隔てぬ誓賴まん。詞 これは相摸の國の住人、利根の信俊と申す者にて候。我この間打ち續き夢見惡しく候程に、瀬戸の三島へ參らばやと存じ候。

瀬戸—武藏金澤

後ッレ、サシ一聲謡「面白の我等が有樣やな。僧俗二つの道を離れ、姿言葉も人に似ぬ、ッレ謡「その振舞を隱家と、思ひ捨つれば安き身を、ッレ謡「知らでなどかは迷ふらん。ッレ、ッレ一聲謡「落花一樣の春を知らず、白雲青山に蔽ふとか、ッレ謡「流水山上の秋にして、ッレ、ッレ謡「紅葉を

古川―降るにかくうたかた―泡沫

十力―是處非處力業力定力根力欲力性力至處道力宿命力天眼力漏盡力
一句―禪法の一語

爭ふ謂あり。地謡「朝の嵐夕の雨、朝の嵐夕の雨、今日又明日の昔ぞと、夕の露の村時雨定めなき世に古川の、水のうたかた我いかに、人をあだにや思ふらん。人をあだにや思ふらん。

シテ詞「浮雲流水と申し候。狂言カシカ〳〵。シテ詞「浮雲流水と申し候。狂言シカ〳〵。シテ詞「又あれなる御方の御苗字をば何と申し候雲、あれなる者は流水にて候。狂言シカ〳〵。シテ詞「承り候。ワキ詞「凡そ沙門の形と謂つばぞ。狂言カシ〳〵。シテ詞「いや苦しからず候、只放下が參りたると御申し候へ。狂言シカ〳〵。ワキ詞「いかに面々に不審申したき事の候、シテ詞「いや某は浮十力の珠數を手に纏ひ、忍辱二體の衣を著、罪障懺悔の袈裟を掛けてこそ僧とは申すべけれ、異形のいでたち心得ず候。又見申せば拄杖に團扇を添へて持たれたり。團扇の一句承りたく候。シテ謡「夫れ團扇と申すは、動く時には清風をなし、靜なる時は明月を見す。詞明月清風只同性の内にあれば、諸法を心が所作として、謡心實修行の便にて、我等が持つは道理なり。咎めたまふぞ愚なる。ワキ詞「團扇の一句面白う候。今一人は弓矢を帶し給

ざうか―候かの約語
本末―本弭を扇に象り末弭を兎に象るといふ
方便の矢―衆生を救ふ手段として武器を執るなり
四魔―煩惱魔五衆魔天子魔死魔
引かぬ弓云々―夢窓國師の歌と云ひ傳ふ
宗體―宗旨の立て方

公案―佛祖の機緣を云ふ本文の三昧―思を專にし想を靜むること
白雲深處金龍躍―碧巖の語

ふ。弓も御僧の道具ざうか。ワレ謡「夫れ弓と申すは本末に、烏兎の姿を像り、詞日月とこに顯し、淨穢不二の祕法を表す。されば愛染明王も、神通の弓を張り、方便の矢を爪よつて、謡四魔の軍を破り給ふ。地謡「されば我等も之を持ち、されば我等も之を持ちて、引かぬ弓、はなさぬ矢にて射る時は、中らずしかも外さざりけりと、かやうによむ歌もあり、知らずな物なのたまひそ。知らずな物なのたまひそ。

ワキ詞「さて放下僧はいづれの、祖師禪法を御傳へ候ぞ。面々の宗體が承りたく候。シテ詞「我等が宗體と申すは、教外別傳にして、言ふも言はれず說くも說かれず、言句に出せば教に落ち、文字を立つれば宗體に背く、謡たゞ一葉のひるがへる、風の行方を御覽ぜよ

ワキ詞「げに〳〵面白う候。さて座禪の公案何と心得候べき。ワレ謡「入つては幽玄の底に動じ、出でては三昧の門に遊ぶ。ワキ詞「自身自佛はさていかに。シテ詞「白雲深き所金龍躍る。ワキ謡「生死に住せば、シテ謡「輪廻の苦。ワキ謡「生死を離れば、シテ謡「獸見の科。ワキ詞「さて向上の一路は如何に。ワレ詞「切つて三段と爲す。シテ詞「暫く。切つて三段と爲すとは、禪法

の言葉なるを、謡御騒ぎあるこそ愚なれ。地謡「なにとたどなか〳〵に、磐手の山の岩躑躅、色には出でじ。南無三寶。をかしの人の心や。

シテ、サシ謡「されば大小の根機を嫌はず、持戒破戒を選ばず、地謡「有無の二偏に落つる事なく、皆成佛するためしあり。シテ謡「かるが故に草木も發心の姿を現し、地謡「柳は緑花は紅なる、その色々を現せり。クセ青陽の春の朝には、谷の戸出づる鶯の、凍れる涙とけそめて、雪消の水のうたかたに、相宿りする蛙の聲、聞けば心のある物を、目に見ぬ秋を風に聞き、荻の葉そよぐ故郷の、田面に落つる雁鳴きて、稲葉の雲の夕時雨、妻戀ひかぬる小男鹿の、たゞずむ月を山に見て、指を忘るゝ思ひあり。シテ謡「浦の湊の釣舟は、地謡「魚を得て筌な捨つ、此を見彼を聞く時は、嶺の嵐や谷の聲、夕の煙朝霞、皆これ三界唯心の、理なりと思召し、心を悟り給へや。シテ謡「月の爲には浮雲の、地謡「種と心や爲りぬらん。シテ謡「面白の花の都や。地謡「筆に書くともおよばじ。東には祇園清水、落ちくる瀧の音羽の嵐に、地主の櫻はちり〴〵、西は法輪嵯峨の御寺、廻らば廻れ

凍れる涙―古今集に「年の内に春は來にけり霞の氷れる涙今や解くらん」

指を忘る―圓覺經に見ゆ月を見るに端指を借る心を悟るに佛教を假る、後却て月を見て指を忘れ心を悟て教を忘れ易しとなり得レ魚而忘筌―莊子の語筌は魚を捕る具

面白や云々―小唄ぶし

臨川堰―臨川寺の井堰なり水車を仕懸けありたりといふ

こきりこ―あやもりの竹ともいふ

水車の輪の、臨川堰の川波、川柳は水に揉まるゝ、しだり柳は風に揉まるゝ、ふくら雀は竹に揉まるゝ、都の牛は車に揉まるゝ、茶臼は挽木に揉まるゝ、げにまこと忘れたりとよ、こきりこは放下に揉まるゝ。こきりこの二つの竹の、世々を重ねて、打ち治まりたる御世かな。

シテ、ツレ謡「さのみは何と包むべきと、兄弟ともに抜きつれて、思ふ敵に走り寄り、地謡「この年月の恨みの末、今こそ通れ願ひのまゝに、敵をぞ討つたりける。キリかくて兄弟念力の、かくて兄弟念力の、その期の有りて忽に、親の敵を討つ事も、孝行深き故により。名を末代に留めけり。名を末代に留めけり。

吉野靜

梗概　義經吉野より落つる時、忠信、君を遠く落ちしめんとて、わざと衆徒の席に入りて問答に時を移し、靜御前に舞を舞はしむる事を作る。（三番目）

シテ　靜　ワキ　忠信　立衆　大勢　狂言　衆徒

狂言シカ〳〵。ワキ詞「これは都道者にて候、衆會の御座敷とも存ぜず候。御免あらうずるにて候。狂言詞「さては都人にて候か。判官殿の御行方をば何と申し候ぞ。ワキ詞「上は御一體なれば、終には御中直らせ給ふべき由申し候。狂言詞「さていかやうにて御落ち有りたると申し候。ワキ詞「十二騎とこそ承つて候へ。狂言詞「十二騎ならば追つかけ討ちとめ申さう。ワキ詞「暫く。十二騎と申すとも、餘の勢百騎二百騎にもむかふべし。かやうに申すは都の者、當山を信じ參る上は、いかにも御寺も宿坊も、難なくおはしませかしと、思へばかやうに申すなり。謡この上はともかくも、地謡「御はからひぞ吉野山、御ばからひぞ吉

狂言―衆徒ワキに對して「いやこゝを忝くも吉野の衆會の座敷を何者なれば雛草鞋で出たぞ」など言ふことあり

上は御一體―頼朝は義經と兄弟なればとなり

野山、よしなき申し事、洩れ聞えなば判官の、後のとがめも恐しや　御暇申し候はん。

シテ謡「さても靜は忠信が、その契約を違へじと、舞の裝束ひきつくろひ、忠信遲しと待ち居たり。ワキ詞「是は都道者にて候が、法樂の舞の由承り、下向道を忘れて候。はやはや舞を始め給ふべし。シテ謡「都の人と聞けばなつかしや、判官御道せばき事、世上の聞えいかなるぞ、都人こそ知るべけれ。ワキ詞「終には御中直らせ給ふべしと、聞くより人々先非を悔いて、謡皆々恐れ申すなり。シテ謡「さては嬉しや委しくも、知らせ給ふか都人。ワキ詞「あまりに事延び時移りぬ、謡心得給へ舞の袖。シテ謡「げになう言葉多き者は品すくなし。かやうに我等言の葉過ぎば、なか〳〵人も怪しみて、もしもそれとか三吉野の、かつて知らすな、一聲靜かに囃せや靜が舞に。地謡「衆徒も時刻や移すらん。シテ謡「神こそ納受ましますらめ。地謡「げに此御代も靜が舞。シテ、サシ謡「然るに彼の判官は、神道を重んじ朝家を敬ひ、地謡「ひとへに忠勤を擢んでて、私の心さらになし。シテ謡「人は讒し申すとも、

其契約―忠信が靜の供して吉野を立退く約束

法樂の舞―神佛に奉納する舞樂

かつて知らすな―勝手の社に掛けていふ

地謠「神は正直の頭に宿り給ふなれば、靜が舞の袖に、暫くうつりおはしまし、我が君を守り給へと、祈るぞあはれなりける。クセ「そも〳〵景時が、その讒言の水上を、おもへば渡邊や、流るゝ水に滿汐の、逆櫓立てんと浮船の、梶原が申し事、よも順義にて候はじ。されば義經はすぐに脩めし三吉野の、神のちかひの眞あらば、賴朝も聞召し直され、義經執節の勅を受け、洛陽の西南は、これ分國となるべし。さあらば當山の、衆徒ことごとく參洛し、歸依渴仰の御袖に、惠をいだき給ふべし。あなかしこ、不忠なし給ふな御科は候はじ。シテ謠「但し衆徒中に、猶いきどほり深うして、地謠「進みて追つかけ給ふとも、その名きこゆる人々を、討ちとどめ申さんは、片岡增尾鷲の尾、さて忠信はならびなき、精兵ぞよ人々に、防矢射られ給ふなと、語ればゆには衆徒中に、すゝむ人こそなかりけれ。

執節―天皇の御代理として政治を行ふこと

片岡增尾鷲の尾―義經の郎等なり

シテ謠「しづやしづ、（序ノ舞）ヲカしづやしづ、賤の苧環くりかへし、地謠「昔を今になすよしもがな。あまりに舞の面白さに、時刻をうつして進まぬもありけり。又は判官の武勇に恐れて、よし義經をばおとし申せと、詮議を加ふる衆徒も有りけり。さる程に、時移つて、主君も今は忠信が、謀にて難なく遙に、落し申しつ、心しづかに願成就して都へとこそ歸りけれ。

籠太鼓

梗概　清次といふ者科人となりて入牢せしめられしが、牢を破りて失せしかば、其妻、捕へられて、夫の在所を責め問はれしに、狂氣となりて時守の太鼓を打つ。その物哀れさにつひに夫妻の罪を免さるゝ事を作る。（四番目）

シテ　清次妻　ワキ　松浦某　狂言　従者

ワキ詞「是は九州松浦の何某にて候。さても某召しつかひ候關の清次と申す者、他郷の者と口論し、念なう敵をば討つて候。さりながら科人の事にて候間、やがて牢者させて候。彼の者大剛の者にて候間、番の事かたく申しつけばやと存じ候。いかに誰かある。狂言詞「御前に候。ワキ詞「彼の者大剛の者にてある間、番の事堅く仕り候へ。狂言詞「畏つて候。いかに申上げ候。清次が今夜牢を破りぬけて候。ワキ詞「何と清次が牢よりぬけたると申すか。言語道斷の事。さてこそ以前より堅く申し付けてあるに、さやうに油斷仕り

科人―私に敵を討ちたればなり

牢者させて―入牢せしむること

てあるぞ。さて彼のものの子はなきか。狂言詞「いや子はなく候。ワキ詞「妻はなきか。狂言詞「それは御座候。ワキ詞「さあらばいそいでその女をつれてきたり候へ。狂言詞「畏つて候。シテ詞「科人を召し籠められ候上は、女までの御罪科はあまりに御情無なうこそ候へ。ワキ詞「いかに女。さても汝が夫の清次、今夜牢を破り失せぬ。夫婦の事なれば知らぬ事はあるまじ、眞直に申し候へ。シテ詞「もとより賤しき者なれば、我が身の助かり候をこそ喜び候べけれ。わらはにはかくとも申さず候ほどに、夢にも知らず候。ワキ詞「いや〳〵何と申すとも知らぬ事はあるまじ。まづ〳〵落居の有らん程、夫の代りに牢者させ、謡その在所を糺さんと、上歌地謡「今の女を引き立てよ、今の女を引き立てよ、急ぎ牢者になすべしと、さもあらけなき人心、情なしとは思へども、殺害の科をのがれえぬ、報のほどぞ無慙なる。報のほどぞ無慙なる。ワキ詞「やあいかに汝は女に向ひ何事を致すぞ。その野者げなるによつて清次をも牢より遁いてあるぞ。所詮今よりは鼓をかけて、一時づつ時を打つて番を仕り候へ。

落居―落著なり

包めども―古今集の歌末句涙なりけり

道狹き―同身の狹きこと

レヲ、サシ謡「げにや思ひ内にあれば、色は外にぞ見えつらん。包めども袖にたまらぬ白玉は、人を見ぬ目の涙かな。

狂言詞「いや言語道斷。牢中の女が狂氣になりて候。やがてこの由を申さうずるにて候。いかに申し上げ候。牢中の女か以ての外狂氣仕り候。ツヤ詞「是は眞にてあるが。狂言詞「さん候。ツヤ詞「あら不便や立越え見うずるにて候。やあいかに女、何故さやうに狂氣してあるぞ。レヲ詞「何故狂氣するぞと承る。謡人の心の花ならば、風の狂ずる故もあるべし。況んや偕老同穴と、契し夫もゆくへ知らで、殘る身までも道狹き、なほ安からぬ牢の内、思ひの闇のせんかたなさに、物に狂ふはこととわりなり。さりながら、いづくに夫の在處を、方ならぬ身のなげきに、物に狂ふは僻事か。ツヤ詞「げに〳〵夫の別れ牢者の思ひ、一知らせばやがて呼びとつて、汝は牢より出すべし眞直に申し候へ。レヲ詞「是は仰せとも覺えぬものかな。たとひ夫の在處を知りたればとて、あらはし夫を失ふべきか。その上夫の在所を、夢現にも知らぬものを。ツヤ謡「やさしき女の言事かなと、詞手づから牢の戸をひらき、はや是までぞとく出でよ。レヲ詞「御志はありがたけれども、夫に代れるこの身なれば、この牢の内をば出づまじや。謡是こそ形見よなつかしや。地謡「無慙や我が夫の、身に代りたる牢の内、出づまじや雨の夜の、盡きぬ名殘ぞ悲しき。西樓に月落ちて、花の間も添ひ果てぬ、契ぞ薄き燈の、殘りてこがるゝ、影はづかしきわが身かな。ツヤ詞「言語道斷。かゝるやさしき事こそ候はね。この上は夫婦ともに助くるぞ疾く出で候へ。レヲ詞「かほどに情ましまさば、始めよりかく憂き目を見せ給ふべきか。謡さるにてもわがつまはいづくにあるらん、なう心が亂れさむらふぞや。一聲亂るゝは、柳の髪か春雨の、地謡「涙に咽ぶ心かな。レヲ詞「なう〳〵これなる鼓は何のために懸けられて候ぞ。ツヤ詞「あれこそ時守の時を知る相圖の鼓よ。レヲ詞「面白し〳〵。異國にもさる例あり。かやうに鼓を懸けて時を守りしこともあり。その心を得て古き歌に、謡時守の打ちます鼓聲きけば、時にはなりぬ君は遲くて。地謡「遲くも君が來んまでぞ。レヲ詞「なうこの鼓を打つて心が慰みたう候。ツヤ詞「やすき間の事いかやうにも打つて慰め候へ。レヲ謡「鼓の聲も音

西樓に云々―曾原文時の詩句に西樓月落花間曲中殿燈殘竹裏音とあるを引く花の間―僅の間の意

異國にも云々―蘇東坡の長夜獸座歌「更鼓」などを云ふか時守の云々―萬葉集に時守の打鳴す鼓よみ見れば時にはなりぬあはぬもあやしを響へて引く

娥皇女英―二人は舜の后妃なり舜の崩ぜしを悲しみて湘浦に死す
六つの鼓―六つは午後六時五つは八時四つは十時九つは十二時なり

にたてよ、地謡「なく鶯の青葉の竹、シテ謡「湘浦の浦や娥皇女英、地謡「諫鼓苔むすこのつどみ、シテ謡「うつよもなやななつかしや。上歌地謡「鼓の聲も時ふりて、鼓の聲も時ふりて、日も西山に傾けば、夜の空の近づく、六つの鼓打たうよ。五つの鼓いつはりの契あだなる妻琴の、引き離れいづくにか、わが如く忍音の、やはら〳〵打たうよや、やはらやはら打たうよ。四つの鼓は世の中に、四つの鼓は世の中に、戀といふ事も恨といふ事も、なき習ひならば、獨物は思はじ。シテ謡「九つの、地謡「九つの、夜半にもなりたるや。あら戀しわが夫の、面影に立ちたり、うれしやせめてけに、身がはりに立ちてこそは、二世のかひもあるべけれ。この牢いづる事あらじ、なつかしのこの牢や、あらなつかしのこの牢。

ワキ詞「この上は諏訪八幡も御知見あれ、夫婦ともに助くるぞはや疾く出で候へ。シテ詞「げにこの上はさればとて、御僞はよもあらじ、まことは夫の在所、筑前の宰府に知る人あれば、そなたへ行きてや候らん。ワキ謡「いしくも隱さず申したり。詞しかも今年はわが親の、十三年に當りたれば、謡科ありとても助舟の、シテ謡「松浦の川や西の海、ワキ謡「彼の國ちかき、シテ謡「極樂の、地謡「彌陀誓願の誓かや。科を助くるあはれみの、あらありがたの御慈悲や。

ツレ地謡「やがて時日をうつさず、やがて時日をうつさず、かくれし夫を尋ねつよ、もとの如くに歸りゐて、結ぶ契の末久に、松浦の川や二世の緣、げにありがたき心かな。げにありがたき心かな。

松浦―待つを掛く

錦戸

梗概　錦戸太郎(國衡)、主君義經に背きて頼朝に從はんとせしを、弟の和泉三郎(忠衡)亡父秀衡の遺命默止し難しとて應ぜざりしかば太郎遂に弟を討ち滅す事を作る。(四番目)

シテ　和泉三郎　　ツレ　三郎妻
ワキ　錦戸太郎　　立衆　大勢

空しく成りて―秀衡は文治三年卒す
金打させ―刀の鐔を鳴らして誓約せしむること

ワキ詞「かやうに候者は、奥州の住人秀衡が子に、錦戸の太郎にて候。さても頼朝義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿は親にて候者を御頼み有り、是まで御下向候間頼まれ申し候處に、御運の盡きさせ給ふにや、親にて候者空しく成りて候。その際に我等を近づけ、君に心變り申すなと、堅く申しつけ金打させて候。尤もその儀違變なく候處に、いかなる者の申し候やらん、我等君に心變り申す由を聞召し、日々に出仕申すといへども、更に御對面もなく候間、この上は力及ばぬ事と存じ候處に、頼朝より御教書をなされ、

泰衡―伊達次郎といふ
世の人口―世間の非難
同じ主君―同じ源家に仕ふること

急ぎ參るべき由を度々仰せられ候程に、泰衡我等は同心仕り、はや頼朝へ參るべきに定めて候。いまだこの由を三男和泉の三郎に申さず候間、只今和泉が館に行き、かやうの事をも談合せばやと存じ候。

ワキ詞「いかに案内申し候。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「某が參りて候。シテ詞「や、こなたへ御出で候へ。さて只今の御出では何のためにて候ぞ。ワキ詞「さん候。只今參ること餘の儀にあらず、さても我等日々に出仕申し候へども、更に御對面もなく候間、此上は力及ばぬ事と存じ候處に、頼朝より御教書をなされ、急ぎ參れとの御事にて候程に、泰衡我等同心し、はや頼朝へ參るべきに定めて候が、御分は何とか思ひ給ひ候ぞ。シテ詞「仰せ畏つて承り候ひぬ。我が君も人の申しなしにて、一旦の御恨事にてこそ候らめ、その上御遺言の事にて候間、只思召し御止り候へ。ワキ詞「申すところはさる事なれどもさりながら、我等他門へ參らばこそ、世の人口もあるべけれ、同じ主君に仕へん事、何の苦しう候べき。只々同心し給へとよ。シテ詞「いや頼朝への御忠節、我が君の奉公になるべからず。

その上今まで頼まれ申す、主君に心を引きかへて、敵とならせ給はんは、御兄弟のたとへに入るべからず。一家の恥は如何ならん。ワキ詞「さてはおことは承引あるまじきか。シテ詞「恐れながら、身に於いてまことに、同心申しがたし。ワキ詞「いや〳〵御身は詞を巧み宣へども、順儀の法は違ひたり。シテ詞「いや順儀を存ずる身なればこそ、親の遺言背かぬなり。ワキ詞「それは何とて正しき兄の言事をば聞き給はぬぞ。シテ謡「仰せを背くと承れども、親の遺言承引なきは、不孝の科にてましまさずや。ワキ謡「不孝の科は数多あり。シテ詞「汝は兄の言事を、シテ謡「承引なきは主君の命、ワキ謡「その外親子、シテ謡「兄弟の、地謡「互の論は槻弓の、互の論は槻弓の、力及ばぬ事なれば、是までなりや今ははや兄と思ふな弟とも、見る事さらに有るまじと、座敷を立つて錦戸は、歸る心ぞあさましき。歸る心ぞあさましき。

槻弓―靈きを掛く

シテ詞「言語道斷の事にて候ものかな。まづ〳〵妻にて候者を呼び出し、此事を申し聞かさばやと存じ候。いかに渡り候か。ツレ詞「何事にて候ぞ。シテ詞「まづ此方へ渡り候へ。さても我が君の御運こそ末にならせ給ひて候。ツレ詞「そも我が君の御運の末にならせ給ひたるとは、何と申したる御事にて候ぞ。シテ詞「さん候我が君御對面なき事を、錦戸泰衡無念に思ひ、兄弟はや敵となり、某にも同心せよと宣へども、まづ案じても御覽ぜよ、今まで頼まれ申す主君に心を引きかへて、親の遺言背かん事、弓矢取つての恥辱なるべし。さればある詞にいはく、地謡「賢人二君に仕へず、貞女兩夫にまみえずと、地謡「この理を聞く時は、男女によるまじや。殊に弓馬の家に生れ、二人の主君には、いかでか仕へ申さん。

賢人云々―史記田單傳に忠臣不事二君烈女不更二夫の意　男女によるまじや―忠貞の道は男女の別なしとの意

シテ詞「や、何と申すぞ。某同心せざる事を錦戸泰衡無念に思ひ、只今討手に向ふと申すか。あら何ともなや、某が事は親の遺言にて候程に、一足も落つる事は候まじ。不覺を見えんも口惜ければ、御身は何方へも御忍び候へ、ツレ詞「實に〳〵敵は寄せ來たる、いかに心は猛くとも、地謡「女の身にて候へば、思ひ切らせたまひたる、御身の障ともなるべきなり。まづ〳〵妾ともかくも、自害に及び候べし。御心安く御覽じ置きて、討死めさ

二體の義―優劣なき義理

れ候へ。シテ詞「げに健氣なる言事かな。さらば自害に及び給へ。ツレ詞「承りて候とて、心づよくも夕日の影の、シテ謡「西に向ひて、シテ、ツレ謡「手を合せ、地謡「彌陀佛助け給へと祈念して、助け給へと祈念して、心づよくも自害せんと、思ひ定めたる、夫婦の身こそ哀なれ。その時腰刀を、抜き持ちて立ちより、我も是にて腹切らん、御身も自害し給へと、いへば刀を請け取りて、胸のあたりに突き立てよ、よろ〳〵と倒れ伏しければ、和泉は死骸に取りつきて、泣くより外の事ぞなき。泣くより外の事ぞなき。（中入）

後ワキ立衆「一聲謡「藤波のかよれる、松の梢をば、嵐やよせて散らすらん。ワキ詞「いかに和泉の三郎確に聞け。水は逆さまに流るるものか。順逆二列の境に迷ひ、我とその身を失ふなり。恨みと更に思ふべからず。謡尋常に腹切り給へ。シテ詞「何錦戸の討手とや。ワキ詞「なかなかの事。シテ謡「あら珍しや、詞いで〳〵對面申さんと、物の具取つて肩にかけ、大太刀追取り櫓にあがり、大音あげて名のるやう、謡君親ふたつは二體の義、君を重んじ親子の孝行、賢人無雙の弓取に、かへつて兎角の仰せは如何に。あら腹立や無念やな。

合ひ附けて―ぴり合ふこと

妻もまつちん―自害せる妻の後を追はんとなり

ワキ詞「いや〳〵兎角の問答は無益、謡はや討ちとれや兵と、地謡「下知を加ふる下よりも、下知を加ふる下よりも、我も我もと面々に、結橋や堀の埋草、沈めつゝ乗り越え乗り越え、斷岸によせつけて、喚き叫んで攻めたりけり。シテ謡「われながら兄弟に、地謡「矢を放さんは恐れなれども、さりながら是は又、主君のために捨てん命、何かは科ならん。惜しからぬ我が身なり、疾く寄りて討てや人々。その時寄手の勢は、その時寄手の勢は、我眞先にと進みけるに、和泉は少しも騒がずして、もとより好む大太刀を、柄長におつとり延べて、多勢が中に割つて入りつゝ、左右に合ひ附けて、鎬を削つて戰ひける に、一人とすゝめる武者の、甲の眞向ちやうと打ち、引く太刀にて諸膝かけず流れて、かつぱと倒れてどうと伏す。シテ謡「今は是までなり、地謡「さこそは妻も待つらんものを、いで追つ付かんと言ふ儘に、物の具取つてかしこに投げすて、日頃念ぜし持佛堂の、床の上に走りあがり、淨土に迎へ給へと、腹十文字にかき切り、床よりもころび落ちけるを、敵の兵おり重つて、追つ立て行くこそ哀なれ。

別二

室君

梗概　播州室の明神にて、囃物をして神事を行ふことあり。遊女棹の歌を謡ひ神樂を奏づ。かくて明神影向あらせらるゝ事を作る。（四番目）

シテ　明神（謡無し）　ツレ　室君
ワキ　神職　　狂言　下人

ワキ詞「是は播州室の明神に仕へ申す神職の者にて候。さても天下泰平の折節なれば、室君たちを船に載せ、囃物をして神前にまゐる御神事の候。いまこの時もめでたき御代なれば、急き御神事を執り行はどやと存じ候。いかに誰かある。狂言詞「御前に候。ワキ詞「いそぎ室君たちに神前へ御參りあれと申し候へ。狂言詞「畏つて候。

室君―室津の遊女

ツレ謡「室の海、地謡「室の海、波ものどけき春の夜の、月の御舟に棹さして、霞む空は面白やな、霞む空は面白や。ツレ謡「梅が香の、地謡「梅が香の、磯山遠く匂ふ夜は、出船も心ひく、花ぞ綱手なりける。この花ぞ綱手なりける。狂言シカ〳〵

ワキ詞「近頃めでたき御事にて候。又ことぐく棹を御さし候ほどに、棹の歌を御うたひ候へ。

ツレ謡「棹の歌、うたふ浮世の一節を、地謡「うたふ浮世の一節を、夕波千鳥聲そへて、友よびかはす海士少女、恨みぞまさる室君の、行く船や慕ふらん。朝妻船とやらんは、それは近江の海なれや、我も尋ね尋ねて、戀しき人に近江の、海山も隔たるや、あぢきなや浮舟の、棹の歌を謡はん、水馴棹の歌うたはん。ワキ裁ち縫はぬ、衣著し人もなき物を、何山姫の布晒すらん。佐保の山風のどかにて、日影も匂ふ天地の、開けしもさしおろす、棹のしたどりなるとかや。ツレ謡「然れば春すぎ夏たけて、地謡「秋すでに暮れ行くや、時雨の雲の重りて、嶺白妙に降り積る、越路の雪の深さをも、知るやしるしの棹た

花ぞ綱手―花が人の心を引くといふを引くの語の縁より曳舟の綱手と續けたり

棹の歌―船歌

朝妻船―是も遊女の縁に云ふ

戀しき人に近江―逢ふ意を掛く

載ち縫はぬ云々―古今集の歌

天地の開けしも云々―謡冊二等の國土を開き給ひし故事棹のしたゝりは矛の雫の意を受へたり

て よ、豐年月の行末を、はかるも棹の歌、うたひていざや遊ばん。

ワキ詞「いかに申し候。かよるめでたき折節に、そと御神樂を參らせられ候へ。ツレ詞「さらば御神樂を參らせうずるにて候。ツレ謡「こよとても室山かゆの神垣の、地謡「加茂の宮居はありがたや。（神樂）ツレ謡「月影の、地謡「月影の、更けゆくまよに風をさまれば、不思議や異香薫じつよ、和光の垂迹、韋提希夫人の、姿を現しおはします。玉のかんざし羅綾の袂、玉のかんざし羅綾の袂、風にたなびく瑞雲に乘じ、所は室の海なれや、山は上りて、上求菩提の機をすよめ、海は下りて、下化衆生の相をあらはし、五濁の水は、實相無漏の大海となつて、花ふり異香薫じつよ、相好まことに肝に銘じ、感涙袖を霑せば、はや明けゆくや春の夜の、はや明方の雲に乘りて、虛空にあがらせ給ひけり。

加茂の宮居―室の明神は加茂と同體

韋提希夫人―明神の本地佛

碇潛

梗概　平知盛舟人として現れ、壇浦の合戰に於ける能登守敎經の物語をなし、弔問を受く。更に後段安德天皇御入水のさまより、知盛碇を載きて海底に沈むさまを見す。（四番目）

シテ平知盛（前は舟人）　ツレ　二位尼　ワキ　旅僧

ワキ次第謡「雲をしるべのよそに見て、雲をしるべのよそに見て、月の行方を尋ねん。詞是は都方より出でたる僧にて候。さても平家の一門は、長門の浦にて果て給ひて候。我等も平家のゆかりの者にて候程に、一門の御跡を弔ひ申さんと思ひ、只今長門の國へと志し候。道行元よりも、浮世の旅に又出でて、浮世の旅に又出でて、宿定めなく捨つる身の、行く末なればそことしも、波に落ちくる汐風、早鞆の浦に著きにけり。早鞆の浦に著きにけり。詞急ぎ候程に、早鞆の浦に著きて候。暫く舟を相待ち、便船を乞はばやと

月の行方―西の方をいふ